

梅園三語 玄語 第六冊

小冊人部

安永四年本準拠

玄げん
語ご

小冊しょうさつ
人部じんぶ
天人てんじん

天人てんじん
給資きゅうし
言動げんどう
設施せつし
人道じんどう
天命てんめい

並なら
び
に
圖ず

並なら
び
に
圖ず

玄語

小冊 人部

天人

九七三二 天地は若く立す、

九七三三 天神は若く成る、

九七三四 大は能く小に散ず、

九七三五 小は能く大に居る、

九七三六 神本は氣物に合す、

九七三七 動植は神本を分つ、

九七三八 神氣は則ち性 情感に通じ、

九七三九 本氣は則ち精保し力立つに至れば、

九七四〇 則ち大小彼此は同じく相い有すと雖も。

九七四一 然れども既に其の物を分ちて之に竝ぶれば。則ち

九七四二 彼は本氣に専らなり、

九七四三 此は神氣に専らなり。蓋し

九七四四 植なる者は、艸木なり、水にして藻樹を爲す、

九七四五 堅なれば則ち土石にして、餘生は則ち菌寓なり、

日本 鎮西 三浦晉 安貞 著

九七四六
九七四七
九七四八
九七四九
九七五〇
九七五一
九七五二
九七五三
九七五四
九七五五
九七五六
九七五七
九七五八
九七五九
九七六〇
九七六一
九七六二
九七六三

動なる者は、鳥獸なり、水にして魚龍を爲す、

堅なれば則ち甲介にして、餘生は則ち蟲多なり、蓋し

動中感通の運は、是れ之を意と謂う。

感通は彼此を隔てずと雖も。

態を意に於て爲すに至りては、

則ち動は之を有し植は之を没す、

意を有すれば、則ち其の爲や、卒に意を用いざるを獲ず、

意を没すれば、則ち其の爲や、卒に意を捨てざるを獲ず、

無意の爲は則ち神、成にして誠なり、直に之を爲と謂う、

有意の爲は則ち人、成にして偽なり、亦た之を作と謂う、

蟲豸甲介。魚龍鳥獸。偕に同じく意を有す。則ち其の境や人なり。

然りと雖も。意爲の妙を極むるに至りては。

則ち變化鼓舞すること。孰れか人に優れん。故に

物よりして之を觀れば、則ち大は小を有して、而して小中は動植、並び立つ、

人よりして之を觀れば、則ち我は意爲の妙技を有す、以て天神の爲成に敵す、是に於てか。

含靈は人に屬す、

艸木は天に歸す、夫れ

人なる者は、萬物中の一物なり、

九七六四

意なる者は、萬氣中の一氣なり、

九七六五―六六

大は能く小に給す、故に小は以て大に應ず、

九七六七―六八

一は能く二に之く、故に散は終に専らにする所有り、是を以て。

九七六九

小は大に應ず、

九七七〇

植は動に反す、

九七七一

人は天地を開きて、而して本氣を生と爲す、

九七七二

神氣を意と爲す、

九七七三

天は、感通の神、營養の爲を有す、

九七七四

人は資りて心性の意、爲技の作と爲す、故に

九七七五

意なる者は、人の心性なり、

九七七六

作なる者は、人の爲技なり、

九七七七

情欲の天は、感求を運す、

九七七八

意智の神は、智通を運す、故に

九七七九

天なる者は、神爲天成なり、

九七八〇

有れば、則ち有り、

九七八一

無ければ、則ち無し、

九七八二

生ずれば、則ち生ず、

九七八三―八四

化すれば、則ち化す、
廼ち天なり。

九七八五
九七八六
九七八七
九七八八
九七八九
九七九〇
九七九一
九七九二
九七九三
九七九四―九五
九七九六
九七九七
九七九八
九七九九
九八〇〇
九八〇一
九八〇二
九八〇三

執りて隔たる者は。則ち有に拘わり無に泥す。生に執し死に惑う。
智に舞い物を弄す者は。有を無にし無を有にす。
生を不生とし。化を不化とし。枉げて摸索を費す。
常を以て度すれば。則ち變に差う。
己を以て比すれば。則ち物に違う。蓋し
氣の物に於るは。各成り各足らざる莫し。是れ物物の全なり。
耳目を有して視聽す。
手足を有して舞踏す。
意を有して思辨す。
技を發して營作す。是れ人の全なり。
他の含靈の如き。似たりと雖も。而も思辨營作に拙し。
拙しと雖も。而も彼に於て足る。
其の佗は則ち耳目鼻舌。神靈機智を假らずして足る。故に
腸胃無くして活す。
根株無くして生く。
氣息有らずして存す。
心思無くして動く。而して
蚊を見て蛇の行くを異む。

九八〇四

鳥を見て魚の潜むを訝る。

九八〇五

己を以て物を窺うなり。

九八〇六

營せずして爲す者は、神なり、

九八〇七

爲して意の無き者は、天なり、

九八〇八

人に在るの一氣は。精華にして神を爲す。

九八〇九

是れ惟だ人のみ有する者なり。

九八一〇

彼の執りて拘わる者は。

九八一〇

以爲らく己れ己に意を有す。而して視聴知辨す。

九八一〇

天も亦た必ず意を有して。而して視聴知辨せんと。

九八一三

己れ己に意を有す。而して愛憎黜陟す。

九八一四

天も亦た必ず意を有して。而して愛憎黜陟せんと。

九八一五

生時の情態は己に是の如し、

九八一六

死後の情態もまた是の如しと、

九八一七

猶お瞽の文彩を思想し。

九八一八

聾の律呂を思想するがごとし。

九八一九

人の動物に於る。同じく生の類なり。

九八二〇

而るも猶お且つ己を以て物に比す可からざるがごとし。

九八二一

況んや天をや。故に羅網を下して漁する者は。

九八二二
九八二三
九八二四
九八二五
九八二六
九八二七
九八二八
九八二九
九八三〇
九八三一
九八三二
九八三三
九八三四
九八三五
九八三六
九八三七
九八三八
九八三九

獲る所 失する所に勝らず。繒繳を引きて弋する者は。

中る所 逸する所に勝らず。

有意は以て之を得れば、則ち

無意は從いて之を失す

天の成る所なり。故に

耳目を以て視聽す。

心志を以て窺竅す。亦た難き哉。

惟だ無意にして爲す、故に涓埃の微も爲さざる莫し、

惟だ無作くして成る、故に覆載の大明も成らざる莫し、

天は能く容る、孰れか得て之を逃れん、

誠は能く成る、孰れか得て之を捨わん、

天なる者は、爲して意無し、

成して有せず、故に爲さざる莫し、

成らざる莫し、

人なる者は、之を爲に於て謀る、

之を成に於て營む、故に爲さざれば則ち息む、

成らざれば則ち敗る、

天は人に異なるに非ず、

九八四〇
九八四一
九八四二
九八四三
九八四四
九八四五
九八四六
九八四七
九八四八
九八四九
九八五〇
九八五一
九八五二
九八五三
九八五四
九八五五
九八五六
九八五七

人は天に分るる者有り、

人なる者は、意を運し營を爲す、

意爲を用いる者は、其の向う所に於て神巧なりと雖も、

其の爲す所に於て鼓舞すると雖も、

而も向わざる所に於ては則ち遺す、

其の爲す所に於て鼓舞すると雖も、

而も爲さざる所は則ち失す、

意作を舍つる者は、神巧を事とせずと雖も、

而も成らざる所莫し、

鼓舞を用いずと雖も、

而も爲さざる所莫し、

禽獸魚鼈なる者は、有意の物なり、

惟だ神巧の通を旋す所に於て少し、故に

作すこと有りと雖も而も爲さざること多し、

艸木土石なる者は、無意の物なり、

運營の爲技を假らず、

而して神誠の天神に任す、

故に人なる者は、智は能く物に通ず、

力は能く物に役す、

九八五八

天なる者は、通せざる所無し、

九八五九

役せざる所無し、

九八六〇

天なる者は、無意にして成る、

九八六一

人なる者は、有意にして作す、

九八六二

物に在れば、則ち神を以て天に對す、

九八六三

人に在れば、則ち人を以て天に對す、

九八六四―六五

其の分や如可。蓋し天地より萬物に至りて物に非ざる者無し。而して物中に物有り。

九八六六

有意は其の神を爲す、

九八六七

發作は其の技を爲す、

九八六八

是れ之を人と謂う。

九八六九

人は物中に在りて。

九八七〇

以て人に非ざるを者を觀れば。

九八七一

則ち皆な無意を以て物と爲す。

九八七二

是に於て彼の天神を合す。而して以て天を爲す。

九八七三

人なる者は、物中の一物なり、

九八七四

意なる者は、神中の一神なり、是の故に。

九八七五

天神の分を以てすれば、則ち人意も亦た神中の事なり、

九八七六

天人の分を以てすれば、則ち神爲も亦た天中の事なり、故に

九八七七―七八

大分だいぶんよりして之これを言いえ、則すなわち性せいを以もつて徳とくを爲なす、

九八七九

才さいを以もつて道どうを爲なす、

九八八〇―八一

人ひとよりして之これを言いえ、則すなわち我われの有意ういの神しんを以もつて徳とくを爲なすを以もつて

九八八二

彼かの無意むいの天てんの徳とくを爲なすを觀み、以もつて

九八八三

我われの不測ふそくの爲いを以もつて道どうと爲なすを以もつて

九八八四

彼かの無作むさくの成せいの天てんの道どうと爲なすを觀みる、

九八八五

天人てんじんは同おなじからずと雖いえども、而しかも其その氣きを爲なすは則すなわち同おなじ。

九八八六

氣きを爲なすは則すなわち同おなじと雖いえども、意いの有無うむを反はんす。故ゆえに

九八八七

天てんなる者ものは、無意むいにして爲なす、

九八八八

無作むさくにして成なる、

九八八九

人じんなる者ものは、有意ういにして爲なす、

九八九〇

作さくにして成ならず、

九八九一―九二

物ぶつを以もつて之これを分わかてば、天地てんち山海さんかい、

九八九三―九四

艸木土石そうもくどせき、意いを具ぐせざる者ものは、天てんの屬ぞくなり、

九八九五

鳥獸魚鼈ちようじゆうぎよへつ

九八九六―九七

介蝦蟲豸かいかちゆうち、意いを具ぐする者ものは、人じんの屬ぞくなり、

九八九八―九九

事じを以もつて之これを分わかてば、無意むいにして成なるは、天てんの事じなり、

九九〇〇

有意ういにして作さくすは、人じんの事じなり、

九九〇一
九九〇二
九九〇三
九九〇四
九九〇五
九九〇六
九九〇七
九九〇八
九九〇九
九九一〇
九九一一
九九一二
九九一三
九九一四
九九一五
九九一六
九九一七
九九一八

人は此を以て爲す、
天は此を以て成る、
死生通塞なる者は、天なり、
殺活予奪なる者は、人なり、
殺活予奪の爲は。死生通塞の成に遇す。
然り而して殺活予奪の人も。亦た彼と我とを隔つ。
我なる者は。我の之を如何ともす可き者なり。
我に非ざる者は。我の之を如何ともす可き所に非ず。
我の之を如何ともす可き者は、我より致せば、則ち我の人なり、
我の之を如何ともす可き所に非ざる者は、彼より至れば、則ち我の天なり、
且つ一身の立する所も。亦た神本のみ。
神氣は有意を以て發す、
本氣は無意を以て立す、
是に由りて之を觀るに。天人に大段四有り。
意を具する者を擧げて意を具せざる者に對する。一なり。
人を以て天に對する。二なり。
彼を以て我に對する。三なり。
本を以て神に對する。四なり。

九九一九

無意なる者は、天徳、人を以て之を觀れば則ち公なり、

九九二〇

無意なる者は、天徳なり、人は之に法らずんばある可からず、

九九二一

有意なる者は、人徳なり、人は之を修めずんばある可からず、故に

九九二二

人は其の人徳を修れば、則ち善に意有り、

九九二三

其の天徳に荒めば、則ち善に意無し、

九九二四

其の天徳に法れば、則ち不善に意無し、

九九二五

其の人徳に荒めば、則ち不善に意有り、故に

九九二六―二七

聖も亦た人なりと雖も、運用して以て物に體す。故に其の徳や天なり。

九九二八

若し女の有意を捨てて、以て事に無意に従い、

九九二九

彼の無意を捨てて、以て事に有意に従えと曰わば、則ち失す、

九九三〇

有意なる者は、人徳、天を以て之を考えれば則ち私なり、

九九三一

意なる者は、人の得て有する所の徳なり。

九九三二

之を呼びて無意と曰うと雖も、

九九三三

機を含み智を使う。惟だ

九九三四

有意に執る者は、天を知らざるなり、

九九三五

無意に任ずる者は、人を忘るるなり、

九九三六

善に意有れば、則ち不善に意無し、

九九三七

殺に意有れば、則ち活に意無し、

九九三八

擇えらびて宜よろしきに從したがう。是これ之これを修しゅうと謂いう。

九九三九

成なる者ものは天てん道どうなり、人ひとを以もつて之これを觀みれば則すなわち誠せいなり、

九九四〇

斐ひ然ぜんとして章しょうを天てん地ちに於おいて成せいす、

九九四一

粲さん然ぜんとして跡せきを往おう來らいに於おいて成せいす、

九九四二

微びも之これを隱かくさず、

九九四三

久きも之これを舍すてず、

九九四四

原げん原げんとして來きたる、

九九四五―四六

常じょう常じょうとして繼つぐ、天てんの道どうなり。

九九四七

今いま涓けん滴てきを海うみに棄すつるに、

九九四八

海かい水すい増ますと曰いわば、人ひと信しんぜずと雖いえども、而しかも誠せいの道どうなり、

九九四九

海かい水すい増まさずと曰いわば、人ひと之これを信しんぜずと雖いえども、而しかも欺ぎの事じなり、

九九五〇

冥めい冥めいは見み難がたし、

九九五一

昭しょう昭しょうは知しり易やすし、

九九五二

日にち月げつの明めいは、織せん毫ごうも暗あんを容いれず、是ここを以もつて穿せん鍼しんの隙げきも、明めいを通つうぜざる莫なし、

九九五三

造ぞう化かの行こうは、須しゆ臽けんも休きゆう息そくの間かん無なし、是ここを以もつて彈だん指しの頃けいも、逝ゆく者ものを駐とどめず、

九九五四

宇うち宙ちゆう萬まん分ぶん芥かい子しの一いちも。誠せい亡なくんば則すなわち之これが爲ために盡つきん。

九九五五

薰くんは薰くんを拵おわず、

九九五六

蕚ゆは蕚ゆを拵おわず、

九九五七
九九五八
九九五九
九九六〇
九九六一
九九六二
九九六三
九九六四
九九六五
九九六六
九九六七
九九六八
九九六九
九九七〇
九九七一
九九七二
九九七三
九九七四

宇宙に充ちて足らざる無し、

忽微に入りて贏餘無し、是れ

無意の公は、無爲の誠なり、

有意の爲は。則ち然らざるなり。

之を顯さんと欲すれば、則ち微を以て大を爲す、

之を隠さんと欲すれば、則ち大を以て微を爲す、

内は東を求めて、而して外は則ち西す、

爲は進を爲して、而して意は則ち退く、是を以て。

若し天地の轉持をして。人の有意の如くならしむれば。則ち

時有りて之を作す、

時有りて之を廢す、

之を轉じて已まず、

之を持して息わず、

之を爲すに悦ぶ、

之を繼ぐに倦む、

天人の反を觀る可し。

故に無意の吉凶を觀て。

以て有意の酬酢と爲す。

九九七五
九九七六
九九七七
九九七八
九九七九
九九八〇
九九八一
九九八二
九九八三
九九八四
九九八五
九九八六
九九八七
九九八八
九九八九
九九九〇
九九九一
九九九二

誠偽せいぎの分ぶんを知らざるなり。

若もし夫それ善ぜんを爲なして盡ことごとく福ふく有あらば、利り者しゃ先さきんじて爲なさん、

不善ふぜんを爲なして盡ことごとく禍か有あらば、怯きよう者しき先さきんじて避さげん、

那なんぞ君くん子しを待まちて以もつて之これを爲なさん。

不善ふぜんを爲なして福ふく多おほく、

善ぜんを爲なして禍か多おほければ、

人ひと 將はた何いかんか適ゆかん。蓋けだし

天てんなる者ものは、愛あい憎ぞう酬しゆう醋さくに意い無なし、

人じんなる者ものは、愛あい憎ぞう酬しゆう醋さくに意い有あり、

不善ふぜん人にんと雖いえども、而しかも積つめば則すなわち富とまざるを得えず、

善ぜん人にんと雖いえども、而しかも散さんずれば則すなわち貧ひんせざるを得えず、

暴ぼつ戾れいなりと雖いえども、而しかも強つよければ、則すなわち力ちから 争あらそ、争あい難がたし、

方ほう正せいなりと雖いえども、而しかも覆おほわるれば、則すなわち勢せい 支さえ難がたし、

事じは兩りやう全ぜんなること難かたし、

勢せいは平へいを持じすこと難かたし、

惟ただ誠せいの在ある所ところに於おいて成なるのみ。

有う意いを以もつて之これを矯ただす可べからず。

善ぜんなる者ものは、人ひとは偕ともに之これを欲ほつす、

九九九三
九九九四
九九九五
九九九六
九九九七
九九九八
九九九九
一〇〇〇
一〇〇〇一
一〇〇〇二
一〇〇〇三
一〇〇〇四
一〇〇〇五
一〇〇〇六
一〇〇〇七
一〇〇〇八
一〇〇〇九
一〇〇一〇

不善なる者は、人は偕に之を惡む
偕に欲す所の者は、衆之に歸す
偕に惡む所の者は、衆之を棄つ
理は勢を以て之を晦ます可からず、
心は力を以て之を服する可からず、
邪は之を屏わんと欲す、
正は之を擧げんと欲す、
仇は之を酬いんと欲す、
徳は之を報いんと欲す、
意の向う所。天は之を如何ともする能わず。是に於て。
人爲の天成に遇うも。其の遇の參差すること。市人の迭いに面するが如し。
竊鈎の人にして、竊鈎の禍を獲る、
分飯の人にして、分飯の福を獲る、
有司の察察たる者と雖も。尚お堪えざるなり。
縦い能く察察として之に堪うるも。
而も豈に有徳者の爲す所ならんや。
人の徳有りてすら。猶お且つ爲さず。
而るを之を天に望んで。

一〇〇二一
一〇〇二二
一〇〇二三
一〇〇二四
一〇〇二五
一〇〇二六
一〇〇二七
一〇〇二八

一善を行ないて、而して一報を求むる、
一不善を拾いて、而して一報を指さす、
天は豈に交易を以て道と爲さんや、
織毫の善不善に於ては、則ち之を省みず、
其の大なる者を以て之を禍福するとならば、
則ち苟安を以て謀と爲すなり、
天は豈に苟安を以て謀と爲さんや、
然り而して其の一毫の功過も。遂に拵う可からず。
猶お千鈞の衡。錙銖を増減して。人未だ覺らず。
衡未だ移らざるが如しと雖も。而れども冥冥として移る者は。
竟に拵う可からず。是に於て。
海に棄つるの涓滴は。終に之を没す可からず。
知らざる者は、以て冥冥と爲す、
知る者は、以て昭昭と爲す、
智愚の分るる所なり。是を以て
其の有力の者は、進みて權を移す、
無力の者は、退きて權を移す、
賢否の分るる所なり。

- 一〇〇二九
- 一〇〇三〇
- 一〇〇三一
- 一〇〇三二
- 一〇〇三三
- 一〇〇三四
- 一〇〇三五
- 一〇〇三六
- 一〇〇三七
- 一〇〇三八
- * 一〇〇三九
- * 一〇〇四〇
- 一〇〇四一
- 一〇〇四二
- 一〇〇四三
- 一〇〇四四
- 一〇〇四五
- 一〇〇四六

作さくなる者ものは人道じんどうなり、天てんを以もつて之これを考かんがえれば則すなわち偽ぎなり、

已すで一物いちぶつを爲なし、

已すで一氣いちきを爲なすは、

己おのれに有うするの氣物きぶつなり。

別べつして混有こんうする者ものを觀みれば。

則すなわち己おのれを有うする者ものは、各かく自じに私わたくしす。

己おのれを有うするの私わたくしよりして。而しかして

混有こんうする所ところの者ものを觀みれば。則すなわち彼かれや公こうなり。故ゆえに

我われの有う意いよりして。而しかして無む意いを天てんに於おいて謂いう。

有う意いの私わたくしよりして。而しかして公こうを彼かれに於おいて謂いう。

私しとは、人じん意いの謂いなり、

偽ぎとは、人じん爲いの謂いなり、故ゆえに

意いは天てん下かを安やすんずるに在あると雖いえど、而しかも天てんより之これを觀みれば、則すなわち私わたくしなり、

修おさめて聖せい人じんに至いたると雖いえど、而しかも天てんより之これを觀みれば、則すなわち偽ぎなり、

既すで己ひとに人ひとなり。私し偽ぎは公こう誠せいに反はんして。人ひとの賊ぞくを爲なす。是こゝを以もつて

人ひとの公こう誠せいや、天てんに法のつとるなり、

其その私し偽ぎや、人ひとに任まかすなり、

故ゆえに人ひとに對たいして天てんを言いう者ものは。則すなわち人ひとを除のぞけば則すなわち其その對たいを失しつす。

一〇〇四七
一〇〇四八
一〇〇四九
一〇〇五〇
一〇〇五一
一〇〇五二
一〇〇五三
一〇〇五四
一〇〇五五
一〇〇五六
一〇〇五七
一〇〇五八
一〇〇五九
一〇〇六〇
一〇〇六一
一〇〇六二
一〇〇六三
一〇〇六四

神しんに對たいするの天てん。機きに對たいするの誠せいの如ごときは。人ひとを假からずして存ぞんす。

意い智ち情じょう欲よくなる者ものは、我われの意いなり、

運うん用よう言げん動どうなる者ものは、我われの作さくなり、

分わかてば。則すなわち運うん用ようは爲いを爲なす、

言げん動どうは技ぎを爲なす、

夫それ内うちに有うする者ものは、徳とくなり、

外そとに發はつする者ものは、道どうなり、

神しんは内ない具ぐの心しん性せいを運うん用ようして。

以もつて言げん動どうの爲いを外そとに於おいて發はつす。

人ひとは有う意いにして殺さつ活かつ予よ奪だつを爲いす、

天てんは無む意いにして死し生せい通つう塞そくを成せいす、

天てん人じんの交こう接せつ。其その事じは無む窮きゆうなり。此この故ゆえに

修しゅうする者ものは則すなわち志こころざし

治おさめる者ものは則すなわち業ぎようし、人じん爲いを立りつす、

往ゆく者ものは則すなわち當あたり

來きたる者ものは則すなわち遇あい 天てん命めいを成せいす、

人じん爲いは則すなわち天てん準じゆんの在ある所ところなり、

天てん命めいは則すなわち人じん事じの歸きする所ところなり、

一〇〇六五

人事の重きは。生化天命なり。

一〇〇六六

生化なる者は。聚散解結の往來なり。故に

一〇〇六七

生化は天命の外に非ず。是を以て。

一〇〇六八

生化なる者は、神爲なり、

一〇〇六九

天命なる者は、天成なり、

一〇〇七〇

神爲を以てすれば、則ち往來は主にして、而して當遇は客なり、

一〇〇七一

天成を以てすれば、則ち當遇は主にして、而して往來は客なり、

一〇〇七二

此の故に。感應往來の生化、

一〇〇七三

當遇會違の天命、以て分ち以て合す。

一〇〇七四

常變は無窮なり。是を以て。時の没體、

一〇〇七五

物の露體、則ち異なると雖も。而も

一〇〇七六

來れば則ち之を生じ、往けば則ち之を化す、往來は主なり、

一〇〇七七

來れば則ち之に當り、往けば則ち之に遇う、當遇は主なり、

一〇〇七八

人は神を以て軀を御して。自佗を隔つ。

一〇〇七九

而して各おの其の神を運す。故に

一〇〇八〇

内に具する者より擇べば、則ち善惡是非存す、

一〇〇八一

枝幹有り、榮枯有るは、木の同くする所なり、

一〇〇八二

曲直疎密、壽夭肥瘠は、木の獨りする所なり、

- 一〇〇八三一八四 人は其れ孰れか獨りする者無からん、獨りする者 同くする者に勝てば、則ち小人なり、
- 一〇〇八五 孰れか同くする者無からん、同くする者 獨りする者に勝てば、則ち君子なり、
- 一〇〇八六 同じくする者無くんばある可からざるなり。故に
- 一〇〇八七―八八 其の爲に未だ盡く善に出でざれども、其の大なる者 立すれば、則ち令名を失わず、
- 一〇〇八九―九〇 其の爲に未だ盡く不善に出でざれども、其の大なる者 誤まれば、則ち醜名を免れず、
- 一〇〇九一 不善なる者と雖も、豈に細行の拾う可き無からんや、
- 一〇〇九二 善なる者と雖も、亦た豈に瑣事の貶す可き無からんや、故に
- 一〇〇九三 其の美を拾いて之を譽むれば、則ち以て其の不美を掩う可し、
- 一〇〇九四 其の不美を擧げて以て之を毀れば、則ち以て其の美を掩う可し、
- 一〇〇九五 叱咤は、戾聲なり、而れども愛する者、豈に叱咤の聲 無からんや、
- 一〇〇九六 唯喩は、和聲なり、而れども戾する者、豈に唯喩の聲 無からんや、
- 一〇〇九七 巧みに美を銜えば、則ち固に不善と雖も、而も世は必ず沾沾として以て相い譽む、
- 一〇〇九八 不幸にして不美を爲さば、則ち固善と雖も、而も世は必ず明暘として以て胥に訾る、
- 一〇〇九九 密に窺い陰に謀り、富を致し貴を致す、之を見れば則ち秩然として序有り、
- 一〇一〇〇 之を望めば則ち嚴然として儀有り、
- 一〇一〇一 之に就けば則ち敬して恵む、
- 一〇一〇二 之を去れば則ち愛して思う、
- 一〇一〇三 之を訟うれば則ち能く折る、

一〇一〇四
一〇一〇五
一〇一〇六
一〇一〇七
一〇一〇八
一〇一〇九
一〇一一〇
一〇一一一
一〇一一二
一〇一一三
一〇一一四
一〇一一五
一〇一一六
一〇一一七
一〇一一八
一〇一一九
一〇一二〇
一〇一二一
一〇一二二
一〇一二三

之を諫むれば則ち能く聴く、

孰れか其の不善を知らん、

微を知り機を見て、悪を未萌に截り、
亂を未發に誅す

慮かること有りて或いは恕せず、

憂うること有りて或いは假さず、

言いて時好に投ぜず、

立ちて時勢に趨かず、

孰れか其の善を知らん、

聲主 慎しむ可し。豈に輕がるしく毀譽を爲し易からんや。
豈に輕がるしく毀譽を聽き易からんや。

瑜は瑕を掩わざる有り、然れども玉は則ち玉なり、

文は以て質を飾る有り、然れども石は則ち石なり、

噫 玉は 相し易からず、

石も亦た辨じ易からず、

外に發する者に就きて觀れば、則ち守禦虚實作る

動の事は、守禦より出づ、

言の事は、虚實より出づ、

戲調すれば則ち己れに誇る、

一〇二二三
一〇二二四
一〇二二五
一〇二二六
一〇二二七
一〇二二八
一〇二二九
一〇二三〇
一〇三三一
一〇三三二
一〇三三三
一〇三三四
一〇三三五
一〇三三六
一〇三三七
一〇三三八
一〇三三九
一〇一四〇

抗衡すれば則ち他を察せず、

争えば則ち競う、

妬めば則ち忌む、

之を内にすれば則ち護る、

之を外にすれば則ち訐る、

守禦の間。聲主は參差す。此の故に。

名を正して實を正さず、正聲を以て人を欺くなり、

實を枉げて名を直す、直聲を以て自から売るなり、

實を務めずして名を張る、虚聲を以て天を欺くなり、

實を有して名を惡む、實聲を以て人を尤むるなり、

世に未だ主を知らずして謾りに之を呼ぶ者有り、

主に遇いて未だ名を得ざる者有り、

同主にして異聲なる者有り、

同聲にして異主なる者有り、是を以て。

激言は實を過ぐ。

諛言は實を遷す。

暴言は實を傷つく。

佞言は實を溢す。

一〇一四一
一〇一四一
一〇一四三
一〇一四四
一〇一四五
一〇一四六
一〇一四七
一〇一四八
一〇一四九
一〇一五〇
一〇一五一
一〇一五二―五三
一〇一五四
一〇一五五
*
一〇一五六―五七
一〇一五八
一〇一五九
一〇一六〇

惑言は實を失す。

盗言は實を偷す。

淫する者は其の言私す。

窮する者は其の言遁る。

忌む者は其の言沮む。

畏る者は其の言縮む。

毀譽褒貶は聲なり、

善惡美醜は主なり、

主は能く聲を爲すと雖も、聲も亦た能く主を移す

聲主稱えれば則ち可なり、

稱えざれば則ち冤憤忿怒、誤謬過失、此に由りて興る。故に

自から藏する所の者は、石なり、而して諛人は其の名を玉にして以て媚を献ず、

眩者は知りて自から強いる、

愚者は知らずして之を宝とす、

其れ惟だ智者や、之を聞きて慚はず、是れ聲の美を惡むに非ず、

虚名の主に益無きを惡むなり、

自から藏する所の者は、玉なり、而して

妬者は其の名を石にして以て之を排す

- 一〇一六一―一六二
- 一〇一六三―一六五*
- 一〇一六五
- 一〇一六六
- 一〇一六七
- 一〇一六八
- 一〇一六九
- 一〇一七〇
- 一〇一七一
- 一〇一七二
- 一〇一七三
- 一〇一七四
- 一〇一七五
- 一〇一七六
- 一〇一七七
- 一〇一七八
- 一〇一七九
- 一〇一八〇

一〇一六一―一六二 偏者は知りて慍る。愚者は知らずして棄つ。

一〇一六三―一六五* 其れ惟だ智者や、之を聞きて自若たり、是れ名の不美を愛するに非ず。

一〇一六五 虚名の主を累わずに足らざるを知るなり。

一〇一六六 苟くも聲は主に稱わざれば。

一〇一六七 則ち美醜は同じく不智に歸す。

一〇一六八 褒揚貶抑。實と乖馳す。

一〇一六九 君子は豈に爾く爲さんや。是を以て

一〇一七〇 名を以て主を蔽う者は、不肖なり、

一〇一七一 名を以て主を疑う者は、不明なり、

一〇一七二 名を以て主を蔽う者は、又た名を以て主を浮す、

一〇一七三 名を以て主を疑う者は、又た名を以て主を信ず、

一〇一七四 以て人に上り難し、

一〇一七五 以て人に下り難し、

一〇一七六 以て事に通ず可からず、

一〇一七七 以て物に體す可からず、

一〇一七八 人を以て人を誤るも。其の失は猶お斯くの如し。

一〇一七九 況んや人を以て天を誤る者をや。

一〇一八〇 聲主は稱わざれば。則ち以て事物を正すに足らず。

一〇一八一 豈あに天人てんじんを語る可べけんや。

一〇一八二 夫それ質しつの有う無むなる者ものは、天地てんちの分わかつ所ところなり、

一〇一八三 意いの有う無むなる者ものは、天人てんじんの分わかつ所ところなり、故ゆえに

一〇一八四 天てんなる者ものは、無む意いにして爲なす、作さくせずして成なる、

一〇一八五 人じんなる者ものは、有う意いにして作さくす、作さくせずして成ならず、

一〇一八六 質しつの有う無むなる者ものは、天地てんちの分ぶんなり、

一〇一八七 意いの有う無むなる者ものは、天人てんじんの分ぶんなり、

一〇一八八 天人てんじんは氣きを同おなじくす。而しかして

一〇一八九 人じんなる者ものは、有う意いにして作つくる、

一〇一九〇 天てんなる者ものは、無む意いにして爲なす、

一〇一九一 其その爲なすこと豈あに同おなじからんや。

一〇一九二 夫それ自じ使しなる者ものは、勢せい力りきの分ぶんなり。

一〇一九三 夫すいかを舉あげて之これを言いうに。之これをして水みずにして卑ひくきに就つかしむ、

一〇一九四 之これをして火ひにして高たかきに之ゆかしむ、是これ神しん爲いの力りきの然しから使しむるなり、

一〇一九五 水みずの卑ひくきに就つかざるを得えず、

一〇一九六 火ひの高たかきに之ゆかざるを得えず、是これ天てん成せいの勢せいの自おのずかしか然しかるなり、

一〇一九七 人ひとは、氣き物ぶつなり。氣きなる者ものは必かならず爲なす。

一〇一九八 然しかり而しかうして有う意いの氣き爲いは、無む意いの氣き爲いと。同おなじからざるなり。故ゆえに

一〇一九九 然しかり而しかうして有う意いの氣き爲いは、無む意いの氣き爲いと。同おなじからざるなり。故ゆえに

- 一〇二〇二 混言すれば則ち同じく之を爲と言うと雖も。
- 一〇二〇三 爲 自から殊なる有り。故に之を分ちて。
- 一〇二〇四 無意の爲は、之を爲と爲す、
- 一〇二〇五 有意の爲は、之を作と爲す、
- 一〇二〇六 分ちて人作と爲すと雖も。元と神爲中の事なり。故に
- 一〇二〇七 或いは爲作を通じて言えは。
- 一〇二〇八 夫れ氣爲天成は。事 會違に屬す。
- 一〇二〇九 其の間や。譬えば越人の胡に之き。胡人の越に之くが如し。
- 一〇二一〇 其の之くは、氣爲なり、而して
- 一〇二一一 其の會違は、天成なり、
- 一〇二一二 天成とは何ぞ。其の會するや、或いは江に於てす、或いは河に於てす、
- 一〇二一三 其の違するや、或いは江に於てす、或いは河に於てす、是を以て。
- 一〇二一四 天成は氣爲に外ならずと雖も。而れども
- 一〇二一五 天成は氣爲と同じからざるなり。是を以て。
- 一〇二一六 爲さざれば則ち成らずと雖も。而も成は則ち爲ならず。故に
- 一〇二一七 明暗動靜なる者は、氣なり、爲を以て言う、
- 一〇二一八 晝夜冬夏なる者は、天なり、成に由て言う、
- 一〇二一九 爲さざれば則ち成らず、故に天は氣に於て一なり、
- 一〇二二〇

一〇二二一
一〇二二二
一〇二二三
一〇二二四
一〇二二五
一〇二二六
一〇二二七―二八
一〇二二九
一〇二三〇
一〇三三一
一〇三三二
一〇三三三
一〇三三四
一〇三三五
一〇三三六
一〇三三七
一〇三三八
一〇三三九―四〇

成るは則ち爲すに非ず、故に氣は天に非ざるなり、是の故に。

天人を分ちて之を言えは、則ち氣爲は天中の事なり、

天神を分ちて之を言えは、則ち人爲は氣中の事なり、

是れ各主各聲の統ぶる者有る所なり、故に

通塞生化は、氣之を爲す、

予奪殺活は、人、之を爲す、

而して其の成なる者は爲に非ず。故に氣道なる者は爲す、

或ひと曰く成有れば則ち敗有り、
天道なる者は成る、

天道は獨り成のみ有りて敗無きかと。

曰く。天成なる者は、人爲と對する者なり。

成敗は經營中の事なり。

猶お地に對するの天と。人に對するの天と同聲にして。

而して主を同じくせざるがごとしと。

且つ成れば敗るる有り。爲の已むこと有ると同じ。夫れ

人なる者は、意を以て度る、

作を以て營む

其の生を欲するに方りてや、生を以て成と爲し、死を以て敗と爲す、

- 一〇二四一―四二
- 一〇二四三
- 一〇二四四
- 一〇二四五
- 一〇二四六
- 一〇二四七
- 一〇二四八
- 一〇二四九
- 一〇二五〇
- 一〇二五一
- 一〇二五二
- 一〇二五三
- 一〇二五四
- 一〇二五五
- 一〇二五六
- 一〇二五七
- 一〇二五八
- 一〇二五九

死を欲するに方りてや、死を以て成と爲し、生を以て敗と爲す、

意の向う所に因りて。而して主轉じて聲換わる。

之を活せば則ち活成る。

之を殺せば則ち殺成る。

是れ殺活同じく成るなり。是を以て。

天の成は爲と居を同じくす。故に成らざる莫きなり。

夫れ人の成は。敗と對を爲す。

故に成有り不成有り。

故に不成と曰う。是を以て。

天より之を觀れば、人爲と氣爲とは、同一事にして、以て天成に對す、

人より之を觀れば、則ち氣は之を爲し、而して天は之を成す、

我が作中の成敗と對を爲す、

氣爲の天成と對すれば、

譬えば猶お東西は、天なり、

升降は、地なりと曰うがごとし、

正當平分を以て言う者なり、

氣爲天成を合して天成なり、而して人爲と對する者は

譬えば猶お雲雨も亦た東西する者と同じく天なりと曰うがごとし、

- 一〇二六〇 我われよりして分わかつなり、
- 一〇二六一―六二 物ぶつは分わかれ體たいは備そなわる。人ひとは天てんに交こうす、
- 一〇二六三 我われは彼かれに接せつす、
- 一〇二六四―六五 天人てんじんぶつ物ぶつ我がの間かん。心性しんせいの神靈しんれいは、爲いぎに感運かんうんす、
- 一〇二六六 天神てんこんの爲成いせいは、彼我ひがに交接こうせつす、
- 一〇二六七 意智いちは、情じょうの適否てきひなり、
- 一〇二六八 智辨ちべんは、事じの當否とうひなり、故ゆえに
- 一〇二六九 虚實きょじつしゆぎよ守禦しゆぎよの間かん。善惡ぜんあく是非ぜいひを生しやうず。故ゆえに
- 一〇二七〇 人ひとは虚實きょじつしゆぎよ守禦しゆぎよを以もつて。善惡ぜんあく是非ぜいひに當あたる。故ゆえに
- 一〇二七一 殺活さつかつ予奪よだつの事じ有あり。成せい功こうを天てんに歸きす。
- 一〇二七二 夫それ天てんなる者ものは。萬物ばんぶつ往來おうらいす。而しかして吉凶きつこう失得しつとくす。
- 一〇二七三 其その爲いふ不測ふそくにして、其その變へんは無窮むきゆうなり、故ゆえに神しんなり、
- 一〇二七四 其その成せいは辞じす可べからずして、其その誠せいは拵おほう可べからず、故ゆえに天てんなり、
- 一〇二七五 物ぶつなる者ものは、天てんの體たいを以もつて整齋せいせいして成なるなり、
- 一〇二七六 事じなる者ものは、神しんの用ようを以もつて爲なして變錯へんさくするなり、此この故ゆえに。
- 一〇二七七―七八 天人てんじんは物ぶつにして、而しかして爲成いせいは事じなり、
- 一〇二七九 物ぶつは、則すなわち性せいを有うし才さいを發はつす、
- 一〇二八〇 事じは、則すなわち氣きを交こうし體たいを接せつす、

- 一〇二八一 其の無意を有意にして、以て作を天に望む
- 一〇二八二 趨舎を己に同じくして、以て成を人に求む
- 一〇二八三 望みて遂ざれば則ち怨む
- 一〇二八四 求めて得ざれば則ち尤む
- 一〇二八五 天人を知らざる者なり。
- 一〇二八六 感應は、氣の往來なり、
- 一〇二八七 酬酢は、體の往來なり、
- 一〇二八八 是を以て。人は作ること有れば。
- 一〇二八九 則ち物を取りて己の有と爲す。
- 一〇二九〇 人なる者は、物を身の外に取りて、以て之を有す、
- 一〇二九一 物なる者は、物を身の外に取る有りと雖も、而も之を有せず、
- 一〇二九二 是れ人と物との分なり。故に
- 一〇二九三 土地を取りて以て之を有する者は則ち君なり、
- 一〇二九四 之を有すること能わざる者は則ち民なり、
- 一〇二九五 貨財を取りて以て之を有する者は則ち富なり、
- * 一〇二九六 之を有すること能わざる者は則ち貧なり、
- 一〇二九七 治亂なる者は、取舍予奪の事なり、
- 一〇二九八 興廢なる者は、失得存亡の事なり、

一〇二九九

無ければ則ち之を得るを謀る、

一〇三〇〇

有れば則ち之を失うを恐る、

一〇三〇一

得て之を有すれば、則ち意満ちて驕る、

一〇三〇二

求めて得ざれば、則ち心沮みて苦しむ、是を以て。

一〇三〇三

其の取るや人豫えて我れ之を取る有り、

一〇三〇四

人惜みて我れ之を奪う有り、

一〇三〇五

人護りて我れ之を竊む有り、

一〇三〇六

人拒みて我れ之を害する有り、

一〇三〇七

或いは欺き或いは劫かす、

一〇三〇八

窮達榮辱は之に繋がる、

一〇三〇九

喜怒哀樂は之に由る、

一〇三一〇

治亂興廢は之に本づく、

一〇三一

貴賤貧富は之に分る、

一〇三一二

而して其の物は則ち人に非ざるなり。

一〇三一三

水火艸木なる者は、皆な天なり、

一〇三一二

水を飲みて以て渴きを医す、

一〇三一五

艸を茹でて以て饑えを療す、

一〇三一六

火を鑽りて烹、木を剉りて以て巢づくる者は、皆な人なり、

一〇三二七―一八

人を以て天を窺う。則ち皆な人の爲に之を設くるが如し。

一〇三二九

然れども無意は用を有意に期するに非ず。

一〇三二〇

有意は無意の物をして。能く用を己に於て爲さしむるなり。

一〇三二一

左足を生ずるは、豈に右足の爲ならんや、

一〇三二二

右手を生ずるは、豈に左手の爲ならんや、

一〇三二三

牙蛙の爲にして歯を生ぜず、

一〇三二四

蟻蝨の爲にして膚を生ぜず、是を以て。亦た

一〇三二五

虎狼の爲に人を生ぜず、

一〇三二六

暴主の爲に民を生ぜず、

* 一〇三二七

萬物は相い依る。而して各足らざる者無し。

一〇三二八

若し人の爲にする有りと曰わば。則ち天の人に私するなり、

一〇三二九

人を以て天を窺うなり、

一〇三三〇

故に往來聚散。生化消長。有無小大。美醜強弱を成す者は。天なり。

一〇三三一

喜怒愛憎。欲惡親疏。酬酢黜陟。分別思索。機智變巧なる者は。人なり。

一〇三三二

有意なれば則ち彼の來たる者聚まる者、

一〇三三三

生ずる者長ずる者、

一〇三三四

有する者大なる者、

一〇三三五

美なる者強なる者を觀れば、則ち之を喜び之を愛し、之を欲し之に親しむ、

一〇三三六

彼の往く者 散ずる者、

一〇三三七

化する者 消える者、

一〇三三八

無なる者 小なる者、

一〇三三九

醜なる者 弱なる者を觀れば、則ち之を怒り之を憎み、之を惡み之を疏んず、

一〇三四〇

是れ天人の相い應ずる所と雖も、而も其の合に非ざるなり。

(PA 029)

一〇三四一

應と不應と。吉凶失得出づ。而して

一〇三四二

治亂興廢定まる、

一〇三四三

賢愚邪正分るる、

一〇三四四

惟れ有意を以て無意なる者を觀て。人を以て天を窺うなり。之を窺察と謂う。

一〇三四五

美醜は物に在り、天なり、

一〇三四六

美醜を分つは我に在り、人なり、故に

一〇三四七

美物に羨有らず、

一〇三四八―四九

醜物に不足靡し、本と美醜に意無ければなり、

一〇三五〇

美なれば則ち自から足る、

一〇三五十一―五二

醜なれば則ち満たず、已に美醜に意有ればなり、是を以て

一〇三五三―五四

美人は、之を鑑るに鏡を以てし、之を方ふるに醜を以てし、始めて能く其の美を分つ、

一〇三五五―五六

醜人は、之を鑑るに鏡を以てし、之を方ふるに美を以てし、始めて能く其の醜を分つ、

一〇三五七

既已に意を以て之を分てば。

- 一〇三五八
- 一〇三五九
- 一〇三六〇
- 一〇三六一
- 一〇三六二
- 一〇三六三
- 一〇三六四
- 一〇三六五
- 一〇三六六
- 一〇三六七
- 一〇三六八
- 一〇三六九
- 一〇三七〇
- 一〇三七一
- 一〇三七二
- 一〇三七三
- 一〇三七四
- 一〇三七五
- 一〇三七六
- 一〇三七七
- 一〇三七八
- 一〇三七九

則ち美者は其の美を矜り、醜者は醜を羞つ、

未だ意有りて醜を分たざれば、

何を以てか其の美を矜るを爲さん、

未だ意有りて美を分たざれば、

何を以てか其の醜を羞るを爲さん、

美醜は、物なり、生に萌し、形に成る、

愛憎は、人なり、機に分れ、勢に長ず、是の故に。

美醜無くんば則ち己まん、美有れば則ち醜の無きこと能わず、

醜有れば則ち美の無きこと能わず、

善悪無くんば則ち己まん、善有れば則ち悪の無きこと能わず、

悪有れば則ち善の無きこと能わず、

故に猫狗は食を争うに方りては、

相い嚼みて餘怒無し、是れ未だ始めより彼の親しむ可きを知らざるなり、

食い盡すに方りては、

相褻して餘愛無し、亦た未だ始めより彼の疏んず可きを知らざるなり、

未だ親に意有らず、奚んぞ疏を嫌わん、

未だ疏に意有らず、奚んぞ親を厭わん、

美醜は無意に成る、

一〇三八〇

善惡は有意に分つ

一〇三八一

今 其の有意に於て分るる者を以て。

一〇三八二

諸を無意に求む。不通を致す所なり。然り而して

一〇三八三

美醜なる者は、有形の物なり、

一〇三八四

善惡なる者は、無象の意なり、

一〇三八五

美は必ずしも善ならず、

一〇三八六

醜は必ずしも惡ならず、

一〇三八七

錯綜は以て章を成すなり。

一〇三八八―九〇

故に彼の往來聚散。生化消長。云云なる者を觀て。

一〇三九一

是非善惡を分別し。酬酢黜陟を指示す。

一〇三九二

似たりと雖も。夢思夢語。達者は與らず。

一〇三九三

道傍に一木片有り。

一〇三九四

過ぐる者は以て棄材と爲して收めず。

一〇三九五

困者有りて。取りて以て枕と爲して憩う。

一〇三九六

重ねて過ぐる者は。取りて以て屐と爲す。

一〇三九七

乞兒有り。又た餘片を拾いて以て之を薪とす。

一〇三九八

棄てて收めざれば。則ち棄材なり。

一〇三九九

臥して之を籍けば。則ち果たして枕なり。

一〇四〇〇

剷りて之を履けば。則ち果たして履なり。

一〇四〇一

燧を鑽りて之を火にすれば。則ち果たして薪なり。

一〇四〇二

片木は棄不棄に意無し、

一〇四〇三

用不用に意無し、

一〇四〇四

棄つれば則ち棄材なり、

一〇四〇五

用うれば則ち用材なり、

一〇四〇六

有意を以て之を觀れば。宛も棄材の如し。

一〇四〇七

宛も用材の如し。

一〇四〇八

宛も供枕の如し。

一〇四〇九

宛も供履の如し。

一〇四一〇

宛も供薪の如し。是の故に。

一〇四一一

論辨は苟くも好む所に僻し。従う所に淫すれば。

一〇四一二

果たして明據有りと雖も。亦た夢のみ。

一〇四一三

是の故に。君子は天徳に通ず、

一〇四一四

天道を奉ず、

一〇四一五

人徳を修む

一〇四一六

人道を治む

一〇四一七

心の癩し目の盲する所有れば。

一〇四一八 則ち竟に此に出づる能わず。是の故に。

一〇四一九 人は混混に處し。

一〇四二〇 祭祭に應ずれば。則ち之を用いるに盡きる無し。

一〇四二一 祭祭を敷えて。而して混混を見ず。智力は將に窮せんとす。

一〇四二二 混として祭たらず。

一〇四二三 虚を踏み空に駕す。

一〇四二四 風を捕え影に繋く。

一〇四二五 事物を贅瘤にす。

一〇四二六 彝倫を土塊にす。

一〇四二七 祭として混ぜず。

一〇四二八―二九 死生に惑いて。物と我とを隔つ。

一〇四三〇 己れ能せざれば。則ち人をして之を能く使む。己れの能なり。

一〇四三一 己れ達せざれば。則ち人をして之を達せ使む。己れの達なり。

一〇四三二―三三 己れ能わざれば。則ち其の不能を護して。人の能を嫉む。焉んぞ得て其の不能を護らん。

一〇四三四―三五 己れ達せざれば。則ち其の不達を悪んで。人の達を妨ぐ。焉んぞ己れの達を得ん。

一〇四三六 物と我と相い通ずれば。則ち兩手の相い護するが如し。

一〇四三七 隔つれば。則ち矮人の自から厭うが如し。

一〇四三八 禍福に驚き。吉凶に困しむ。

一〇四三九
一〇四四〇
一〇四四一
一〇四四二
一〇四四三
一〇四四四
一〇四四四
一〇四四六
一〇四四七
一〇四四八
一〇四四九
一〇四五〇
一〇四五一
一〇四五二
一〇四五三
一〇四五四
一〇四五五
一〇四五六
一〇四五七
一〇四五八

一郷に火有り。家家 老を扶け幼を携う。

蓬累負荷して奔る、

貧人有り。佗の室を借りて居る。

亦た妻子無し。火の起るを熟視し。

徐ろに起て緩やかに避け。塗に一壺の遺りたるを見て。

因りて傾けて之を飲み。頽然として酔い。恬然として觀る。

是の人は初め慶賀福澤を積まず。

是の日に於てか。失も無く憂いも無し。

是の日に大憂の人は、

佗の日に大歡の人は、

是の日に少失の人は、

佗の日に少得の人は、 故に

得て失わざるを欲し、

生きて死なざるを欲するは、

愚に非ざれば則ち妄なり。

知りて之を厭い。吉凶得失の境を出でて。

高踏して顧みざるも。亦た世と異なるなり。

知りて惑わず。能く其の間に處す。

- 一〇四五九
- 一〇四六〇
- 一〇四六一
- 一〇四六二
- 一〇四六三
- 一〇四六四
- 一〇四六五
- 一〇四六六
- 一〇四六七
- * 一〇四六八
- 一〇四六九
- 一〇四七〇
- 一〇四七一
- 一〇四七二
- 一〇四七三
- 一〇四七四
- 一〇四七五
- 一〇四七六

謂う可し 之を得なりと。

吉凶の相い依り。禍福の相い根ざすは。事の常なり。是の故に。

辱の道を以てして榮を求め。

損の道を以てして益を求め。

死の道を以てして生を求め。

危の道を以てして安を求むるは。

哲人の畏るる所にして。衆人の履む所なり。

之を動かせば則ち纏う

之を轉ずれば則ち糊す 故に

夫れ其の象形を熟視す。

其の聲音を熟聽す。

其の情性を熟識す。

此を以て之を呼ぶも。猶お且つ其の主を誤る。

況んや其の象形。目の洞す可きに非ざるなり。

其の聲音。耳の嗽す可きに非ざるなり。

其の情性。模索思量す可きに非ず。

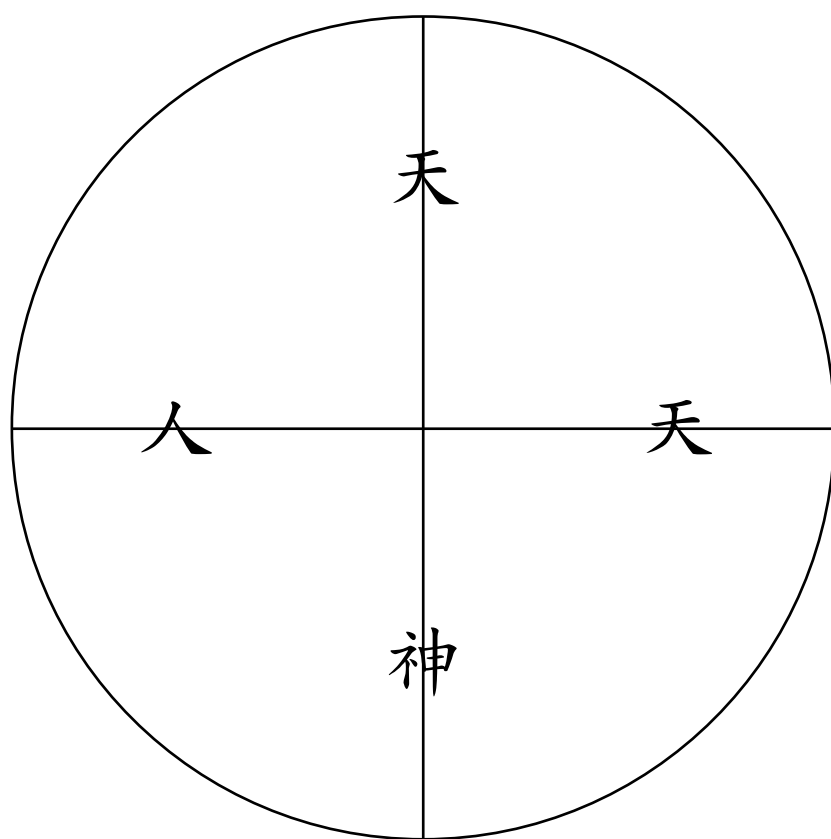
之を順呼して應ぜず、

之を逆呼して戻らず

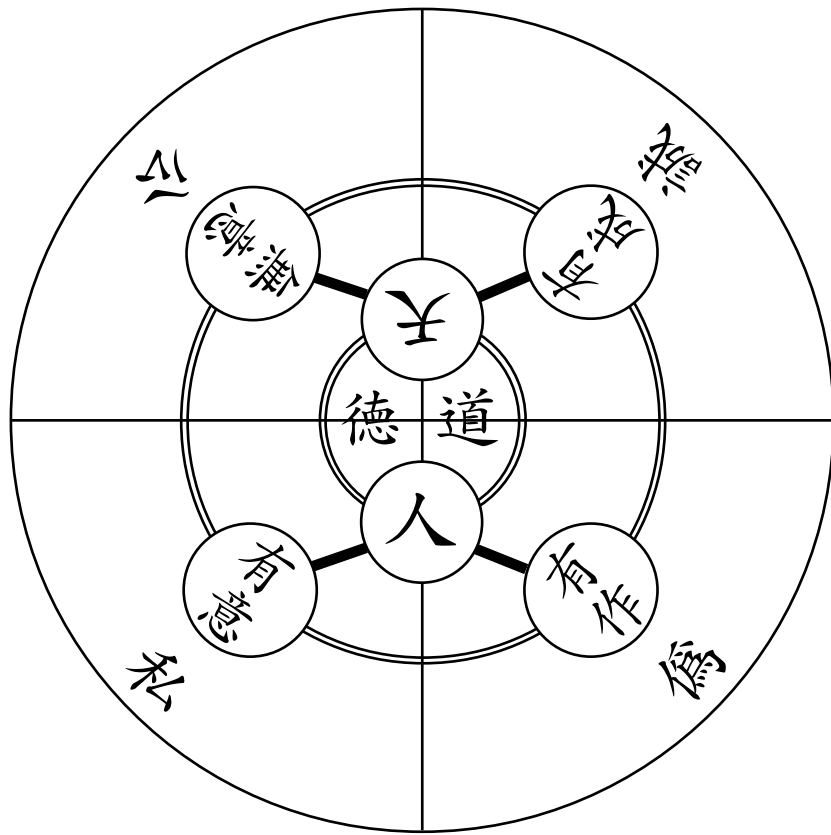
一〇四七七
一〇四七八
一〇四七九
一〇四八〇
一〇四八一
一〇四八二

是を以て之を天地の主、萬物の祖と爲せども、
之を瓦礫糞壤と爲せども、而も賤を加えず、
之を捨つれば則ち髣髴として手に在り、
之を取れば則ち洪蕩として無垠なり、
然れば則ち玄も亦た不玄なり、
不玄も亦た玄なり、

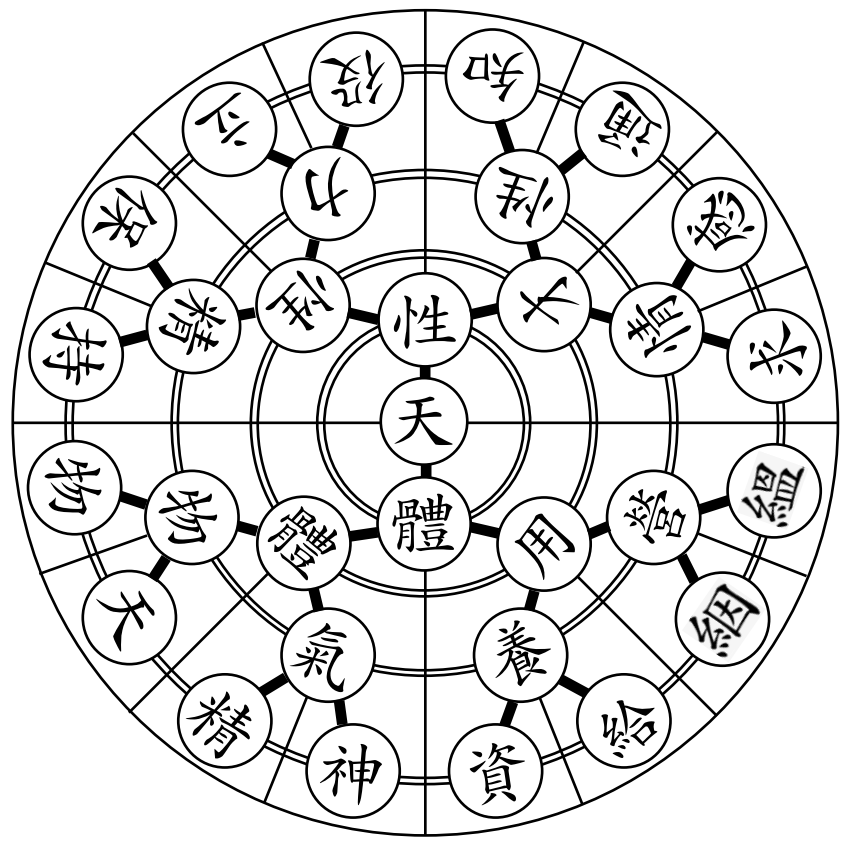
天神天人圖

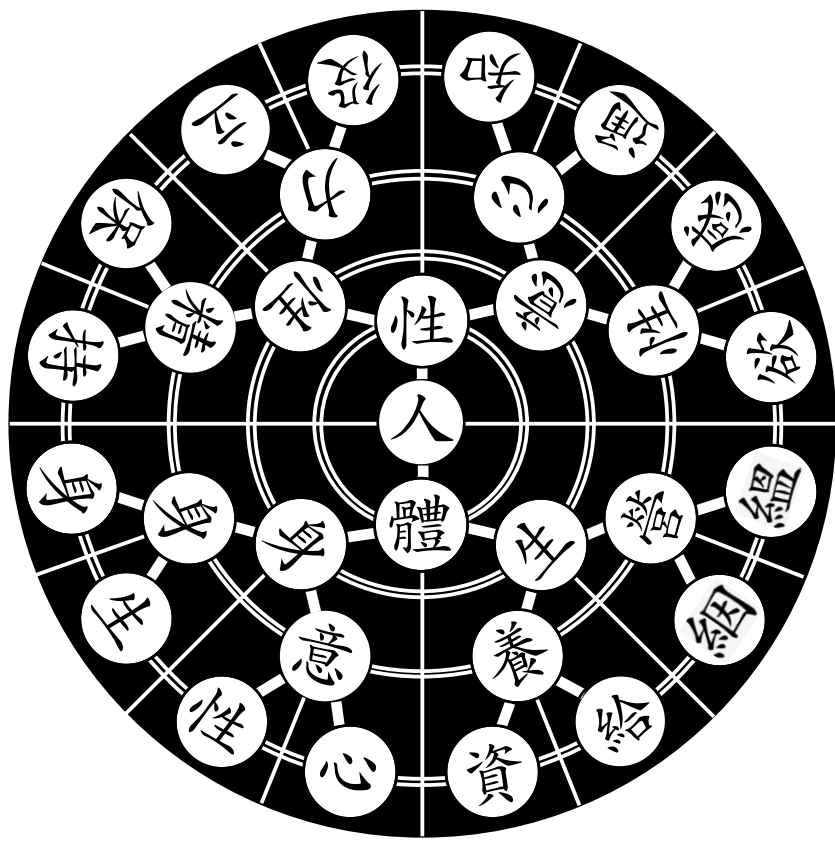


天人道德圖

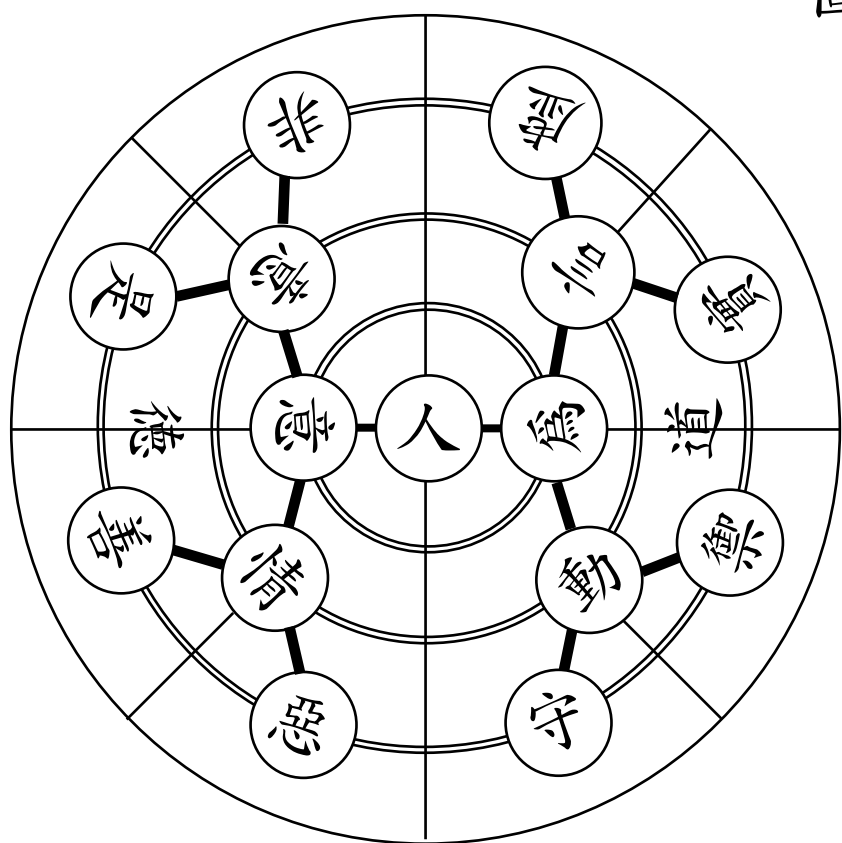


天人反合圖一合





意爲圖



給資きゅうし

一〇四九二 (復元)*

易緼よううん會いん綱いん、

一〇四九三 (復元)*

一給いち一資きゅうし、

一〇四九四 (復元)*

體たい立たちて用よう成なる。

一〇四九五

萬物ばんぶつの擾じょう擾じょう。態たいを變へんずること窮きわまり無なしと雖いえども。而しかも

一〇四九六

諸これを天てん地ちに資とるは則すなち一いちなり。是この故ゆえに。

一〇四九七

資とる者ものは能よく給きゅうする者ものに應おうず、

一〇四九八

給きゅうする者ものは能よく資とる者ものを變へんず、蓋けだし

一〇四九九

大物だいぶつは能よく統すぶ、

一〇五〇〇

小物しょうぶつは能よく散さんず、

一〇五〇一

統すぶるは則すなち混こん有ゆうの天てん地ちなり、

一〇五〇二

散さんずるは則すなち各かく立りつの氣き物ぶつなり、

一〇五〇三*

各かく立りつは變へんを盡つくすと雖いえども。而しかも之これを混こん有ゆうに資とるは則すなち同どうじ。

一〇五〇四

資とれば 則すなち應おうずる有あり、

一〇五〇五

變へんずれば則すなち反はんする有あり、

一〇五〇六

變へんを盡つくして一いちに居おる。是こに於おいてか。

一〇五〇七

萬物ばんぶつ擾じょう擾じょう。以もつて反はんし以もつて依よる。

一〇五〇八

夫それ物ものの相あい散さんずる。萬ばん不ふ同どうと雖いえども。

一〇五〇九
一〇五一〇
一〇五一一
一〇五二二
一〇五二三
一〇五二四
一〇五二五
一〇五二六

天地水火。其の化する所は。惟だ一動一植なり。

火は熱して升る、

水は冷えて降る、然り而して

水なる者は、火を以てして成る、

火なる者は、水を以てして成る、是れ相い反にして相い依るなり。

動は則ち濇動有意なり、

植は則ち冷止無意なり、然り而して

蔬穀は人に依りて立す、

人は蔬穀に依りて存す、

獸は多く艸に依る、

鳥は多く木に依る、

大にして之を言えば、則ち

人と物は天に依らざれば則ち居らず、

地に依らざれば則ち立たず、

小にして之を言えば、則ち

鴨は雞の伏を假りて孚す、

蠶は人の養を待ちて生く、

神は活し本は立す、

一〇五二七

動は熱し止は寒す

一〇五二八

大物は同じく有りと雖も。動植は能く分れて資る。

一〇五二九

其の生化の跡は。精なれば則ち之を没す、

一〇五三〇

麋なれば則ち循環鱗比を分つ

一〇五三一

(削除。朱筆にて行間に追記。)

一〇五三二

易縊会網、

一〇五三三

一給一資 造化の成る所なり。

一〇五三四―三九

(削除。朱筆にて行間に追記。)

一〇五四〇

艸木は之に資りて、華實に網縊す、其の天と其の與とに給資す、

一〇五四一

鳥獸は之に資りて、牝牡に網縊す、其の天と其の與とに給資す、而して

一〇五四二

其の一箇の活立の間も。亦た此の營養を用いざる所莫し。是に於て

一〇五四三

大は給し小は資る。而して我が有は天に應ずる有り。故に

一〇五四四

我の軀は、身生を以て天地に應ず、

一〇五四五

我の神は、心性を以て天神に應ず、

一〇五四六

天に東西南北有り、

一〇五四七

我に前後左右有り、

一〇五四八

天に内外本末有り、

一〇五四九

我に内外本末有り、

一〇五五〇

天は氣を外に於て運す、

一〇五五一

内に於て保す、

一〇五五二

我は氣を内に於て運す、

一〇五五三

外に於て保す、然り而して

一〇五五四

我は則ち前後左右を具す、

一〇五五五

植は則ち猶お其の方を混ぜず、

一〇五五六

我は則ち本を上にし末を下にす、

一〇五五七

植は則ち末を上にし本を下にす、

一〇五五八

我は則ち氣温體動なり、

一〇五五九

植は則ち氣冷體止なり、

一〇五六〇

給資に非ざる所莫ければ、盡く數う可きに非ざるなり。然り而して

一〇五六一

天人の給資は相い反す。則ち

一〇五六二

我は則ち有限なり、

一〇五六三

天は則ち無限なり、

一〇五六四

我は則ち須臾なり、

一〇五六五

天は則ち悠久なり、

一〇五六六

我は則ち有意にして作す、

一〇五六七

天は則ち無意にして成す、

- 一〇五六八
- 一〇五六九
- 一〇五七〇
- 一〇五七一
- 一〇五七二
- 一〇五七三
- 一〇五七四
- 一〇五七五
- 一〇五七六
- 一〇五七七
- 一〇五七八
- * 一〇五七九
- 一〇五八〇
- 一〇五八一
- 一〇五八二
- 一〇五八三
- 一〇五八四
- 一〇五八五

天は則ち自然なり、不捨なり、成なり、常なり、

神は則ち使然なり、不測なり、爲なり、變なり、故に

我に非ざる者は、則ち無意を以て天を爲す、

氣爲を以て神を爲す、

我に於ては、則ち氣爲を以て天を爲す、

有意を以て神を爲す、何となれば。則ち

其の我の天地を維持するの氣は、天に非ずして何ぞ、

其の我の天地を鼓舞するの心は、神に非ずして何ぞ、

蓋し我の天地なる者は、神の爲す所なり。

神の爲す所を受けて。以て己の天と爲す。是に於て。

心は其の神を爲す。是の故に

無意なる者は、靈を以て能と爲さず、爲す者は、變を以て不測を爲す、
(爲者、を抹消。)

有意なる者は、氣を以て變を爲さず、意を以て不測を爲す、
故に

神爲を以て天に屬すれば。則ち人爲は作を爲す。今、夫れ人は。

衣食せざれば、則ち凍餒、拵わず、是れ氣なり、人の天性なり、

凍餒すと雖も、而も之を衣食すると、之に衣食せざると、

惟だ其の欲する所の者は、是れ意なり、人の神爲なり、是の故に。

天人の間。亦た天神の辨有り。

- 一〇五八六
- 一〇五八七
- 一〇五八八
- 一〇五八九
- 一〇五九〇
- 一〇五九一
- 一〇五九二
- 一〇五九三
- 一〇五九四
- 一〇五九五
- 一〇五九六
- 一〇五九七
- 一〇五九八
- 一〇五九九
- 一〇六〇〇
- 一〇六〇一
- 一〇六〇二
- 一〇六〇三
- 一〇六〇四
- 一〇六〇五

且つ天は以て人を容る、

人は以て天に容れらる、

天は人を以て意を爲す、 人外に意を有するに非ず、

人は天を以て神を爲す、 人神は天を外にするに非ず、 是に於て。

天人の反する所は。一を以て其の分を觀る、

一を以て其の合を觀る、

天は公にして人は私なり、

天は誠にして人は僞なり、 然りと雖も。

人は則ち私を其の公に於て資る、

僞を其の誠に於て資る、

無意は有意を我に於て給す、

無爲は有作を我に於て給す、

資りて應じ變じて反す。給資の道は然り。

天の給は我に反す、 故に我より天地を觀れば、 泥めば窺竅を爲す、

私の資は天よりす、 故に天地より物を觀れば、 漸やく條理を得る、

造化は、 会易の網緼に成る、

活立は、 天地の給資に成る、

資りて應ず、

一〇六〇六

變じて反す、

一〇六〇七

正視せざる者は。其の目を眩まさざること能わざるなり。此の故に。

一〇六〇八

網縊の道は。天は則ち其の跡を没す、

一〇六〇九

動植は則ち華實牝牡を露す、

一〇六一〇

形化は此に於て假る有り、

一〇六一一

氣化は此に於て假る無し、

一〇六一二

又た姑く資を行止に於て言うに。

一〇六一三

天は行を運轉に資る、

一〇六一四

地は行を升降に資る、

一〇六一五

鳥飛魚游、人歩獸走、數えて盡きず、

一〇六一六

天は止を環守に於て資る、

一〇六一七

地は止を方位に於て資る、

一〇六一八

鳥棲魚潛、人寐獸伏、數えて窮まり無し、

一〇六一九

縦い物に隨いて其の態を異にするとも。

一〇六二〇

給資に通ずる有らば。又た何ぞ隔てん。

一〇六二一―二八

(削除。欄外上段に朱筆にて追記。)

* 一〇六二九―三〇

惟だ人のみ。有限の身生。意爲を以て其の能を爲す。

一〇六三一

聲色臭味の中に長ず、

- 一〇六三二
- 一〇六三三
- 一〇六三四
- 一〇六三五
- 一〇六三六
- 一〇六三七
- 一〇六三八
- 一〇六三九
- 一〇六四〇
- 一〇六四一
- 一〇六四二
- 一〇六四三
- 一〇六四四
- 一〇六四五
- 一〇六四六
- 一〇六四七
- 一〇六四八
- 一〇六四九

器地配嗣の間に遊ぶ

囿する所有り。而して以て洞視に苦しむ。

動植は神本を分つ。

竝び起りて衰衰を追う。

作止は體を換え。魚鱗に相ひ比す。惟だ

人は己を有するを以て。而して鱗比を造化に於て疑う。

天なる者は、物を成し事を跡す、

神なる者は、往きて感じ來りて應ず

人は有意に執して。天神を窺窺す。

不掬不測なる者を觀て。之を有意に比す。是を以て。

神も亦た之を人にす。

天も亦た之を人にす。

其の意智情欲を人にす。

其の酬醋黜陟を人にす。

其の容貌を人にす。

其の冠冕を人にす。

資の給に於て變ずるを知らず。

妄に執して眞を説く。人なる哉。人なる哉。

一〇六五〇

縦い通を以て自から許すも。其の實は則ち塞す。蓋し夫れ

一〇六五一

混淪たる一天地。其の體は清淨なり。

一〇六五二

水浸燥煦の際は。濁して穢す。

一〇六五三

網縊は物を醸し。動植を解結す。

一〇六五四

其の體を鱗比す、

一〇六五五

其の神を相換す、

一〇六五六

穢濁麤脆。

一〇六五七

新鮮舊敗。

一〇六五八

網縊に通ぜざれば、則ち造化を識らず、

一〇六五九

給資に通ぜざれば、則ち人物を識らず、

一〇六六〇

身生を穢濁に瘡す、

一〇六六一

意想を虚妄に醸す、

一〇六六二

明なる者の爲に蔽わる、

一〇六六三

通なる者の爲に蔽わる、 知の貴からざるなり。

一〇六六四

一は此の如く混成す、

一〇六六五

二は此の如く粲立す、

一〇六六六

天は之を蔽うこと莫し。人は聾瞽を致す。

一〇六六七

苟くも給資する所に通ずれば。則ち

一〇六六八

天人^{てんじん}は本^もと一^{いち}にして。

造化^{ぞうか}

何^{なん}ぞ隔^{へだ}てん。

(PA 046)

言動

人なる者は、生を以て身を保す、

意を以て爲を爲す、

意は則ち知感なり、

爲は則ち言動なり、

言動なる者は、知感の運する所。含靈は同じく有す。

聲技の發するを之れ言と爲れば。則ち惟だ人のみ之を有す。蓋し

人の言を爲すや。動に精なり、而して

意に麁なり、故に

言は意を盡くすこと能わず、而して爲は則ち言に盡くす、夫れ

言なる者は、主に由りて聲を命ず。

聲主を運爲して。緒を抽きて之を引く。是に於て。

其の主を有して、而して之を口に上る可し、

其の主無くして、亦た之を口に上る可し、

主を認めて之を聲にす。聲の善なる者なり。是の故に。

主なる者は、天なり、

之を聲にする者は、人なり、

呼は未だ其の主を知らず。

- 一〇六七二
- 一〇六七三
- * 一〇六七四
- * 一〇六七五
- 一〇六七六
- 一〇六七七
- 一〇六七八
- 一〇六七九
- 一〇六八〇
- 一〇六八一
- 一〇六八二
- 一〇六八三
- 一〇六八四
- 一〇六八五
- 一〇六八六
- 一〇六八七

- 一〇六八八
- 一〇六八九
- 一〇六九〇
- 一〇六九一―九二
- 一〇六九三―九四
- 一〇六九五
- 一〇六九六
- 一〇六九七
- 一〇六九八
- 一〇六九九
- 一〇七〇〇
- 一〇七〇一
- 一〇七〇二
- 一〇七〇三
- 一〇七〇四
- 一〇七〇五
- 一〇七〇六
- 一〇七〇七

應は其の主おうに非あらず。

善ぜんは其その主しゅを知しり、以もつて之これを呼よべば、隣りんじん人の應おうを受うけず、

未いまだ其その主しゅを知らしらずして、以もつて之これを呼よべば、隣りんじん人と應おうずと雖いえも而しかも之これを信しんず

(PA 047)

聲せいなる者ものは、人ひとなり、轉てんずるなり、舟ふねは亦またた以もつて車くるまと呼よぶ可べからざるなり、

主しゅなる者ものは、天てんなり、定さだまるなり、舟ふねは以もつて車くるまと爲なす可べからざるなり、

主しゅは實じつを得えるを貴とうとしとす、

聲せいは相あい稱かなうを善よしとす、

車くるまを車くるまとし舟ふねを舟ふねとす。實じつは當あたり聲せいは稱かなう。

意いは内うちに於おいて有うす、

技ぎは外そとに於おいて施ほす、故ゆえに

意い智ちは内うちに運うんす、

言げん動どうは外そとに露ろす、

動どうなる者ものは、一いち守しゅ一いち禦ぎよ。之これを以もつて酬しゅう酷さくす。

聲せいに發はつする者ものは、正せい誕たん信しん偽ぎなり。

造ぞう化かの間かんは、常じょう有あり變へん有あり、正せい有あり妖よう有あり、

言げん動どうの間かんは、正せい有あり誕たん有あり、真しん有あり妄もう有あり、

之これを審つまびらにせざれば、則すなわち妄もう誕たんと變へん妖ようと混こんず。

信しん偽ぎと真しん妄もうと配はい行こうせず、

(I 491b)

- 一〇七〇八 是非と正誕と配立せず、
- 一〇七〇九 大瞽は衆瞽を欺く、
大聾は小聾に聴く、
- 一〇七一〇 是を以て。徳に就きて之を呼ばば、無意を天と爲す、
有意を人と爲す、
- 一〇七一一 道に就きて之を呼ばば、爲を神と爲す、
成を天と爲す、
- 一〇七一二 一一は各を爲す、
- 一〇七一三 道を反して處を混ず。必ずしも相い先後雄雌せざるなり。故に
- 一〇七一四 然らざるを得ざる者に聲して。勢と曰う。
- 一〇七一五 之をして然ら使用者に聲して。力と曰う。
- 一〇七一六 然る所の者は。故と聲す。
- 一〇七一七 以て然る者は。理と聲す。
- 一〇七一八 之に駕して以て往く。聲主に於て失する所莫し。
- 一〇七一九 主は、實なり、天成なり、人爲を俟たざるなり、
- 一〇七二〇 聲は、名なり、言有りて後に成る、人の事なり、
- 一〇七二一 名なる者は、實の聲なり、
- 一〇七二二 實なる者は、聲の主なり、
- 一〇七二三 名を知りて主を知らず、門に入りて盤桓す、
- 一〇七二四 主を知りて名を知らず、門を出でて彷徨す、
- 一〇七二五

*
一〇七二六

主は之を言に於て得る、

(言を見せ消ちにして心に訂正。)

一〇七二七

聲は之を言に於て得る、

一〇七二八

諸を思言に失して。向背。途を異にす。是の故に。

一〇七二九

無意は。主なり。天とは。無意なる者に於て聲す。

一〇七三〇

有意は。主なり。人とは。有意なる者に於て聲す。

一〇七三一

爲成は。主なり。天神とは。爲成なる者に於て聲す。故に

一〇七三二

名を以て之を求むれば、實は之の解を爲す、

一〇七三三

實を以て之を言えば、名は乃ち其の解なり、

一〇七三四

良馬を得て神龍と名づくる者有り、

一〇七三五

神龍 至ると聞きて、識らざる者は驚走す、

一〇七三六

死鼠を函にして諸を人に贈る者有り、

一〇七三七

曰く璞を贈ると、其の人 以て未だ磨かざるの玉と爲す、以て之を擇ぶ

一〇七三八

之を呼ぶこと異なれば、則ち其の主の同異を察せず、而して先ず之を疑う、

一〇七三九

之を呼ぶこと同なれば、則ち其の主の眞假を辨ぜず、而して先ず之を信ず、

一〇七四〇

名に邪正有り、擇ばずんばある可からず、

一〇七四一

主に美惡有り、察せずんばある可からず、

一〇七四二

名なる者は、人の命ずる所なり、

一〇七四三

實なる者は、天の爲す所なり、

- 一〇七四四 或いは聲主を亂す、
- 一〇七四五 或いは聲主を繆る。厲階の生ずる所なり。
- 一〇七四六 事は固に之を呼ぶこと同じくして、而して實の異なる者有り、
- 一〇七四七 信ずれば、則ち其の名の同じきに因りて、而して其の主を愛す、
- 一〇七四八 疑えば、則ち其の名の同じきに因りて、而して其の主を惡む、
- 一〇七四九 又た之を呼ぶこと異にして、而して實の同じき者有り、
- 一〇七五〇 惡めば、則ち其の名の醜を以て、同主の美を掩う、
- 一〇七五一 愛せば、則ち其の名の美を以て、同主の醜を掩う、
- 一〇七五二 徒らに其の名を譽めて、而して其の實を察せず、
- 一〇七五三 之を榮すること能わず、還つて辱を其の主に遺す、
- 一〇七五四 徒らに其の名を毀りて、而して其の實を察せず、
- 一〇七五五 其の病を医すこと能わず、還つて佗の侮を致す、
- 一〇七五六 名實の義は。大なり。
- 一〇七五七 宜しく之を審擇し明察すべし。是の故に。
- 一〇七五八 天と呼び人と呼び。天神と呼び。云云と呼ぶ。
- 一〇七五九 跡を以て指さして之を示せば。則ち各主は各聲を爲す。然れども
- 一〇七六〇 各なる者は、統の分なり、
- 一〇七六一 統なる者は、各の體なり、

一〇七六二 豈に轆輿輪輻を敷えて。彼の車を知らざらんや。

一〇七六三 言は以て動に盡きる可し、

一〇七六四 動は以て言に盡きる可し、則ち其の技を爲すや。固に一なり。然り而して

一〇七六五 意を以て技に比すれば。則ち言動の態を爲すや。門戸を以て出入す。

一〇七六六 業 已に門戸を以て出入すれば。則ち其の麿なるや知る可し。

一〇七六七 麿と雖も而も其の指揮は神明に出づ。

一〇七六八 麿跡の定を認め。精主の活に逢わんことを求むるは。難し。故に

一〇七六九 技を施すの道にては、其の善は、善か悪か

一〇七七〇 其の非は、非か是か

一〇七七一 語を下すの道にては、其の汎は、汎か切か

一〇七七二 其の正は、正か誕か

一〇七七三 活主は其の麿を御して。定中 變化を爲す。

一〇七七四 耳は聡にして目は明なり、

一〇七七五 手は巧にして足は健なり、

一〇七七六 天なる者は、神 營みて物を爲す、

一〇七七七 人なる者は、意 營みて之を物に於て爲す、故に

一〇七七八 天なる者は、之を言動す、

一〇七七九 人なる者は、此に言動す、故に

一〇七八〇

意の運する所は。口す可く身す可し。

一〇七八一

之を物に於て爲す者は。物を成さんと欲するなり。故に

一〇七八二

事の天人なる者は。物を爲すと。之を物に於て爲すとなり。夫れ

一〇七八三

物なる者は、畜藏を服食に於て用いず、

一〇七八四

耕を 居宅に於て營せず、

一〇七八五

玩を 肢體に於て好まず、

一〇七八六

離合を群醜に於て用いず、 人は則ち之を用う、 故に

一〇七八七

人と相い輔け、

一〇七八八

物を將けて自から足る 故に

一〇七八九

天地萬物を以て。皆な我の用と爲す。是を以て。

一〇七九〇

能く之を物に於て爲すなり。故に天は數を爲す、

一〇七九一

人は之を數う、

一〇七九二

天は運轉を有す、

一〇七九三

人は之を曆象にす、

一〇七九四

天は親子を爲す、

一〇七九五

人は之を尊卑にす、

一〇七九六

天は男女を爲す、

一〇七九七

人は之を配偶にす、

一〇七九八
一〇七九九
一〇八〇〇
一〇八〇一
一〇八〇二
一〇八〇三
一〇八〇四
一〇八〇五
一〇八〇六
一〇八〇七
一〇八〇八
一〇八〇九
一〇八一〇
一〇八一
一〇八一
一〇八一
一〇八一
一〇八一
一〇八一
一〇八一

天は土壤を爲す、
人は之を都邑にす

統べて治め。依りて養う。故に之を君民に於て爲す。

材を治め用を爲す。故に之を土農工賈に於て爲す。

之を愛するに徳を以てす、

之を征するに兵を以てす、

之を知るに思と學とを以てす、

之を行うに勤と禮とを以てす、蓋し

天地は活立す。故に其の用も亦た活用す。

我は隔散の生を以て。偏に有意の神を用う。故に

未だ通じて活すること能わず。

思い泥み。其の用に死す。

夫れ 一分一合なる者は。體なり。

之を分ち之を合する者は。氣なり。

元氣は本と一なり、故に分つ、

會易は本と二なり、故に合す、

分なる者は、天性の活なり、

合なる者は、神才の通なり、

一〇八一六 之を用いて其の通に達せず、二の反に罔す、

一〇八一七 通ずれば則ち聖なり、

一〇八一八 執すれば則ち頑なり、

一〇八一九 通なる者は、天下の至美、

一〇八二〇 執なる者は、天下の通患、是の故に。

一〇八二一 愛なる者は、令徳なり、而して小人の愛や愛に溺る、

一〇八二二 悪なる者は、醜徳なり、而して君子の悪や愛に歸す、

一〇八二三 活なる者は、美事なり、而して小人の活や禍に醸す、

一〇八二四 殺なる者は、醜事なり、而して君子の殺や福に布す、

一〇八二五 執すれば、則ち通に於て此にすと雖も、而れども塞に於て彼にす、

一〇八二六 恩に於て此にすと雖も、而れども怨に於て彼にす、

一〇八二七 通ずれば、伸を屈外に於て求めず、

一〇八二八 利を義外に於て謀らず、

一〇八二九 困中に於て樂しむ、

一〇八三〇 窮中に於て達す、是を以て。

一〇八三一 凜乎として奪う可からずと雖も、雍容として餘裕有り、

一〇八三二 企て及ぶ可からざるが如しと雖も、岸崖有る莫し、

一〇八三三 観る可しと雖も、而も之を測ること能わず、

一〇八三四 賁然たりと雖も、端倪す可からず、

(I 493a)

一〇八三五 之を運して其の活に至らず、一の合に間あり、

一〇八三六 通なる者は、天成の才なり、

(PA 052)

一〇八三七 活なる者は、神爲の性なり、

一〇八三八 良医は毒を以て病を治す、

一〇八三九 良將は弱を以て強を制す、

一〇八四〇 拙工は藥を以て病を致す、

一〇八四一―四二二 怯將は強を以て弱を畏る、是に於て、強弱は名を失う、

毒藥は用を易う、

一〇八四三 人は有意を以て之を運す、

一〇八四四 天は無意を以て之を運す、是を以て、

一〇八四五 世は或いは禍を福とし福を禍とし、歡を悲しみ悲を歡ぶ有り、

一〇八四六 皆な運轉の常無き所なり、

一〇八四七 事は偏行せず、

一〇八四八 物は雙立せず、

一〇八四九 皆な二の間に成る。故に

一〇八五〇 順と曰えば、則ち其の聲は美なり、

一〇八五一 逆と曰えば、則ち其の聲は醜なり、

一〇八五二

- 一〇八五三
- 一〇八五四
- 一〇八五五
- 一〇八五六
- 一〇八五七
- 一〇八五八
- 一〇八五九
- 一〇八六〇
- 一〇八六一
- 一〇八六二
- 一〇八六三
- 一〇八六四
- 一〇八六五
- 一〇八六六
- 一〇八六七
- 一〇八六八
- 一〇八六九
- 一〇八七〇

然れども徒順徒逆は。用を爲さざるなり。故に

剛直諫規は、逆にして美なり、

阿諛足恭は、順にして醜なり、

順なる者は、随いて之を將る、

逆なる者は、向いて之を迎う、

事物は必ず向迎の間に成る。是の故に。

地載は天覆に向い、萬物は皆な其の間に成る、

左手は右手に向い、萬技は盡く其の間に出づ、

順にして反かず、逆にして之を戻し、同じく不美に歸す、奚んぞ順逆を擇ばん、

逆にして争わず、順にして能く守る、同じく善に歸す、徳の相い得て全きなり、

順の専らに行い難きは、柔に流るればなり、

逆の徳と名づけ難きは、戻に至ればなり、

如し未だ其の活に達せざれば。則ち

美も亦た行い難し、

醜も亦た避け難し、故に

人は。必ず物を見ては、則ち塞と爲す、

己を見ては、則ち通と爲す、

其の塞や、我の通ずる所に於て塞す、

一〇八七一
一〇八七二
一〇八七三
一〇八七四
一〇八七五
一〇八七六
一〇八七七
一〇八七八
一〇八七九
一〇八八〇
一〇八八一
一〇八八二
一〇八八三
一〇八八四
一〇八八五
一〇八八六
一〇八八七
一〇八八八

其の通や、彼の塞する所に於て通ず、

若し彼の通ずる所を以て。我の塞する所を觀れば。

禽獸は。教えずして能く搏撃し。學ぶこと無くして能く毒藥を辨ず。且つ

猫狗の能く嗅ぐ、

狐狸の能く魅す、

豈に我の通ずる所ならんや。是を以て

貴人は顰蹙の饌、餓える者は朶頤の食なり、

我の憂苦鬱悶の時は、

讐家拊躍の日なり、是の故に。

我を以て地を觀れば。地は大なり。

天を以て地を觀れば。地は小なり。

地を以て我を觀れば。我は小なり。

蚊虻を以て我を觀れば。我は大なり。而して

其の大は天に於て止まらず、

其の小は蚊虻に於て盡きず、

然れば則ち通塞順逆。強弱小大。奚れを以てか之を定めん。是を以て

旋轉して之を觀れば、所として左ならざる無く、所として右ならざる無し、
上下して之を觀れば、所として高からざる無く、所として卑からざる無し、

一〇八八九
一〇八九〇
一〇八九一
一〇八九二
一〇八九三
一〇八九四
一〇八九五
一〇八九六
一〇八九七
一〇八九八
一〇八九九
一〇九〇〇
一〇九〇一
一〇九〇二
一〇九〇三
一〇九〇四
一〇九〇五
一〇九〇六

執すれば則ち塞す、

通ずれば則ち活す、

跡を尋ぬる者は、跡無きに至れば、則ち塗に迷う、

祭を數うる者は、混に至れば、則ち手を拱く、

安んぞ活、斯に之れ達せん。是の故に

昏主も亦た必ず人の言を用う、

聡主も亦た必ず人の言を禦ぐ、惟だ

昏主に活權衡無し、故に

此を容るを以て、而して彼の昌言を禦ぐ、聡主に活權衡有り、故に

此を禦ぐを以て、而して彼の昌言を容る、故に

賢者、古訓を以て之を規すれば、則ち

不肖者も亦た古訓を以て之を飾る

正士は、法言を引きて以て之を正す、

亂人も亦た法言を引きて以て之を亂す、故に

物を觀て物に於て活せず。將に物に於て病まんとす。

書を觀て書に於て活せず。將に書に於て病まんとす。

理を説きて理に於て活せず。將に理に於て病まんとす。是を以て

義以て宜しく。禮以て中り。智以て通じ。應以て變ずるは。用の活する所なり。

一〇九〇七
一〇九〇八
一〇九〇九
一〇九一〇
一〇九一一
一〇九一二
一〇九一三
一〇九一四
一〇九一五
一〇九一六
一〇九一七
一〇九一八
一〇九一九
一〇九二〇
一〇九二一
一〇九二二
一〇九二三
一〇九二四

運用は苟くも活せずんば。則ち技能有りと雖も。奚れを以てか用うることを爲さん。

惟だ混焉として一なり、孰れか二を執りて以て事に應ぜん、

天地は位を異にすと雖も。相い成ること二に非ず。

耳目兩兩たりと雖も。

手脚隻隻たりと雖も。

作用は則ち二に非ざるなり。故に

左脚を駐むるは、右脚を運ぶが爲なり、

昏夜に於て息うは、朝日に於て動かんが爲なり、

物の動靜。心の善惡。觸るれば則ち二を跡す。

孰れか一を其の外に於て求めん。

二は直ちに以て二と爲す可くんば。則ち左は方を畫す、

右は圓を畫す

前は東呉の話に接す、

後は西秦の報に聽く、

吹けば冷なり、

嘘せば温なり

機觸れて跡反す。孰れか其の由りて來る所を知らん。是を以て

能く一を奉ずる者は。能く其の機を慎しむ。故に

一〇九二五

其の事物に應ずるや窮まり無し。

一〇九二六

惟だ粲然として二なり、孰れか一を執りて以て物を御せん、

一〇九二七

跡を認めて固執し。通に於て病む。

一〇九二八

北人は再登の國を疑う、

一〇九二九

南人は常夜の國を信ぜず、然りと雖も。

一〇九三〇

無なる者は、有の待つ所なり、

一〇九三一

實なる者は、虚の偶する所なり、故に

一〇九三二

好んで明を欲するや必ず昏なり、

一〇九三三

好んで美に處するや必ず醜なり、

一〇九三四

全を欲すれば則ち欠く、

一〇九三五

譽を欲すれば則ち毀らる、

一〇九三六

長を欲すれば則ち短く、

一〇九三七

治を欲すれば則ち紊る、

一〇九三八

之を勞せんと欲すれば、則ち逸す、

一〇九三九

之を悦ばしめんと欲すれば、則ち怒る、故に

一〇九四〇

自ら智と爲す者は必ずしも智ならず、

一〇九四一

自ら賢と爲す者は必ずしも賢ならず。是を以て。

一〇九四二

能く文を成す者は、質なり。

- 一〇九四三
- 一〇九四四
- * 一〇九四五
- 一〇九四六
- 一〇九四七
- 一〇九四八
- * 一〇九四九
- 一〇九五〇
- 一〇九五一
- 一〇九五二
- 一〇九五三
- 一〇九五四
- 一〇九五五
- 一〇九五六
- 一〇九五七
- 一〇九五八
- 一〇九五九
- 一〇九六〇

能く剛を爲す者は。柔なり。

怯を養う者は能く勇む。

卑を積む者は能く高し。是を以て。

能く變ずる者は常なり。

能く動く者は止まるなり。

能く危ぶむ者は安んず。

能く黙する者は言う。是を以て。

能く明なる者は赫赫たらず。

能く晦なる者は昏昏たらず。

至清は濁るが如し。

至巧は拙きが如し。

能知は愚なるが如し。

能慮は迂なるが如し。

反を以て偏を濟う。一の美を成す所以なり。

苟くも其の道を亡くせば則ち圜圜湯鑊、姦凶を懲らすこと能わず。

能く其の道に由らば、則ち朽索して以て駢馬を馭す可し、是の故に。

二に通ぜざれば、則ち

一を奉ずる能わず。

一〇九六一
一〇九六二
一〇九六三
一〇九六四
一〇九六五
一〇九六六
一〇九六七
一〇九六八
一〇九六九
一〇九七〇
一〇九七一
一〇九七二
一〇九七三
一〇九七四
一〇九七五
一〇九七六
一〇九七七
一〇九七八

二即一なれば、親疏は和す、
一即二なれば、上下は序す、
事は經を爲す、
物は緯を爲す、
經は氣物を没す、
緯は氣物を露す、
没は天神の用を爲す、
露は天地の體を爲す、
孰れか能く之を没せん、
孰れか能く之を露せん、
混として縫無し、其の一や全なり、
粲として跡を反す、其の二や立なり、
一なる者は、二の全なり、二外の一無し、
二なる者は、一の分なり、一外の一無し、
而るを茲に及ばず。
有限の智を以て、將に無窮の爲を窮めんとす、
終に之を窮むること能わず、見て不測と爲す、
有作の變を以て、定常の成を觀る、

一〇九七九

終に之を易うることを能わず、呼んで以て不捨と爲す、蓋し

一〇九八〇

物なる者は、無意なり、知すれば則ち運す、
(故を欠くか。)

一〇九八一

感ずれば則ち應ず、

一〇九八二

人なる者は、有意なり、故に知りて或いは運せず、

一〇九八三

感じて或いは應ぜず、

一〇九八四

能く變を盡くす所以なり。視聽云爲。感應の文は。

一〇九八五

之を神に於て變化す、而して思辨好惡す、

一〇九八六

之を爲に於て錯雜す、而して運用言動す、

一〇九八七

物は意を具せず、

一〇九八八

人にして意を具す、故に

一〇九八九

物は精神の分に混然として、

一〇九九〇

人は則ち其の間に粲然たり、故に

一〇九九一

好惡の性、

一〇九九二

運爲の意、

一〇九九三

其の有無を反して。事も亦た以て異なる。蓋し

一〇九九四

物成れば則ち氣を具するなり。

一〇九九五

具するの氣は。之を性と謂う。

一〇九九六

具して華なる。之を神と謂う。是の故に。

一〇九九七
一〇九九八
一〇九九九
一一〇〇〇
一一〇〇一
一一〇〇二
一一〇〇三
一一〇〇四
一一〇〇五
一一〇〇六
一一〇〇七
一一〇〇八
一一〇〇九
一一〇一〇
一一〇一一
一一〇一二
一一〇一三
一一〇一四

情なる者は、好悪なり、之を分てば則ち慾と偶す、
意なる者は、運爲なり、之を分てば則ち智と偶す、
情慾なる者は、性の具する所なり、
意智なる者は、神の華する所なり、
性は以て生に具す、
神は以て體を使む、
體は各なれば則ち隔つ、
氣は同なれば則ち通ず、
神の能く通ずるは、體の隔を以てなり。

往くとして感應に匪ざる者莫し。是を以て、
怨を以て衆に感ずれば、衆は怨を以て應ず、
徳を以て人に感ずれば、人は悦を以て應ず、
涙を垂れて命を授く、
齒を切して相い賊す、
孰れか之をして然ら使めん。

或いは患難の感、己に切なり、
或いは喜樂の應、彼に反するなり、
桴を以て鼓に感ず、鼓は響を以てして應ず、

一一〇一五
一一〇一六
一一〇一七
一一〇一八
一一〇一九
一一〇二〇
一一〇二一
一一〇二二
一一〇二三
一一〇二四
一一〇二五
一一〇二六
一一〇二七
一一〇二八
一一〇二九
一一〇三〇
一一〇三一
一一〇三二

形を以て鏡に感ず。鏡は影を以てして應ず。

治亂興亡の途は判ず。

安危榮辱の機は決す。

而るを識らず。爾より出づる者を以て。

天人を怨尤す。是を以て。

意智能く通ずれば則ち聖なり。

能く體すれば則ち通ず。君子の事なり。是に於て。

知する者は自から明に。

處する者は自から到る。

體して通ずること能わざれば。則ち己を専らにして人を忘る。

己が爲にして人を榮辱す。我れ之を聞く。君子は専らにすること無し。

孝を専らにすれば、兄弟に友ならず。

忠を専らにすれば、同僚に良ならず。

功を専らにすれば、害に近づく。

恵を専らにすれば、疑を招く。

是れ蓋し未だ人と通じて善を爲すこと能わざるなり。

美事 猶お且つ専らにす可からざるなり。

而るを況んや其の不美なる者をや。

- 一一〇三三
- 一一〇三四
- * 一一〇三五
- 一一〇三六
- 一一〇三七
- 一一〇三八
- 一一〇三九
- 一一〇四〇
- 一一〇四一―四二
- 一一〇四三―四四
- 一一〇四五
- 一一〇四六
- 一一〇四七―四八
- 一一〇四九
- 一一〇五〇
- 一一〇五一―五二
- 一一〇五三
- 一一〇五四

之を非とすれば、則ち其の辞を以て、其の意を害す、

之を是とすれば、則ち其の意を以て、其の辞に足る、

佗無し。物に通ずること能わざるは、他の情慾と隔たればなり。

感應は能く鼓すれば則ち神なり、

紛は解け難は結ぶ、

福は市し禍は嫁す、

絃歌は鼓鼙に代る、

呻吟は舞踏に轉ず、

機は之をして然ら使む。利は則ち制を爲す、

鈍は則ち制を受く、安危治亂は此に決す。

勢の走る所、虎も鼠と爲る、

爵も鷗と爲る、

故に之を鼓し之を舞すれば、則ち怯者も勇まざること能わず、

勇にして且つ力めば、則ち懦者も力まざること能わず、

孰れか敢えて之を怯懦と謂わん。

之をして反せざるを得ざらしむ、

反すれば則ち從いて其の族を赤す、

之をして怨まざるを得ざら使む、

一一〇五五―五六

怨めば則ち従いて其の人を賊す、亦た冤ならずや。

一一〇五七 或いは倜儻慷慨の士をして、行を玷し名を垢さしむ、

一一〇五八 或いは放蕩狡黠の徒をして、身を撿し面を革めしむ、故に

一一〇五九 有才をして其の能を倒用せしむるは、乗勢者の罪なり、

一一〇六〇 駑馬をして其の能を盡くさしむるは、執轡者の良なり、

一一〇六一 天地は、物なり、

一一〇六二 感應は、事なり、

一一〇六三 物有れば則ち事有り、

一一〇六四 事有れば則ち物有り、

一一〇六五 物を觀て天地を知る、

一一〇六六 事を觀て天神を知る、

一一〇六七 鬼神なる者は、物を用いる者なり、物の體に非ざるなり、

一一〇六八 天地なる者は、用に體する者なり、氣の用に非ざるなり、

一一〇六九 體に非ざれば則ち耳目は得て及ばず、

一一〇七〇 用なれば、則ち感應は得て拵わず、是を以て。

一一〇七一 祭祀は必ず至誠を主とし、感格を事とす。

一一〇七二 風雨雷霆の變より、厲鬼妖孽の怪に至りて。

一一〇七三 感應の致す所にして、變化は測る可からず。

一一〇七四

之を信ぜざらんと欲すれば、

則ち的然として驗有り、

一一〇七五

之を信ぜんと欲すれば、

則ち没焉として跡無し、是れ

一一〇七六

辨ずる者の辨に窮し、

一一〇七七

惑する者の惑に淫する所以なり、

一一〇七八

譬えば猶お衆の戯場に在るがごとし。

一一〇七九

優人の爲す所。辛苦 相い逼るに至りては。則ち觀る者は之が爲に。

一一〇八〇

或いは悽愴。或いは歎歎。或いは還つて自若たり。是れ

一一〇八一

感ずる者の異なるに非ざるなり。

一一〇八二

應ずる者の同じからざるなり。又た轉じて嬉戲に入れば。則ち

一一〇八三

前の悽愴歎歎する者も。捧腹解頤す。是れ

一一〇八四

應ずる者の同じからざるに非ざるなり。感ずる者の異なるなり。故に

一一〇八五

或いは相い感應す、

一一〇八六

或いは相い感應せず、

一一〇八七

或いは感じて應ぜず、

一一〇八八

或いは應ぜんと欲して感ぜず、

一一〇八九

異同厚薄。千變萬化。是に於て。

一一〇九〇

祭禱の驗。報應の道。妖怪の事は。

一一〇九一

有無存亡。是れ乃ち無意の爲す所なり。

一一〇九二

有意を以て之を測り之を必とす可からず。

*一一〇九三

世の感ずる者は。測る可からざる者に於て之を測る、

(感を見せ消ちにして感に訂正。)

一一〇九四

必とす可からざる者に於て之を必にす、

一一〇九五

神を洗し鬼に媚び。城を爲し郭を爲す。

一一〇九六

上は日月星辰、風雲雷霆より、

一一〇九七

下は山海艸木、水火蛇龍に至るまで、

一一〇九八

皆な泥塑木偶。冠冕を戴き。衣裳を垂れ。以て其の神に形す。

一一〇九九

之を望むに嚴然として人なり。故に

一一一〇〇

之に事うる者は。之を人として事え。

一一一〇一

之を祈る者は。之を人として祈る。

一一一〇二

物を知らざるの致す所なり。

一一〇五
一一〇六
一一〇七
一一〇八
一一〇九
一一一〇
一一一一
一一一二
一一一三
一一一四
一一一五
一一一六
一一一七
一一一八
一一一九
一一二〇
一一二一

爲技 (小細字にて右に設施と傍記。)

桴鼓は相い當れば、則ち聲は其の中に成る、

形鏡は相い當れば、則ち影は其の中に成る、故に

火は金石を相い摩るに成る、

水は燥溼を相い結ぶに成る、

成れば則ち酒は麴蘖に非ず、

子は父母に非ず、是を以て。

氣象運轉すれば、則ち日月歳年、其の中に成る、

氣質哮喘すれば、則ち風雲雨雷、其の中に成る、故に

爲せば則ち成る、

成れば則ち爲す、是を以て

運轉哮喘の中、動植、成る。

人なる者は、含靈の長なり。

天に成る、而して

人に爲す、

人に爲す、而して

人に沈む、

人に爲す、而して

一一二二二
一一二二三
一一二二四
一一二二五
一一二二六
一一二二七
一一二二八
一一二二九
一一二三〇
一一三三一
一一三三二
一一三三三
一一三三四
一一三三五
一一三三六
一一三三七
一一三三八
一一三三九

天てんにのつと法ぽうる

賢けん愚ぐのもつ以わかてとこ分わかるる所ところなり。蓋けだし

人ひとは。生せいにこう厚こう薄はく強きやう弱じやく有あり

身みにびしゅう美う醜しう小しょう大だい有あり 是ここをもつ以もつて。

智ちはめいあんへいご明めい暗あん蔽へい悟ご無なきあたこともつ能あたわもつず、以もつてり利り鈍どん賢けん愚ぐのしょう生しょうずる所ところなり、

思しはこうし公こう私し誠せい偽ぎ無なきあたこともつ能あたわもつず、以もつてぜんあくじやせい善ぜん惡あく邪じや正せいのわか分わかるる所ところなり、

天てん人じんのじ事じは。反はんしてがっ合がっす。是ここをもつ以もつて。

天てんのじょうへんろほつ常じょう變へん露ろ没ぼつは、之これをげん言げんにおい於おいてろう弄ろうして、而しかしてせい正せい誕たん護ご評けつす、

天てんのつうそくせい通つう塞そく生せい化かは、之これをこう行こうにおい於おいてろ露ろして、而しかしてよ予よ奪だつ殺さつ活かつす、是ここにおい於おいて

天てん人じん芸うん芸うん。會かい違い千せん萬ばんなり。〔芸うん芸うん〕は自じ筆ひつのまま。一一四し五ご九くに「曲きよく藝ぎ」の用よう例れいあり

千せん萬ばんなりと雖いえど。一いち言げん以もつてこれ之これをつ盡つくす。曰いわく安あんと。

仁じんはもつ以もつてひと人ひとをやす安やすんず、

義ぎはもつ以もつておのれ己おのれをやす安やすんず、夫それ

人ひとは。類るいにだんじよあ男だん女じよあ有あり、

等とうにそんひあ尊そん卑ひ有あり、而しかしてあ相あいあ合あ交こうす。

其そのごう合ごうにてんじんあ天てん人じん有あり、故ゆえに

交こうも亦また天てん人じん有あり、

人ひとのてん天てんをもつ以もつてがっ合がっする者ものは、父ふ子しなり、兄けい弟ていなり、是これよりしてし叔し姪ゆ宗そう族ぞくのこう交こうも自おのずからな成なる、

- 一一四〇 人を以て合する者は、君臣なり、夫婦なり、是れよりして上下内外の交も自から成る、
- 一一四一 之を拡ぐれば則ち窮まり無しと雖も。
- 一一四二 之を約すれば則ち四なり。是を以て
- 一一四三 子の父に於る。
- 一一四四 臣の君に於る。
- 一一四五 各おの將に之を安んぜんとす。
- 一一四六 父子なる者は、家の君臣なり、
- 一一四七 君臣なる者は、國の父子なり、而して孝なる者は親に事うるの名なり、忠なる者は君に事うるの名なり、
- 一一四九 愛敬は之を盡くして。天下和睦す。
- 一一五〇 心を用うれば、則ち誠偽は其の中に成る、
- 一一五一 事に服すれば、則ち怠勤は其の中に成る、
- 一一五二 夫婦は相配すれば、則ち姻婭は其の間に成る、
- 一一五三 兄弟は相繼すれば、則ち叔姪は其の間に成る、故に
- 一一五四 事物の間。爲す者は數う可し、
- 一一五五 成る者は限り無し、是を以て。
- 一一五七 師弟は父子を道に於て成す、
- 一一五八 夫婦は兄弟を室に於て成す、

一一五九
一一六〇
一一六一
一一六二
一一六三
一一六四
一一六五
一一六六
一一六七
一一六八
一一六九
一一七〇
一一七一
一一七二
一一七三
一一七四
一一七五
一一七六

親しんに親したしむは愛あいに在あり、

疏そを和わするは敬けいに在あり、

道どうは異ことなると雖いえむも、而しかも徳とくは一いちなり、

徳とくは一いちなりと雖いえむも、施せつ設おのは各おのおの當あたる所ところ有あり、

其その義ぎを知しる、

其その禮れいを考かんがう、

交こう接せつ廣ひろしと雖いえども、其その徳とくは佗たならざるなり。

夫それ人じんなる者ものは、感かん應おうを以もつて之これを運うん爲いす。

未いまだ衆しゅう心しんの適てきする所ところにして、而しかして徳とくを失うしなう者もの有あらず、

未いまだ事じ宜ぎの失しつする所ところにして、而しかして道どうに之ゆく者もの有あらず、

人にん情じょうの適てきして悦よろこぶ所ところと、敵てきせざる所ところにして怨うらむとは、

安あん危きの關かんする所ところなり、之これを善ぜん惡あくと謂いう、

事じ宜ぎの當あたりて美びとする所ところと、失うしないて醜しゅうとする所ところとは、

榮えい辱じよくの繋つながる所ところなり、之これを是ぜ非ひと謂いう、蓋けだし

事じ爲いの多た態たいと、誠せい僞ぎと、敬けい慢まんと、讓じょう奪だつと、勤きん怠たいと、隱いん忍にんと、勞ろう逸いつとは。

苟いやくくも善ぜん是せいに就つかんと欲ほつすれば。

擇えらびて之これを修おさめざる可べからず、擇えらびて之これを修おさむ。

毀き譽よ褒ほう貶へん。殺さつ活かつ予よ奪だつ。衆しゅうの同おなじくする所ところを得えて、而しかして人ひとは之これを悦えつ美びす。

一一七七
一一七八
一一七九
一一八〇
一一八一
一一八二
一一八三
一一八四
一一八五
一一八六
一一八七
一一八八
一一八九
一一九〇
一一九一
一一九二
一一九三
一一九四

修めざれば則ち荒む、

擇ばざれば則ち雜る、

善を修むれば則ち仁なり、

是を修むれば則ち義なり、

之を擇ぶが爲にして、而して學を爲して之を教う、師の任なり、

之を修むが爲にして、而して禮を作して之に由る、君の業なり、

學禮他無し。仁義の修具なり。故に

善惡是非なる者は。悅怨榮辱の本なり。

悅怨榮辱なる者は。治亂存亡の機なり。

故に仁義の成る所は。

意智は思辨を以て運爲す、

情慾は好惡を以て感應す、

好惡なる者は、性の自然なり、

思辨なる者は、心の使然なり、是を以て。

自ら處する者は、好惡 思辨に勝る、故に能く恕す、

人を觀る者は、我の思辨を以て、人の情慾を律す、故に能く責む

自ら恕する者を以て、人に恕し、

人を責むる者を以て、自らを責む、是れ好惡思辨を修むるなり。

一一一九五
一一一九六
一一一九七
一一一九八
一一一九九
一一二〇〇
一一二〇一
一一二〇二
一一二〇三
一一二〇四
一一二〇五
一一二〇六
一一二〇七
一一二〇八
一一二〇九
一一二一〇
一一二一一
一一二一二

人悦べば則ち親しむ、親しめば則ち天下歸す、

人怨めば則ち疏んず、疏んずれば則ち親戚棄つ、

己の醜、知りて惡めば、則ち慚意を生ず、

人の美、知りて愛せば、則ち讚意を生ず、

讚は嘆を爲し、嘆は榮を爲す、

慚は笑を爲し、笑は辱を爲す、

悦怨榮辱なる者は、仁義の生ずる所なり。

乃ち道德の全き所なり。

徳は、有なり、

道は、發なり、

能く其の有する者を養う者は、其の發を慎む。

心なる者は混然たり。善惡は機に分る。故に

能く其の有を養えば、則ち善は油然として長ず、

能く其の發を慎めば、則ち惡は兆朕を消す

徳は得なり、

道は行なり、

得なる者は之を行に於て得る、
行なる者は之を得に於て行う、

一一二二三
一一二二四
一一二二五
一一二二六
一一二二七
一一二二八
一一二二九
一一二二〇
一一二二一
一一二二二
一一二二三
一一二三四
一一二三五
一一二三六
一一二二八
一一二二九
一一二三〇
一一二三一
一一二三二
一一二三三
一一二三四

徳なる者は、行の主なり、得は學に由りて得る、

道なる者は、得の賓なり、道は禮に由りて行ふ、

得て有する者は、混然として目す可からず、

由りて行なう者は、粲然として目す可し、

名に由りて論ずる者は、其の實を失い易し、

實に由りて行なう者は、其の名を妄失せず、故に

君子は、得る者を奉ず、

行ふ者を慎む、

得て有する所の者、善なれば、則ち

由りて行なう所の者、正し、

忠は以て君に事う、孝は以て父に事う、由りて行ふ所の目なり、

君に事うるは則ち忠なり、父に事うるは則ち孝なり、得て有する者の目す可からざるなり、

目に非ずんば焉んぞ斯の道を載せん、

徳に非ずんば焉んぞ斯の目を總べん、此の故に、

之を安んぜんと欲するを以て心と爲れば、則ち其の徳を保つ、

之を安んずるに道有り、愛と曰う、敬と曰う、

之を安んぜんと欲して、而も未だ其の道を得ん、

姑息諂佞、之を危害す、是れ

一一三三五 古の君子。學を設け禮を制す。以て人を教化の中に於て模範する所なり。

一一三三六 得は善惡を有す、

一一三三七 行は邪正を發す

一一三三八 其の得る可き者を得て、之を善と爲す、

一一三三九 其の行ふ可き者を行いて、之を正と爲す、

一一三四〇 名は實を載す、

一一三四一 實は名を有す、故に

一一三四二 君子は。實有りて名を有さず、

一一三四三 名を奉じて實に由る

一一三四四 夫れ人の情慾は。咄咄たり、

一一三四五 郷郷たり、

一一三四六 守防は之を務む、

一一三四七 利害は之を謀る、

一一三四八 人の欲する所なり、

一一三四九 人の謀る所なり、是に於て。

一一三五〇 相い怨み相い惡む、

一一三五一 相い奪い相い殺す、蓋し。

一一三五二 物の相い怨み 惡み 殺し 奪うは、身に於て止まる、

一二五三 人の相い怨み 惡み 殺し 奪うは 結びて勢を爲す

一二五四 一怨起りて天下随う。故に

一二五五 其の咄咄郷郷を治むる者は。人の聡明なり。故に

一二五六 群醜有れば、則ち之を治めざるを得ず、

一二五七 情慾有れば、則ち之を教えざるを得ず、

一二五八 之を治むる者は君なり、

一二五九 之を教うる者は師なり、

一二六〇 君師立ちて。天下同然として。悦愛豫活す。

一二六一 悦愛豫活は同然たらざれば。則ち怨惡殺奪す。

一二六二 天は容れざる所莫くして、而して誠に逃れず、

一二六三 人は具せざる所莫くして、而して同じくする所に違わず、

一二六四 物を以て人を觀れば、人なる者は、各中の一物なり、

一二六五 人を以て我を觀れば、我なる者は、同中の各なり、

一二六六 物一なれば則ち氣一なり、是を以て

一二六七 善を好み惡を惡む、天下と一なる可し、

一二六八 物は各なれば則ち氣も各なり、是を以て

一二六九 趨舍嗜好は、未だ天下を以て通ず可からず、

一二七〇 同じく欲する者は善なり、獨り欲する者は惡なり、

一一二七一
一一二七二
一一二七三
一一二七四
一一二七五
一一二七六
一一二七七
一一二七八
一一二七九
一一二八〇
一一二八一
一一二八二
一一二八三
一一二八四
一一二八五
一一二八六
一一二八七
一一二八八

同じく思う者は正しく、
ひとり思う者は邪なり、
故に

衆の同くする所を修むは、
君子なり、

己の獨りする所に荒むは、
小人なり、

己の獨りする所を捨てて、
衆の同くする所に従うは、
勤なり、

衆の同くする所を捨てて、
己の獨りする所に従うは、
放なり、
惟だ

冀望する所有りて道に志せば、
則ち求めて已まず、

廻避する所有りて善に遷れば、
則ち行きて屢しば顧みる、

求めて已まざる者は、
報に期する有り、

行いて屢しば顧みる者は、
利に於て忘れず、
惟だ

大人は天下を以て一身と爲す。
故に忠、
以て己を盡す、

恕、
以て己を推す、
蓋し

同なる者は、
異の偶なり。

横目豎鼻は、
各、
同じからざる者莫し、
而して

聲音容貌は、
各、
異ならざる者莫きなり、

其の同じき者も亦た人人、
之を有す、

其の異なる者も亦た人人、
之を有す、
蓋し

同じく天を載せ地を履むの人にして、
而して

同じく圓顛方趾の形なり、

一一二八九
一一二九〇
一一二九一
一一二九二
一一二九三
一一二九四
一一二九五
一一二九六
一一二九七
一一二九八
一一二九九
一一三〇〇
一一三〇一
一一三〇二
一一三〇三
一一三〇四
一一三〇五
一一三〇六

一一二八九 同おなじく君くん臣しん父ふ子し・夫ふう婦ふ兄けい弟ていを倫りんとし。

一一二九〇 同おなじく水すい穀こくを服ふくし。同おなじく葛か裘きを著つく。

一一二九一 一人ひとりの好このむ所ところは 則すなわち天下てんかの好このむ所ところにして、

一人ひとりの惡にくむ所ところは 則すなわち天下てんかの惡にくむ所ところなり。

一一二九二 然しかりと雖いえども。意いち智ちの向むかう所ところは。趨すう舍しゃ嗜し好こう。各おのおの同おなじからず。故ゆえに

一一二九三 或あるいは萬ばん乘じょうを輕けい視しす。

一一二九四 或あるいは一いち諾だくに慷こう慨がいす。

一一二九五 或あるいは浮ふ沈ちんして世よを弄ろうす。

一一二九六 或あるいは顰ひん蹙しゆくして人ひとを避さく。

一一二九七 或あるいは機きを見みて勢せいを弄ろうす。

一一二九八 或あるいは道どうを守まもり節せつを踐ふむ。

一一三〇〇 或あるいは狷けん介かいして自おのずかまも

一一三〇一 或あるいは傲ごう蕩とうして爲なす無なし。

一一三〇二 或あるいは顯けん嘩やうして身みを赫かくす。

一一三〇三 或あるいは栖せい遲ちして光ひかりを韜たうむ。

一一三〇四 皆みな豪ごう傑けつの態たいにして。是ぜ非ひの興おこる所ところなり。唯ただ

一一三〇五 大人たいじんは。樂たのしめば 則すなわち天下てんかと偕ともに樂たのしむ、
安やすんずれば 則すなわち天下てんかと偕ともに安やすんず、 故ゆえに

一一三〇七

其の功は、則ち天下の功なり、

一一三〇八

其の道は、則ち天下の道なり、故に

一一三〇九

豪傑の能は乃ち大人の資なり。

一一三一〇

蓋し之を悦ばしむるに道有り、時有りてか、怨も亦た避けず、

一一三一〇

之を豫うるに道有り、時有りてか、奪も亦た厭わず、

一一三一〇

善悪是非の存する所なり。是を以て。

一一三一〇

道を忘れて愛憎欲惡を人に於て任ずれば、能く人の私に適す、

一一三一〇

勢に據りて予奪殺活を人に於て縦にすれば、能く人の志に賊す、此の故に。

一一三一〇

天下の事は、一治一亂一興一亡なり。

一一三一〇

或いは相い亡ぶ。或いは相い持す。

一一三一〇

勢は然るなり。惟だ勢を回らす者は、力なり。故に

一一三一〇

有力の者は。亂を回らして治を爲し。亡を轉じて存を致す。

一一三一〇

凶は吉に換る、

一一三一〇

悪は善に變ず、故に

一一三一〇

情慾なる者は、咄咄郷郷、荒めば則ち凶に走る、

一一三一〇

意智は之が役を爲せば、姦邪放肆、惟だ私のみ之を謀る、

一一三一〇

意智なる者は、思惟分辨、修むれば則ち道に至る、

一一三一〇

情慾は之が命を聽けば、視聽言動、惟だ命のみ之に従う、

一一三一〇

情慾は之が命を聽けば、視聽言動、惟だ命のみ之に従う、

一一三二五
一一三二六
一一三二七
一一三二八
一一三二九
一一三三〇
一一三三一
一一三三二
一一三三三
一一三三四
一一三三五
一一三三六
一一三三七
一一三三八
一一三三九
一一三四〇
一一三四一
一一三四二

戦に勝ちて吉凶分る。故に

自修の道は、思辨に在り

治人の道は、保通に在り

情慾の私なる者は、身に便なる所なり、故に自ら之を好む

意智の公なる者は、人に宜なる所なり、故に必ず佗を律す

佗に律する者を以て、自ら修む

身に便なる者を以て、衆を望む、此の故に。

徳は身を修むるより善なるは莫し

功は物を濟するより大なるは莫し、故に。

情慾は、之を保し之を通ぜよ、之を傷なうこと勿れ、之を塞ぐこと勿れ

意智は、之を正し之を明にせよ、之を頗すること勿れ、之を晦すること勿れ

保通の道は、安んず、和する、養する、疏するなり

是非なる者は、意智の断、截然たる者なり

善悪なる者は、情慾の成、未だ愨ならざる者なり

截然を未愨の間に於て行いて、察察たれば則ち人情失す

邪人は邪を信じて、而して正を信ぜず

正人は正を信じて、而して邪を信ぜず

各おの自から信ずる者を佗の信ぜざる者の上に於て伸ばさんと欲す

一一三四三
一一三四四
一一三四五
一一三四六
一一三四七
一一三四八
一一三四九
一一三五〇
一一三五一
一一三五二
一一三五三
一一三五四
一一三五五
一一三五六
一一三五七
一一三五八
一一三五九
一一三六〇

一 一三四三 噉噉たれば則ち凶機逼る

一 一三四四 人情 失えば、則ち和氣傷つく

一 一三四五 凶機 逼れば、則ち顛沛近づく

一 一三四六 正明の道は、思う、學ぶ、擇ぶ、修む

一 一三四七 衆の同じく思慾する所を通ず

一 一三四八 衆の同じく斃惡する所を疏すれば、則ち衆情 悦ぶ

一 一三四九 之を政に於て擧ぐれば、則ち

一 一三五〇 勸懲は化に漸む

一 一三五一 心の物爲るや。動きて住せず。

一 一三五二 往きて反り難し。

一 一三五三 見る所に拘わる。

一 一三五四 習う所に牽かる。

一 一三五五 處する所に著く。

一 一三五六 之く所に遷る。

一 一三五七 好む所に淫す。

一 一三五八 惡む所に塞がる。

一 一三五九 終に耳をして敢て聴ならず。

一 一三六〇 目をして敢て明ならざらしむ。是を以て。

一一三六一
一一三六二
一一三六三
一一三六四
一一三六五
一一三六六
一一三六七
一一三六八
一一三六九
一一三七〇
一一三七一
一一三七二
一一三七三
一一三七四
一一三七五
一一三七六
一一三七七
一一三七八

善惡は、習う所に於て長じ、廢する所に於て塞す、

是非は、擇ぶ所に於て明に、棄つる所に於て昏す、
惟だ

習は人を移す。慾は智を晦ます。

惑う者の多ければ、則ち同じく好惡する所の者も、
亦た或いは未だ心の本然より出でず、

不肖者の多ければ、則ち同じく是非する所の者も、
亦た或いは未だ事の正より出でず、

人は則ち天地の人なり、

道は則ち天地の道なり、

善惡は則ち天地の善惡なり、

是非は則ち天地の是非なり、

正視は目を眩さず、

正履は歩を失わず、大丈夫の事なり。

是非は明ならざれば、則ち怨怒、作る、

善惡は分たれざれば、則ち昏亂、極む、

是非皦皦たれば、則ち人情、藏る、

善惡察たれば、則ち凶機、逼る、

不明不分に論ずる勿れ。

皦皦察察。豈に喜ぶ可けんや。惟だ能く體す。故に能く處す。

人情に屈せず。凶機に激さず。

一一三七九

是非に明に、

一一三八〇

善惡に審に

一一三八一

從容として自から適せざる莫し。亦た大人の事なり。

一一三八二

天地の是を是とす、

一一三八三

天地の非を非とす、

一一三八四

天地の正を誘い、

一一三八五

天地の邪を防げば、則ち衆心悦ぶ

一一三八六

之を教に於て施せば、則ち撰擇修むる有り、

一一三八七

未だ能く天下の胸臆を以て之を思量し、

一一三八八

天下の好惡を以て之を黜陟せずして、

一一三八九

己の得て有する所を徳とし、

一一三九〇

己の由て行なう所を道とす、

一一三九一

或いは一个の聰明に依る。

一一三九二

或いは一時の利害に依る。

一一三九三

或いは相い抗衡す。

一一三九四

或いは相い守禦す。

一一三九五

或いは以て自から断ず。

一一三九六

或いは以て區畫を爲す。

一一三九七
一一三九八
一一三九九
一一四〇〇
一一四〇一
一一四〇二
一一四〇三
一一四〇四
一一四〇五
一一四〇六
一一四〇七
一一四〇八
一一四〇九
一一四一〇
一一四一一
一一四一二
一一四一三
一一四一四

断じて聽く者は、其の言に通じ、其の意を量る能わず、

猶お權衡の定まつて物を量るがごとし、

聽きて断ずる者は、能く通じ能く量る

猶お物に随いて權を移すがごとし、是を以て

人の言を容れざる者は、聰明なること能わず、以て人に上たり難し、

私を以てする者は、事に通ずる能わず、以て人に師たり難し、是の故に

君子なる者は、明能く是非を断じ、公能く是非に處し

教を以て正を誘い、禮を以て邪を防ぐ

見は各是非に定まる。未だ之を齋しくするに在るを免れず。

烏んぞ天地の物を成すに肖ん。

一尺の面 同じからず、

億兆の情 焉んぞ齋しからん、

同じからざるも亦た横目豎鼻なり、

齋しからざるも亦た好悪善悪なり、故に

政なる者は、其の同じき者を同じくし、

教なる者は、其の齋しからざる者を齋しくせず、

政は以て道を闡く、

教は以て徳を成す

- 一一四一五 政は善ならざれば則ち才を壊す、
- 一一四一六 教は善ならざれば則ち道を壅ぐ、
- 一一四一七 壅がりて通ぜず、
- 一一四一八 壊れて復し難し、
- 一一四一九 道立ち物成るに於てか病む。
- 一一四二〇 政教なる者は。上人なる者の柄。偏廢す可からず。
- 一一四二一 教を捨てて政に任ず、民は肅すと雖も方を知らず、
- 一一四二二 況んや謀計を抜みて、私智に任せ、文を舞し法を弄し、
- 一一四二三 其の齋しからん者を齋しくせんと欲するをや、
- 一一四二四 政無くして教を爲す、善と雖も而も徴せず、
- 一一四二五 況んや其の所見を執りて、而して門戸を立て、
- 一一四二六 衆の同じき者を察せず、
- 一一四二七 己の欲する所の者に同じから遣めんと欲するをや、
- 一一四二八 人は獨りする者無きこと能わず、
- 一一四二九 同じく欲する者無くんばあらず、
- 一一四三〇 獨り欲する者と雖も、恕す可き者有り、
- 一一四三一 同じく欲する者と雖も、才に長短有り、故に
- 一一四三二 天地なる者は。同じきものを同じくし、

一一四三三

齋ひとしからざる者ものを齋ひとしくせず、是こゝに於おいてか

一一四三四

能よく物ものを成なす。譬たとえば金鐵きんてつは利鈍りどんを齋ひとしくせず。而しかして

一一四三五

各おのの能よく其その才さいを成なし。其その成せい才さいに依よりて。乃すなわち

一一四三六

還かえつて各おのの用よう有あるがごとし。

一一四三七

長ちようなる者ものは、長ちようを以もつて之これを成なす、

一一四三八

短たんなる者ものは、短たんを以もつて之これを成なす、

一一四三九

安いずくんぞ能よく己おのれを執とりて彼かれを責せむるを得えん。

一一四四〇

東家とうかの子しは、肥こえて美びなり、

一一四四一

西隣せいりんの女じよは、瘠やせて艶えんなり、

一一四四二

苟いやしくも其その肥瘠ひそつの相あい同おなじきを欲ほつし、

一一四四三

其その長短ちようたんの相あい齋ひとしきを欲ほつすれば、則すなわち人ひとを戕賊しようぞくす、

一一四四四

物ものを殘害ざんがいす、故ゆえに

一一四四五

能よく政教せいぎようを執とる者ものは、其その能よくする所ところを助たすく、

一一四四六

其その能よくせざる所ところを措おく、

一一四四七

其その同おなじくする所ところを同おなじくす、

一一四四八

其その齋ひとしからざる所ところを齋ひとしくせず、是こゝに於おいてか。

一一四四九

道立みちたち物もの成なる。如もし物ものを成なすこと能あたわざれば、則すなわち政教せいぎよう道徳どうとく。世よに益えきする無なし。

一一四五〇

櫟いんかつ栝しゅうち修治しゅうちは、固こなり、而しかして物ものは汪洋おうようの中ちゆうに於おいて成なる、

一一四五一

規論訓誨は、固なり、而して才は寛容の中に於て成る

一一四五二

紛紛の是非に眩まず、

一一四五三

是非の紛紛は。各おのの好尚なり。彼の天地の物を成すを觀るに。

一一四五四

短なる者は短を以て之を成す、

一一四五五

長なる者は長を以て之を成す、

一一四五六

大なる者は大を以て之を成す、

一一四五七

小なる者は小を以て之を成す、是の故に

一一四五八

人を陶冶の中に置く者は。之を成すに務めて。而して

一一四五九

其の異を咎めず。士農工賈より。諸子百家曲藝の徒に至るまで。

一一四六〇

其の人を得れば。則ち功は天地に肖る。

一一四六一

而るを知らず。是非を以て天下を律せんと欲す。

一一四六二

以て勞して功の寡なき所なり。

一一四六三

滔滔の邪正に惑わず、

一一四六四

忘れて通ずれば、則ち親しみて和す、

一一四六五

宿りて隔つれば、則ち疏んじて賊す、

一一四六六

忘るれば則ち通ず、

一一四六七

忘れざれば則ち隔つ

一一四六八

忘れずとは。心に宿すの謂なり。

(PA 071)

(I 499b)

一一四六九
一一四七〇
一一四七一
一一四七二
一一四七三
一一四七四
一一四七五
一一四七六
一一四七七
一一四七八
一一四七九
一一四八〇
一一四八一
一一四八二
一一四八三
一一四八四
一一四八五
一一四八六

喜べば則ち喜を宿す、
怒れば則ち怒を宿す、
愛せば則ち愛を宿す、
憎めば則ち憎を宿す、
宿喜の機は喜ぶ、
宿怒の機は怒る、
宿愛の機は愛す、
宿憎の機は憎む、惟だ
富貴を忘るる者は、王公の前に正立す、
威武を忘るる者は、能く干戈の中に行く、
百結の衣も、服して厭わざる者は、衣を忘るるなり、
一簞の食も、食いて足る者は、味を忘るるなり、
功成りて功を忘れざれば、必ずや伐る、
恵成りて恵を忘れざれば、必ずや倨る、
富んで忘れざれば、必ずや物を軽んず、
貧して忘れざれば、必ずや物を貪る、故に
妬む者は、物の美を忘れざるなり、
方ぶ者は、己の能を忘れざるなり、

一一四八七
一一四八八
一一四八九
一一四九〇
一一四九一
一一四九二
一一四九三
一一四九四
一一四九五
一一四九六
一一四九七
一一四九八
一一四九九
一一五〇〇
一一五〇一
一一五〇二
一一五〇三
一一五〇四

功成り恵成る、而して能く相い忘る。

何を以てか矜伐の色有るを得ん。

物、我れ意に介すれば。則ち忘ること能わず。是に於て。

蚊虻も雷を爲し涓埃も山と成る。何となれば則ち

彼に酬いる者薄くして、自から以て厚と爲す、

我に報いる者大にして、自から以て小と爲す、

難易の物、我に由りて相い隔たるなり。故に。

徳は川流江浸を待ちて、纔に以て罪咎を免かる、

悪は羽毛の如しと雖も、瑕疵は価を損ず

片激は千場の歡を棄つ、

一怒は百年の恩を賊す

善悪成敗の難易なり。

忘れて通ずれば。則ち其の榮辱窮達に於るは。

猶お同肆の水火を相い救うがごとし。

宿憤宿怒有りと雖も。相い扶くること手足の相い護るが如し。

通は其の身に切なれば。

則ち忘れざらんと欲するも。

而も豈に得んや。

一一五〇五
一一五〇六
一一五〇七
一一五〇八
一一五〇九
一一五一〇
一一五一一
一一五一二
一一五一三
一一五一四
一一五一五
一一五一六
一一五一七
一一五二八
一一五二九
一一五三〇
一一五三一
一一五三二

化かする者ものは。忘ぼう通つうの跡せき無なきなり。

或あるひと曰いわく。我わが功こうを忘わする可べくんば、則すなわち人ひとの功こうも、亦また忘わする可べし、

我わが患けいを忘わする可べくんば、則すなわち人ひとの患けいも、亦また忘わする可べしと

曰いわく。忘ぼうは豈あに徒と忘ぼうならんやと。

安やすんじて之これを有うし、

正ただしくして之これを行おこなへば、

町畦ちやうけあ有あること無なし。

勇ゆう士しは陳ちんに臨のぞみて身みを忘わする、

怯きやうしや者は敵てきを見みて主しゆを忘わする、

其その能よく其その身みを忘わする者ものは、其その主しゆを忘わすること能あたわざるを以もつてなり、

其その能よく其その主しゆを忘わする者ものは、其その身みを忘わすること能あたわざるを以もつてなり、

豈あに其その主しゆを忘わすれて、又また其その身みを忘わする者もの有あらんや、

豈あに其その身みを忘わすれず、又また其その主しゆを忘わすれざる者もの有あらんや、

忘ぼうなる者ものは、天てん徳とくなり、故ゆえに通つうず、

徒と忘ぼうの者ものの若ごときは、則すなわち心しん疾しつの人ひとなり、噫あ、又また何なにをか言いわんや、

而しかして之これを以もつて之これを文ぶん章しょうす。

之これを以もつて之これを品ひん節せつす。

之これを以もつて之これを和わ樂らくす。

一一五二三
一一五二四
一一五二五
一一五二六
一一五二七
一一五二八
一一五二九
一一五三〇
一一五三一
一一五三二
一一五三三
一一五三四
一一五三五
一一五三六
一一五三七
一一五三八
一一五三九
一一五四〇

之を以て之を次序す。

之を以て之を號令す。

之を以て之を鼓舞す。

化の被ること深し。

道の行わるること遠し。

老幼は其の養を受く、

少壯は其の職を奉ず

熙熙たり。雍雍たり。

人人 其の同じからざる者を慎む。

其の同じき者を務む。

之を大同と謂うなり。

君師の任なる哉。

大有力に非ずんば。

將に孰れか之を能くせんとす。

人に食を予うる者は、未だ人をして飽か使むること能わず、

人に貨を予うる者は、未だ人をして富ま使むること能わず、

其の業を奪わず。其の時を奪わざれば。則ち。

人は且に富みて飽く。是の故に。

一一五四一
一一五四二
一一五四三
一一五四四
一一五四五

善ぜんを以もつて人ひとに勝まさる者ものは、人未ひといまだ全まったく之これに服ふくせず、
善ぜんを以もつて人ひとに下くだる者ものは、人必ひとかならず悦よろこんで服ふくす。
是これに由よりて之これを觀みれば。
彼かの人ひとをして孝弟こつていぢゆうしん忠信ちゆうしんなら使しむる者ものは。
豈あに家いえに説とき戸こに諭さとす者ものならんや。

人道

一一五四八

動轉止持は。境を清濁に於て分つ。

一一五四九

清境なる者は、神、天に雌なり、

一一五五〇

濁境なる者は、神、天に雄なり、故に。

一一五五一

轉中は變動に由りて定む、

一一五五二

持中は定常に由りて變ず、故に

一一五五三

道に爲成すれば、其の主を則ち天神と曰う、

一一五五四

情に感應すれば、則ち鬼神と曰う、

一一五五五

情道は聲を異にすと雖も。其の主は一なり。

一一五五六

神は雌なるを以て、而して爲成は天事を爲す、

一一五五七

神は雄なるを以て、而して感應は地事を爲す、故に

一一五五八

地は噉喻して、而して東規、南北し、

一一五五九一六〇

日は南北して、而して地物、發收すれば、則ち天は其の感應を成すなり、

一一五六一

日は順行して、而して冬夏斯に成り、

一一五六二一六三

日は逆行して、而して晝夜斯に成れば、則ち神は其の爲成に従うなり、是の故に。

一一五六四

天中の爲は、則ち神、天に於て聽す、

一一五六五

地中の成は、則ち天、神に於て従う、故に。

一一五六六

天物の態は、則ち錯行して其の體を軋せず、氣氣は相い交り、感應は常有り、

一一五六七

地物の態は、則ち錯行して其の體を相い軋す、氣物は交接して、感應は常無し、是を以て。

(PA 075)

(1 500b)

- 一一五六八 地なる者は穢濁にして。彩聲臭味を醸す。
- 一一五六九 交接生化を事す。是を以て。
- 一一五七〇 濁境にして。而して事物錯綜し。鬼神變化の府を爲す。
- 一一五七一 濁境の竝立は。一動一植なり。
- 一一五七二 天に於ては則ち同じく資ると雖も。而も
- 一一五七三―一七四 物に於ては則ち分有り。植に於ては。則ち運用を無意に於て給す。動に於ては。則ち運用を有意に於て給す。
- 一一五七五 給せられて意を有す。而して
- 一一五七六 給する者は則ち無意なり。
- 一一五七七 反して合する者を觀る。故に。
- 一一五七八 彩聲臭味の境。
- 一一五八〇 交接生化の地。
- 一一五八一 舍意有意。其の間に相い依る。
- 一一五八二 有意は。内に其の意を有す。
- 一一五八三 外に其の技を發す。
- 一一五八四 意は。則ち思惟分辨。愛憎欲惡なり。
- 一一五八五 我は我が境を開きて。人の天地を立す。
- 一一五八六 愛憎欲惡は。物と類す。
- 一一五八七 思惟分辨は。物に長ず。

一一五八八
一一五八九
一一五九〇
一一五九一
一一五九二
一一五九三
一一五九四
一一五九五
一一五九六
一一五九七
一一五九八
一一五九九
一一六〇〇
一一六〇一
一一六〇二
一一六〇三
一一六〇四
一一六〇五
一一六〇六

思惟は、意なり、

分辯は、智なり、之を合して心と爲す、

愛憎は、情なり、

欲悪は、慾なり、之を合して性と爲す、

心性は相和すれば、則ち其の情慾も、亦た物と異なるなり。故に

人心の適否は、離合の勢を作る。

合すれば則ち億兆、心を結ぶ、而して上下和同す、

離るれば則ち天下、心を散ず、而して彼此乖戾す、是を以て。

等は貴賤を辨ず、

類は親疏を辨ず、

天に順じて其の則を奉ず、

人に由りて其の道を立す、

衆を安んずるは、人の大功なり、

自から安んずるは、我の廣居なり、是を以て。

人は、其の分を守る、

其の職を勤む

分を守らざれば則ち僨亂す、

職を勤めざれば則ち荒廢す、

職に士農工賈有りと雖も、而も

一一六〇七
 一一六〇八
 一一六〇九
 一一六一〇
 一一六一一
 一一六一二
 一一六一三
 一一六一四
 一一六一五
 一一六一六
 一一六一七
 一一六一八
 一一六一九
 一一六二〇
 一一六二一
 一一六二二
 一一六二三
 一一六二四
 一一六二五

上は一人より、下は億兆に至るまで、造化を賛するを以て職と爲す、
 上は一人より、下は億兆に至るまで、其の地を守るを以て分と爲す、
 天功を貪り、天物を費す、之を汰と謂う、
 天功を貪り、天物を費す、之を汰と謂う、
 人物を偷み、人物を費す、之を賊と爲す、
 仁義學禮は、道の綱なり、
 殺活予奪は、政の柄なり、
 鰥寡孤獨は之を愍む、
 士農工賈は之を用う、
 才良を甄拔す、
 蠱賊を沙汰す、
 水にして之に舟し、溪にして之に梁す、
 春にして之を啓き、秋にして之を閉ず、故に。
 人の志ざす所は、則ち家國安寧なり、
 人の辨ずる所は、則ち尊卑親疏なり、
 天功を貪らざれば、則ち欺を用うる所莫し、
 天物を費さざれば、則ち奢を用うる所莫し、
 人功を偷しむ者は、勤を用うる所莫し、
 人物を費やす者は、儉を用うる所莫し、
 夫れ人は交接廣しと雖も、人際は之を務め、餘力は物に及ぼす。道の序なり。

(PA 077)

(I 501a)

一一六二六 人際は廣しと雖も。望衆自修に過ぎず。

一一六二七 自修は惟だ嚴なれ、

一一六二八 望衆は惟だ寛なれ、蓋し夫れ

一一六二九 人の生を爲すや。善惡正邪、

一一六三〇 智愚利鈍、共に天より來るなり。

一一六三一 造化を贊するを以て心と爲さば。人を安んずるに於て愉び、

一一六三二 人に通ずるに於て樂しむ、

一一六三三 安を欲する者は、其の危を安んじ、其の覆を扶く、

一一六三四 兩ながら全し難きを以て、而して其の莠を鋤し、其の苗を培う、

一一六三五 通を欲する者は、其の塞を啓きて、其の蔽を通ず、

一一六三六 盡く通じ難きを以て、而して其の情を疏み、其の弊を懲む、

一一六三七 君師の任なり。

一一六三八 父、則ち家にして君なり、

一一六三九 君、則ち國にして父なり、故に。

一一六四〇 慈は以て子を愛す、

一一六四一 孝は以て父を敬す、

一一六四二 孝慈なれば、安んぜざるの家無し、

一一六四三 愛敬なれば、安んぜざるの國無し、

一一六四四 學に於て之を知る、

- 一一六四五
- 一一六四六
- 一一六四七
- 一一六四八
- 一一六四九
- 一一六五〇
- 一一六五一
- 一一六五二
- 一一六五三
- 一一六五四
- 一一六五五
- 一一六五六
- 一一六五七
- 一一六五八
- 一一六五九
- 一一六六〇
- 一一六六一
- 一一六六二
- 一一六六三

禮に於て之を修む

才徳は。艸木の異類別能なるが如し。故に。

童に人に於て其の才徳を知るのみならず、

身に於ても亦た宜しく其の才徳を揣るべし。故に。

力を伸ばし、濟物に於て務め、

能わざれば則ち退きて自から善とす。故に

大人は、國を量りて用う、

小人は、腹を量りて食う、

人をして盡く己の向かう所に向わしめんと欲する者は、癡なり、

人をして盡く己の欲する所に欲せしめんと欲する者は、仁なり、夫れ

衆智は。明に乏しく、通に病む、

耿耿を得て明と爲す、

滴滴を得て通と爲す、

迷悟混淆し、眞妄朦朧す、故に

智の事は。之を廓にするに天を以てす。

天は萬物を成す、

神は萬神を用す、

物 萬なれば則ち其の形も萬なり、

神 萬なれば則ち其の情も萬なり、

- 一一六六四
- 一一六六五
- 一一六六六
- 一一六六七
- * 一一六六八
- 一一六六九
- 一一六七〇
- 一一六七一
- 一一六七二
- 一一六七三
- 一一六七四
- 一一六七五
- 一一六七六
- 一一六七七
- 一一六七八
- 一一六七九
- 一一六八〇
- 一一六八一
- 一一六八二

萬なる者は一に資る、

一なる者は萬に給す、故に原は一にして派は別なり。

同じと雖も亦た異なる。蓋し天地なる者は。大物なり。

然りと雖も猶お且つ相い依りて給資す。

一一は網縊す。萬の神物。其の間に成る。人は之を萬に資る。

而して人は其の一に居る。故に一元氣より之を觀れば。

天地水火は、變じて雲雷雨雪に之く、

水陸動植は、碎して菌寓蟲多に至る

偕に我の與るに非ざる莫し。而して

雲雷雨雪は、水火に屬す、

風恬山壑は、天地に屬す、則ち

此の爲具に於て網縊す。而して釀成する者は。動植なり。然り而して

天地水火は、則ち清淨の府に居りて、循環の生を活す、

水陸動植は、則ち穢濁の境に居りて、鱗比の生を活す、

鱗比は生を堅軟に於て立す、

意を有無に於て活す、故に。

我より類を分てば、則ち大に異なると雖も、而れども

天より物を成せば、則ち合して一を成す、

天の此の生を釀する。植は本氣に資るに勝る、

- 一一六八三
- 一一六八四
- 一一六八五
- 一一六八六
- 一一六八七
- * 一一六八八
- 一一六八九
- 一一六九〇
- 一一六九一
- 一一六九二
- 一一六九三
- 一一六九四
- 一一六九五
- 一一六九六
- 一一六九七
- 一一六九八
- 一一六九九
- 一一七〇〇
- 一一七〇一

動は神氣に資るに勝る

醸し得て分るる所は。乃ち有意無意なり。

動植は。意に於ては則ち有無すと雖も。而も

生に於ては則ち彼此同じ。故に

其の所謂體用性才は。彼此同じく之を有す。而して

其の體用性才なる者は。彼此 各 其の態を異にす。故に

天に天物精神と口う者は、

我に身生心性と口う、

天に精靈鬼神と口う者は、

我に情慾意智と口う、是を以て

其の用の網縊給資は、

性の保持立役なり、

聲を以て之を求むれば、則ち若く混焉たりと雖も

而も態を以て之を察すれば、則ち天人異なるなり、

既已に態を異にすれば則ち其の技は何ぞ又た同じからん。

萬物の網縊の間に於て醸す。生なる者は、天の營なり、

育なる者は、與の養なり、

天地は網縊して。水を成し火を成す。

水火は天地を隔つと雖も。而も

一一七〇二
一一七〇三
一一七〇四
一一七〇五
一一七〇六
一一七〇七
一一七〇八
一一七〇九
一一七一〇
一一七一
一一七一二
一一七一三
一一七一四
一一七一五
一一七一六
一一七一七
一一七一八
一一七一九
一一七二〇

一一七〇二 同おなじく其その地ちに立りつす、
一一七〇三 同おなじく其その天てんに居おる、
一一七〇四 水すいは火かを食しょくすに於おいて育いく、
一一七〇五 火かは水すいを食しょくすに於おいて育いく、
一一七〇六 動どう植しょくは又また其その間かんに醸かもす。散さんじて萬ばん品びんを爲なす。
一一七〇七 又また用ようを天てん地ち水すい火かに於おいて資とる。
一一七〇八 故ゆえに人ひとの境きょうより之これを言いえば。其その人ひとの世よに寓ぐうするや。
一一七〇九 之これを無む意いの天てんに於おいて資とる、
一一七一〇 之これを有う意いの物ものに於おいて成なす、
一一七一 地ちに立りつす、
一一七一二 天てんに居おる、
一一七一三 水すいに於おいて液えきす、
一一七一四 燥そうに於おいて煦くす、
一一七一五 竝へい立りつする者ものと。相あい依よりて與よを爲なす。是こを以もつて
一一七一六 神しんは保ほ運うん化か持じに於おいて活かつす、
一一七一七 氣きは聲せい色しき臭しゅう味みに於おいて交まじわ、
一一七一八 物ものは配はい嗣し器き地ちに於おいて立たつ、
一一七一九 質しつは飲いん哺ほ便べん溺にょうに於おいて依よる、
一一七二〇 保ほする者ものは、天てんの給きゅうする所ところに資とる、外そとより内うちを衛えい護ごするなり、

* 一七二一
一七二二
一七二三
一七二四
一七二五
一七二六
一七二七
一七二八
一七二九
一七三〇
一七三一
一七三二
一七三三
一七三四
一七三五
一七三六
一七三七
一七三八
一七三九

運する者は、與の通ずる所に依る。内より外を營養するなり。是を以て。
物の始めて生ずる。

目は未だ色を辨ぜず、耳は未だ聲を辨ぜず、

噓喩は直ちに通ず、乳哺は從いて辨ず、

噓喩は未だ足らず、外は羽毛鱗甲を以て保す、

乳哺は未だ足らず、他の艸木鳥獸を假て養う

人なる者は。神氣に長じて、而して

本氣に不足す、

神氣の有餘を以て

本氣の不足を補う

飲啄の養は、水火の調を待ちて食う、

羽毛の防は、布帛の工を假りて補う

此れ猶お足らず。宮室を爲し。城郭を營し。

医藥を爲し。鍼焔を用う。夫れ

物の剖析して散ずるや。

散ずれば則ち盡く變ず。故に

之を植と謂えば則ち一なり、植に就きて之を析けば、則ち有らざるの形無し、

之を動と謂えば則ち一なり、動に就きて之を析けば、則ち有らざるの物無し、

故に人の有意を以て長を天地の間に於て恃む。亦た萬變中の一態なり。

一一七四〇
一一七四一
一一七四二
一一七四三
一一七四四
一一七四五
一一七四六
一一七四七
一一七四八
一一七四九
一一七五〇
一一七五一
一一七五二
一一七五三
一一七五四
一一七五五
一一七五六
一一七五七
一一七五八

其の意技を以て。能く自から天地間に於て貴しとす。

天の人を私するに非ざるなり。

天の人を私するに非ざると雖も。而も

天に於て資る所の意技を以て。

能く自から天地間に於て貴きを得る。故に其の稟るや。

本氣に雌なり、

神氣に雄なり、

能く其の雄を取り、

以て其の雌を補う。故に

服御の用は廣し、

調和の求は冗なり。是に於て。

地を墾して穀を取り。海を煮て鹽を取る。

艸木土石は、見れば則ち取りて以て之を材にす、

其の材に當らざる者は、之を糞壤に用う、

鳥獸魚鼈は、ちようじゆうぎよべつ 遇えば則ち殺して之を啗う、

其の啗う可からざる者は、之を服飾に當てる、

竟に其の力の萬物を役するに恃み。天地を取りて。以て己の有と爲す。夫れ

人は己の境を開きて。以て己を貴しと爲す。

終に其の智を以て。以て天を窺う。

一七五九
 一七六〇
 一七六一
 一七六二
 一七六三
 一七六四―六五
 一七六六
 一七六七
 一七六八
 一七六九
 一七七〇
 一七七一
 一七七二
 一七七三
 一七七四
 一七七五
 一七七六
 一七七七
 一七七八

人の身は、萬物中の一物にして、而して
 其の意は、萬神中の一神なるを知らず、
 以て天獨り人に私すと爲す。蓋し
 人の技は、鼓舞に巧なりと雖も、亦た惟だ人の巧む所に於て巧むのみなり、而して
 其の意は、思辨に長ずると雖も、亦た惟だ人の長ずる所に於て長ずるのみなり、
 (写本939からの転記につき削除。)
 諸を其の竝び立つ所に方れば。
 互いに工拙通塞有り。
 若し之をして傍觀せしむれば惡んぞ群才に拙して跳出するを視ん。夫れ
 無意の境を爲すは。廻ち清淨の府なり。
 其の無意を以て、以て善惡愛憎を畜えず、
 其の清淨を以て、以て聲臭配嗣を用いず、
 天人の反なり。反せざれば合せず。
 合せざれば則ち天地支離す。故に
 死生を觀て、而して天地に融せず、
 無意を觀て、而して有意に反せず、
 造化の中より己を觀ずして、其の造化を觀るに。己より始む。
 魚は躍つて水を出でず。賊を捉えて其の子を逐う。
 夫れ人なる者は。生を濁穢に於て資る、

一一七七九

物を鱗比に於て成す。

一一七八〇

養うに竝立の與に依れば。則ち

一一七八一

聲色臭味と配嗣器地とに求めざることを能わず。

一一七八二

多智多技を以て。用廣く求冗なるに遭う。

一一七八三

物に遇いて殺さざる所無ければ。則ち其の殺を嗜むや。虎狼より熾んなり。

一一七八四

修飾して以て垢穢を掩えば。則ち其の不淨や。鳥獸より甚し。

* 一一七八五

而して妄惑の念も。亦た人より甚しきは莫し。是を以て知る。

* 一一七八六

夫れ麝臍を屠りて。其の臭を愛し。魚腸を醃にして。其の味を甘にす。

* 一一七八七

傍觀すれば夫れ狗の臭を逐い。烏の穢を貪ると奚んぞ擇ばん。

一一七八八

故に人と物と各おの其の境を開けば。

一一七八九

則ち其の美醜も亦た各おの其の愛憎に従う。故に

一一七九〇

思想技巧の運之を無爲の巧に比ぶれば。則ち惟だ其の煩を觀る。是を以て。

一一七九一

羽毛骨角の美之を清淨の府に納むれば。則ち惟だ其の穢を觀るのみ。

一一七九二

是を以て。人の境を開くや。

一一七九三

其の思慮知辨。愛憎欲惡を以て。其の技を施す。此の故に。人なる者は。

一一七九四

物に通ずるの智有るを以て。終に通ぜざるの智を有す。

一一七九五

事を決するの断を以て。還つて不断の惑を抱く。

一一七九六

沾沾の窺窬を好み

一一七九七

反合の達觀に罔し

- 一一七九八
- 一一七九九
- 一一八〇〇
- 一一八〇一
- 一一八〇二
- 一一八〇三
- 一一八〇四
- 一一八〇五
- 一一八〇六
- 一一八〇七
- 一一八〇八
- 一一八〇九
- 一一八一〇
- 一一八一
- 一一八一二
- 一一八一三
- 一一八一四
- 一一八一五
- 一一八一六

欲は求むる所有り、

智は勞する所有り、

鳥を燐にし獸を檻にし。味を調え服を文る。之を己に營して足らず。

亦た之を類に求む。有力は無力を執え。驅使鞭苔す。

之をして稼せ使む、而して其の粹を食う、

之をして織ら使む、而して其の精を衣る、

其の粹を食い、其の精を衣る者は、則ち君爲り、

其の糲を食い、其の麤を衣る者は、則ち民爲り、是に於て。

有力は、自から衣食すること能わず、奉を民に恃る、

無力は、自から守禦すること能わず、保を君に依る、是に於て。

君民は勢を通じ。相い共に奉保す。以て迭いに其の役を執る。故に

民は其の君に奉ずるを職とす、

君は其の民を保するを職とす、而して

民は君に格いて俊めず、

君は民に取りて已まず、

下なる者は則ち誅せらる、

上なる者は則ち移る、故に

天人なる者は反を以て合一す。夫れ反の態を爲す。

彼に没する者は、此に露す、

一一八一七
一一八一八
一一八一九
一一八二〇
一一八二一
一一八二二
一一八二三
一一八二四
一一八二五
一一八二六
一一八二七
一一八二八
一一八二九
一一八三〇
一一八三一
一一八三二
一一八三三
一一八三四
一一八三五

此に隠るる者は、彼に見る
之を一に資ると雖も、而も
二に反す、是の故に。
善惡に悦怨し、
是非に分辨するが如きは、
惟だ意の有する所にして、而して天は與らざるなり。是の故に。
天の神爲、
人の意作、
其の態は固より反す。惟だ其の資るや應ずる有り。故に
天に卑高を有す、人は資りて尊卑の態を爲す、
天に親疏を有す、人亦た親疏の態を爲す、蓋し
水火なる者は、兄弟なり、人は觀て以て疏と爲す、
水魚なる者は、疏屬なり、人は觀て以て親と爲す、蓋し
人の倫は、之を約すれば、則ち親疏尊卑なり。
夫婦は、則ち疏より親に來る、
兄弟は、則ち親より疏に之く、
親より以上は、我より尊を爲す、
子より以下は、我より卑を爲す、
家を國に推せば、則ち君民即父子なり、

- 一一八三六
- 一一八三七
- 一一八三八
- 一一八三九
- 一一八四〇
- 一一八四一
- * 一一八四二
- 一一八四三
- 一一八四四
- 一一八四五
- 一一八四六
- 一一八四七
- 一一八四八
- 一一八四九
- 一一八五〇
- 一一八五一
- 一一八五二
- 一一八五三
- 一一八五四

己を物に推せば、則ち萬物皆同胞なり、是の故に。
 人性は自から奉戴臨御の意有り。
 夫の造化感應の爲を觀て、以て神道を建つ、
 始を感じ本を思うの心を以て、以て祭祀を設く、
 是の故を以て。人は能く天を尊び地を卑しむ。噫。
 高下は、天なり、
 尊卑は、人なり、是を以て。
 天は人の之を仰ぐが爲にして、尊からず、
 地は人の之を臨むが爲にして、卑しからず、
 且つ姑く天地の體に就きて之を言わんか。夫れ
 戴く所を奉ず、
 履む所に臨む、人の態なり。而して
 人は能く天を戴き地を履めば。則ち尊卑は我より定まる。故に
 枢紐は極を守る。衆象は之に共す。是に於てか。
 帝所に擬す可し。地の穢濁を受けて。至卑に居ると懸隔す。
 若し全天地より之を觀れば。則ち
 人物は則ち立ちて地を履む、
 天象は則ち循りて地を拱く、
 人は極辰を尊ぶと雖も。亦た惟だ中の兩端なり。然れば則ち

一一八五五

地物は天を戴く、

一一八五六

天象は中を奉ず、

一一八五七

中外は未だ高卑を定めず。如何んぞ果たして尊卑を定めん。

一一八五八

如し惟だ其の鬼神造化を索むれば。天地は有せざる所無し。此の故に。

一一八五九

天神は尊卑の囿する所に非ず。

一一八六〇

人は天神に囿せらる。囿せらるるを以て。而して

一一八六一

敬仰を此に用うる有り。是を以て。

一一八六二

人は弾丸の地に環居し。洲壤を畫して。各おの其の國を爲す。

一一八六三

是に於て。各おの其の君臣を設け。各おの其の衣冠を製す。

一一八六四

意匠の營する所。其の用は則ち一にして。而して

一一八六五

其の巧は變化す。是の故に。其の天神奉戴の意は則ち同一なり、

一一八六六

天神奉戴の設は則ち各異なり、是の故に。

一一八六七

泥塑木偶は。人を以て體を建つるなり。

一一八六八

鐘鼓犠牲は。人を以て之を饗するなり。

一一八六九

賞善罰惡は。人を以て之を望むなり。

一一八七〇

宮室几筵は。人を以て之を安んずるなり。是の故に。

一一八七一

天徳の洪蕩は。我を眷するに意無ければ、則ち亦た我を棄つるに意無し、

一一八七二

惟だ天道の揜わざる、經は一須臾を失わざれば、則ち亦た

一一八七三

緯も亦た一秋毫を遺さず、

一一八七四
一一八七五
一一八七六
一一八七七
一一八七八
一一八七九
一一八八〇
一一八八一
一一八八二
一一八八三
一一八八四
一一八八五
一一八八六
一一八八七
一一八八八
一一八八九
一一八九〇
一一八九一
一一八九二

明を以て著を爲さず、
冥を以て晦を爲さず、
上より臨むに嚴なり、
傍より觀るに察なり、
其の微をして顯なら使む、
是を以て。
其の長をして消なら使む、
惟だ誠の在る所にす。故に天徳は未だ私する所に有らず、
天道は未だ揜おう所に有らず、
是の故に。
天地に天神たる者は。像形に寓せず。
祭祀に食せず。
善惡黜陟を用いず。
明暗幽明を揜わず。
物物は並び立つ、
鬼神は相い交る、
往來酬酢し。感應は鬼神を見す。
鬼神の態は。向う。背く。順う。逆らう。有り。無し。存す。亡す。
意を以て之を索むれば、能く意外に遊ぶ、
常を以て之を求むれば、常中に居らず、是に於て。
人は。此の如く思辨を有す、

一一八九三

此の如く技巧を行ふ

(PA 085)

一一八九四

此の思辨技巧を以て。意外に遊び。常中に居らざる者を索む。

一一八九五

其の不測に惑いて。而して得る可からず。竟に人を提げて漸む。漸んで已まず。

一一八九六

私偽を執る、

一一八九七

公誠を談ず、

一一八九八

知解は愈いよ巧む、

一一八九九

蠱惑は益ます深し、

一一九〇〇

之を通ずるに人を以てす、

一一九〇一

小物の大分は。麴ち一動一植なり。是に於て。

一一九〇二

植の無意は。天に異なる有り、

一一九〇三

動の有意は。人に同じからず、

一一九〇四

是の故に。人の天地に於ける。其の有する所を有す、

一一九〇五

其の有は。即ち有意の私なり、

一一九〇六

其の行は。即ち有作の偽なり、

一一九〇七

我の有する所を以て。我に無き所を天に望む。

一一九〇八

是に於て無意の公。不捨の誠を。天に於て觀る。

一一九〇九

是れ蓋し人を以て天に望むを以てなり。故に

一一九一〇

公誠を天に得て。苟くも人を以て天に望まざれば。則ち

一一九一一

(I 504a)

- 一一九二二
- 一一九二三
- 一一九二四
- 一一九二五
- 一一九二六
- 一一九二七
- 一一九二八
- 一一九二九
- 一一九三〇

公誠を併せて失す。故に

公誠は則ち人に非ずと雖も。而も

人を以て天を食すなり。是を以て。

人を知らざれば、則ち天を知らず、

天を知らざれば、則ち人を知らず、

是の故に。諸動は營營として。同じく意智情慾を用うと雖も。而も

我は則ち我の愛憎欲惡を以て。其の知解分辨を用う。

以て其の技巧を其の能くする所に於て施す。蓋し人の性は。多く外に求む。是に於て。

情慾を愛憎欲惡に於て運す、

愛せば則ち護して其の長を望む、

憎めば則ち厭いて其の消を願う、

守禦を思慮知辨に於て技す、

愛憎は辨に動く、

安危は慮に運す、

是に於て群醜は連結して。勢は萬里を動揺す。

彼の鳥獸と各各其の喜怒愛憎を行うと異なるなり。

且つ我は神に長じ、

本に薄きを以て、而して

水火土石。艸木鳥獸。其の求むるや亦た甚だ廣し。是に於て。

- 一一九三一
- 一一九三二
- 一一九三三
- 一一九三四
- 一一九三五
- 一一九三六
- 一一九三七
- 一一九三八
- 一一九三九
- 一一九四〇
- 一一九四一
- 一一九四二
- 一一九四三
- 一一九四四
- 一一九四五
- 一一九四六
- 一一九四七
- 一一九四八
- 一一九四九

無意は禁ずる所無し、

有意は恣まに取りに有す、故に

勢の走る所は。國を君臣に於て建て、

家を夫婦に於て成し、

尊卑を父子に於て分け、

交際を師友に於て講せざるを得ず、

彼の鳥獸の如きは。乳に因りて唯だ所生を知る、

乳を辞せば則ち同胞を忘る、

人は則ち知りて之を辨ずる者有り、

思いて之を慮る者有り、是に於て。

親親は内に昵く、

疏疏は外に會う、是に於て。

群醜は其の思辨を忘れ。各おの其の情慾を恣まにす。

相い奪い相い食み。多知多求す。

勢は然らざるを得ざれば、則ち

教方を以て之を矜式せざる能わざるなり。蓋し

人心は。思えば、則ち自から安んずるを以て佗を苦しむに忍びざる有り、

感ぜば、則ち苟生を以て其の辱に易えざる有り、

悦べば、則ち之を奉戴せんと欲す、

一一九五〇

惡めば、則ち之を消滅せんと欲す。是れ乃ち。

一一九五一

物の無き所にして、而して

一一九五二

人の有する所なり。

一一九五三

人は。此の性を以て、此の勢に由り、

一一九五四

此の心を以て、此の智を用す。

一一九五五

假い其の國をして境域を同じくせず。舟楫を通ぜざら令むとも。

一一九五六

人にして人の意を具せざる有らば。則ち知らず。

一一九五七

若し其の意を具する有らば。何に往くとしてか此の設無からん。

一一九五八―五九

此の設は則ち有りと雖も。人は窺竅の通惑を以て、

一一九六〇

技巧の異を用う

一一九六一

教は一同ならず。月を指す所の地に於て争う。

一一九六二

教は一同ならず。月を指す所の地に於て争うと雖も。而も

一一九六三

各おの其の情慾を恣まにし。相い奪い相い食うが爲に之を設くるは。則ち一なり。

一一九六四

小事を擧げて之を例するに。衣服飲食の如きは。

一一九六五

方に従い其の製を異にし、

一一九六六

地を以て其の調を異にすと雖も

一一九六七

饑寒の爲に之を設くるは則ち一なるのみ。

一一九六八

人は窺竅の通惑に由りて。

一一九六九

己を推して天を觀て。智解すること一ならず。

- 一一九七〇
- 一一九七一
- 一一九七二
- 一一九七三
- 一一九七四
- 一一九七五
- 一一九七六
- 一一九七七
- 一一九七八
- 一一九七九
- 一一九八〇
- 一一九八一
- 一一九八二
- 一一九八三
- 一一九八四
- 一一九八五
- 一一九八六
- 一一九八七
- 一一九八八

技巧ぎこうの之これに同じおなきこと察さつせざる能あたわず。

故ゆえに規き規きとして己おのれに同じおなからざるに吠ほゆ。

我われも亦また猶なお其その中に居ちゆうるなり。是この故ゆえに。

天地てんちに觀みる者ものは。慣なれたる所ところに執しゆうして、慣なれざる所ところを疑うたが、

習ならいたる所ところに黨とうして、習ならわざる所ところに驚おどろ、

諸これを天地てんちに表ひやうして。而しかして依よる可べき者ものは。修しゆうを以もつて自おのら安やすんず、

治ちを以もつて人ひとを安やすんず、是この故ゆえに。

親しん疏そ尊そん卑ひの倫りんは、之これを天下てんかに達たつす可べし、

士し農のう工こう賈この利りは、之これを四海しかいに通つうず可べし、

善ぜん惡あくは天てんより來きたる、

是ぜ非ひは智ちを以もつて分わかる、故ゆえに

人ひとの世よに處しよするに。

勢せいは此こゝに事つかうること有あらざるを得えず。

善ぜんを修おさめ惡あくを除のぞく、

非ひを去さり是ぜに就つく、

符ふを悅えつ怨おん榮えい辱じよくに於おいて合がつす。

姑しぼらく之これを農のうに於おいて言いうに。

苗なえの養やうを爲なし、莠はくの害がいを爲なす、天地てんちは同おなじく之これを有うす、

苗なえは則すなわち之これを愛あいし、莠はくは則すなわち之これを惡にくむ、人ひとは獨ひとり之これを持じす、

- 一一九八九
- 一一九九〇
- 一一九九一
- 一一九九二
- 一一九九三
- 一一九九四
- 一一九九五
- 一一九九六
- * 一一九九七
- 一一九九八
- 一一九九九
- 一二〇〇〇
- 一二〇〇一
- 一二〇〇二
- 一二〇〇三
- 一二〇〇四
- 一二〇〇五
- 一二〇〇六
- 一二〇〇七

愛悪は奉棄の態を生ず。
 愛養棄除。設施に當否有り。
 設施は苟くも其の當を得ざれば。則ち
 事と情と乖馳す。是の故に。
 親は相い愛し、疏は相い敬す、
 善は則ち賞し、悪は則ち懲す、
 衆と安んずることを思う者は、
 衆と利することをを行う者は、
 地の艸木を生ずる。形性千萬なり。是に於て。
 以て柱梁と爲す可し、
 以て椽桷と爲す可し、
 以て屋を葺く可し、
 以て席を織る可し、
 以て饑寒を禦ぐ可し、
 以て痛痒を医す可し、
 不齋の能なり。一の散じて相い千萬するは。
 人の才を成す亦た同じく其の中に在り。則ち
 孰れか得て之を一にせん。
 不一を以て。能く天下の用を濟す。是の故に。

一一〇〇八
一一〇〇九
一一〇一〇
一一〇一一
一一〇一二
一一〇一三
一一〇一四
一一〇一五
一一〇一六
一一〇一七
一一〇一八
一一〇一九
一一〇二〇
一一〇二一
一一〇二二
一一〇二三
一一〇二四
一一〇二五
一一〇二六

天下の道は、愛敬に盡く、
天下の樂は、安利に歸す、
學なる者は、之を知る所以の者なり、
禮なる者は、之を行ふ所以の者なり、
義なる者は、其の宜なり、
仁なる者は、其の安なり、
君なる者は、此を以て衆を御する者なり、
臣なる者は、此を以て君を輔くる者なり、
衆庶なる者は、此を以て世に處する者なり。
善惡の天よりすると。天よりせざるとを争うに非ざるなり。
苟くも此に用いずんば。則ち衆情は適せず。天下は鼎沸す。是の故に。
天下の思行は。善惡是非にして。而して之を散ずれば。則ち其の情は千萬なり。
善にして情 適す、
是にして智 感ず、
而るを奚んぞ又た或いは又た惡。或いは非なる。蓋し
思慮の念は、自他 用を反す、
是非の途は、智愚 一ならざるなり、 是を以て。
惡は自から處するに便なり、
非は自から辨ずるに可なり、

- 一一〇二七
- 一一〇二八
- 一一〇二九
- 一一〇三〇
- 一一〇三一
- 一一〇三二
- 一一〇三三
- 一一〇三四
- 一一〇三五
- 一一〇三六
- 一一〇三七
- 一一〇三八
- 一一〇三九
- 一一〇四〇
- 一一〇四一
- 一一〇四二
- 一一〇四三
- 一一〇四四
- 一一〇四五

自から便なりと雖も、而も衆情に於て適せず、

自から可なりと雖も、而も憾を衆智に於て致す、

不適を以てして自から適とす、

致憾を以てして自からはとす、

終に其の私に陥る。是の故に。

善是は則ち天下奉戴す、

惡非は則ち四海厭棄す、

夫の各性の才を運し。各智の技を異にするが若きに至りては。是れ乃ち

天下の用を濟す所にして。而して達者は好尚の一を衆に望まず。

將に保して之を持し。疏して之を通ぜんと欲するのみ。蓋し

生物の態は。美材は鮮少にして、而して散材は衆多なり、

聰明は得難くして、而して聾瞽は群を成す、故に

(編集による空白)

愚は衆く哲は孤なるは、舉世の通態なり、

自を利し他を遺るるは、彼我の通病なり、是の故に。

天下の爲に。教を立て道を設け。其の倫を正し。其の材を生ず。

自から安んじ人を利す。各好は害を爲さず。各才は交ごも用を濟す。

是の若きのみ。是の故に。

褒賞貶抑は、惟だ其れ榮利のみ、

一二〇四六 鞭笞刀鋸は 皆な其の鍼炳なり、

一二〇四七 若し之を置きて教を立て道を開かんと欲するも。

一二〇四八 高明幽玄に非ざれば。則ち愚に適し惑に應ずる者は。衆を安んずる者の用に非ず。

一二〇四九 又た彼の衆を安んぜんと欲する者は。疏通保養を知らず。

一二〇五〇 夫の人をして好尚を齎しく使めんと欲するも。人を病ましむるに過ぎず。

一二〇五一 女子の粧を爲るを見ざるか。

一二〇五二 髪は膏を以て其の黒を澤す。

一二〇五三 面は粉を以て其の白を増す。

一二〇五四 脣は臙脂以て其の紅を添う。

一二〇五五 小事を以て大事を説く可し。

一二〇五六 故に人道は其の性を戕賊して以て之が器を爲さず。是に於て

一二〇五七 稻を水に種え、

一二〇五八 禾を陸に播く、

一二〇五九 善く其の性に熟して。以て其の物を養う。是の故に

一二〇六〇 志業 自佗の安利に於て立つる者は。之を尚しと爲す。

一二〇六一 自から安んず。孰れか妨げん。佗を安んずるに至りては。則ち

一二〇六二 時有り。命有り。

一二〇六三 勢有り。才有り。此に獲ざること有り。

一二〇六四 退きて自から善とす。思いて位を出でず。

一一〇六五

謹んで其の分を守る。時に可否有り。

一一〇六六

命は如何ともす可からず。勢は争う可からず。

一一〇六七

才は天より得る有り。然れば則ち或いは能くし或いは能くせず。

一一〇六八

苟くも其の道を得れば。天に於て良民たることは則ち一なり。是の故に。

一一〇六九

是の故に。或いは天命を樂しんで而して韜晦し彼此を争わざる者有り。

一一〇七〇

或いは智を天地に融して。形骸相い忘るる者有り。是よりして下は。則ち

* 一一〇七一

紛若盡くす所に非ざるなり。今。紛若の態を以て。

一一〇七二

己に於て同じからざる者を尤む。狗の人を尤むると同じきこと無きを得んや。

一一〇七三

且つ人を以て天を觀れば。天なる者は公誠にして。而して人なる者は私偽なり。

一一〇七四

有意を離れて。善惡是非無ければ。則ち其の善惡是非は。乃ち

一一〇七五

私偽中の事なり。之を天に法れば。則ち

一一〇七六

以て其の公を成し、

一一〇七七

以て其の誠を成す。然りと雖も。

一一〇七八

天は、則ち無意して爲し、無爲して成る、

一一〇七九

人は、則ち有意して作し、有爲して成る、是を以て。

一一〇八〇

天は自から天境を有す、

一一〇八一

人は自から人境を有す、

一一〇八二

人。己に人境を開く。亦た自から人の義有り。

一一〇八三

人。己に人境を開けば。又た天地と勢を張る。

一一〇八四
一一〇八五
一一〇八六
一一〇八七
一一〇八八
一一〇八九
一一〇九〇
一一〇九一
一一〇九二
一一〇九三
一一〇九四
一一〇九五
一一〇九六
一一〇九七
一一〇九八
一一〇九九
一一一〇〇
一一一〇一
一一一〇二

事は亦た何ぞ天と一ならん。是を以て

人は其の智巧を以て。萬物に勝りて直ちに上る。是に於て

天地も亦た己の有と爲せば。則ち

人。天地を食して。天地 翻りて人中に在らん。是の故に。

天地を以て之を觀れば。虎狼の人を食うと、人の虎狼に寢處すると、

猪鹿の稼を侵すと、人の猪鹿の居を奪うと、奚んぞ擇ばん。唯だ

人は其の境を開き。天地を取りて。我の有と爲す。是に於て。

虎狼猪鹿は嫉む可し、

牛羊鶏犬は愛す可し、

若し牛羊鶏犬をして。人の意を具せば。彼の人を觀ること。

豈に人の虎狼猪鹿に於るより異なりと謂わんや。是の故に。

慣れたる所に執し。習いたる所に黨す。

未だ達と謂う可からざるなり。是を以て。

人の。人の境を開くや。本氣に於て乏しきを以て。

用水火土木に資る。水火土木にして。而して足らず。

之を鳥獸魚鼈に資る。

天は公を以て、而して之を惡むに意無く、之を愛すに意無し、

人は私を以て、而して之を愛すに意有り、之を惡むに意有り、

人は己を私するに塞がる。故に

一二一〇三

我が好む所を潔とす、

一二一〇四

我が厭う所を穢とす、

一二一〇五

物の慘に怒る

一二一〇六

人の慘に恕す

一二一〇七

己の境よりして然り。また。勢なり。

一二一〇八

故に人は人境を開き。萬物を取りて。以て己の有と爲し。

一二一〇九

物を殺して用を通ぜざること能わず。

一二一一〇

故に殺害の中に。義を建て道を論ず。

* 一二一一一

人の事なり。天に非ざるなり。豈に翊裁の一事然らんかな。之を推して貴と爲す。

一二一一二

蓋し人を以て天を知る。反せざれば則ち得ず、

一二一一三 一二一一四

人を以て人を知る。推せざれば則ち得ず。反比の分なり。

一二一一五 一二一六

苟くも思い此に至らざれば。將に天に罔くして。而して人の義に誤らんとす。

一二一一七

人事に切ならざるを以て。人事の急と爲す。

一二一一八

噫。人にして人に切なるは。彝倫を外にして何ぞ。

一二一一九

明は進照に巧にして。反照に拙なり、

一二一二〇

情は自から恕するに便にして。人を律するに刻なり。故に

一二一二一

辱は背に燭し。禍は睫に巢くう、

一二一二二

始に感じ本を思うは。人の本心なり。蓋し

一二一二三

人の萬物を驅りて。以て之を役使するは。

一二二二四 智技の巧の勝れるを以てなり。蓋し智巧の物に勝るは。

一二二二五 思辨の運。睿明を抱く有るを以てなり。

一二二二六 思は鬼神を行す、而して情は適否を抱く、

一二二二七 事は綱縊を運す、而して辨は當否を有す、夫れ

一二二二八 物は。始を有せざる靡し。

一二二二九 本を有せざる靡し。

一二二三〇 已に思辨の明有りて。愛敬を酬酢に運すれば。則ち

一二三三一 靄然として以て其の始に感じ、其の本を思う。是れ乃ち人心なり。

一二三三二 天神に祇肅す、

一二三三三 君父に眷恋す、

一二三三四 幽明を隔てず。以て奉事して肯畔せざる所以の者なり。惟だ

一二三三五 利害の心。安危の慮。得るを務め失うを憂う。

一二三三六 順忤激縦。終に之に畔く有り。

一二三三七 明に反するを幽と曰う、

一二三三八 生に反するを死と曰う、

一二三三九 人に非ざるに天と稱す、

一二三四〇 生に非ざるに鬼と稱す、

一二四〇一 古えよりの定言なり。

一二四〇二 人に反して其の天を知る可ければ、則ち

一一二四三
一一二四四
一一二四五
一一二四六
一一二四七
一一二四八
一一二四九
一一二五〇
一一二五一
一一二五二
一一二五三
一一二五四
一一二五五
一一二五六
一一二五七
一一二五八
一一二五九
一一二六〇
一一二六一

明に反して其の鬼を窺う可し、蓋し
一大地球は。舟楫の探る所なり。
大壤は二つにして。小壤は數を知らず。
其の國を爲すや亦た衆し。
其の萬國を歴視するに。智技の巧は同じからずと雖も。
神道を設けざる者無ければ。則ち始に感じ本を思ふ。
靄然の情。同じき者観る可きなり。
而して其の所謂神なる者は。
或いは神なり。
或いは天なり。
或いは鬼なり。
或いは妖なり。
惑者は惑に由りて之を有す。
達者は達に由りて之を有す。是の故に。
人の死生は。一氣の通なり。
結ばれば則ち隔つ
と解くれば則ち融す
天地と生化すれば。痕の著る可き無し。
天は誠を成す、

一一二六二
一一二六三
一一二六四
一一二六五
一一二六六
一一二六七
一一二六八
一一二六九
一一二七〇
一一二七一
一一二七二
一一二七三
一一二七四
一一二七五
一一二七六
一一二七七
一一二七八
一一二七九
一一二八〇

神は妙を爲す、
誠妙は意を用いず。能く爲し能く成る。
彼は眷念を用いずと雖も、
彼は之を徳とすること有らずと雖も、
君父に愛敬す、
鬼神に祭奠す、
其の事は一なり。是の故に。
人は感じて思う有らば。則ち將に報いて謝せんとす。是に於て。
死生の間は。蘋蘩鐘鼓。車馬玉帛。
貧苦も材を棄て、
患難に身を獻ず、
如し之に反すれば。則ち呪咀毒殺す。
皆な此に外ならざるなり。是の故に。
人は苟くも始を感じ本を思う者を亡わば。則ち
何れの處としてか 父に事え君に奉ぜん、
何れに適くとしてか 天を尊び神を敬せん、
天は我を覆い、日は我を煦む、
地は我を載せ、水は我に液す、
外にして山川雨露なり、

- 一一二八一
- 一一二八二
- 一一二八三
- 一一二八四
- 一一二八五
- 一一二八六
- 一一二八七
- 一一二八八
- 一一二八九
- 一一二九〇
- 一一二九一
- 一一二九二
- 一一二九三
- 一一二九四
- 一一二九五
- 一一二九六
- 一一二九七
- 一一二九八
- 一一二九九

内にして功業恩徳なり、

奚んぞ我れ従いて奉ぜざるを得ん。是の故に。

神道の設、

人道の義 厚し。至れり。

人にして始に感じ本に思ふ者を亡わば。奚れを以てか人と爲さん。

明の孤にして愚の衆きは。天下の通態なり。

夫の積もる者 誠に發し。

禍福の感應に動くを觀て。其の酬醋の態に駭き。

財を棄て身を賤いて。媚を求め流を致す。

衆愚は此に癩して。殆ど医す可からず。

誠を積めば則ち冥加照然たり、

意無ければ則ち吉凶參差なり、

瞽にして之を視る、

聾にして之を聽く、

宜なる哉。其の朦朧。是の故に。

我は則ち其の祀を過ぎて其の公誠を欽ず。

奚んぞ意技の巧拙を將つて。

衆人と鬪うことを爲さんや。

禍を惡み辱を羞づるは、人の良智なり、

一一二二〇〇
一一二二〇一
一一二二〇二
一一二二〇三
一一二二〇四
一一二二〇五
一一二二〇六
一一二二〇七
一一二二〇八
一一二二〇九
一一二二一〇
一一二二一一
一一二二一二
一一二二一三
一一二二一四
一一二二一五
一一二二一六
一一二二一七
一一二二一八

不ふ忍にんと之これを敢あえてすると。惟ただ義ぎ之これ察さつす。故ゆえに
規き矩くを失しつせざれば、則すなわち其その履りは正ただし、
榮えい利りを慕したわざれば、則すなわち其その操そうは高たかし、
乞こつより賤いやしきは莫なく、偷とうより辱じよくなるは莫なし、
奪だつより暴ぼうなるは莫なく、殺さつより惨さんなるは莫なし、
四し莫ぼくの醜しゆうは。時とき有ありて之これを敢あえてす。惟ただ
已やむことを得えざるに出いづ。故ゆえに
志しは操そうを以もつてして立たつ、
行こうは勢せいを以もつてして定さだむ、
操そうは剛ごう毅ぎに成なる、
行こうは時じ勢せいに權けんす、蓋けだし
衆しゆう情じようは。愛あいする所ところに溺おぼる、
好こうする所ところに淫いんす、
敬けいする所ところに憚はばか、
逸いつする所ところに怠おこたる、
利りを見みて争あらそう、
害がいを見みて遯のがる、
智ちは此こに蒙くらきこと有あれば。則すなわち
交まじわるに當あたりて人ひとを尤とがめ

一一二二一九
一一二二二〇
一一二二二一
一一二二二二
一一二二二三
一一二二二四
一一二二二五
一一二二二六
一一二二二七
一一二二二八
一一二二二九
一一二二三〇
一一二二三一
一一二二三二
一一二二三三
一一二二三四
一一二二三五
一一二二三六
一一二二三七

御するに當りて自から蹟く。
鬼神の出没は。惟だ是れ感應なり。
之を揮すれば絃誦に上る、
之を驅れば水火に趨る 鼓舞の妙なり。
火は焚け水は流る、
鳥は飛び魚は潜む
天地は容れざる所無し。而して其の序を亂す所無し。故に
道を險隘に立つれば。觀る可きが如くと雖も。濟衆に病ましむ。故に
君師は各好尚を以て衆を率いること母し。終に大同を害す。
天地は物を生じて。用を此に資る。
無益を爲して、
有益を害すれば、
造化の徳に背く。故に
其の善惡は、則ち天地の善惡なり、
其の是非は、則ち天地の是非なり、故に
其の道を開く、
其の黨を結ぶ、
其の徒を率ゆ、
其の業を飼す、

一二三三八
 一二三三九
 一二三四〇
 一二三四一
 一二三四二
 一二三四三
 一二三四四
 一二三四五
 一二三四六
 一二三四七
 一二三四八
 一二三四九
 一二三五〇
 一二三五一
 一二三五二
 一二三五三
 一二三五四
 一二三五五
 一二三五六

大人は。保して與らず。是の故に。

君臣は。天に順い誠を奉じ。仁に居り命に由る。

人と物と。同じく喜怒愛憎の情を抱きて。而して

物。戒令教訓無くして立ち。

人。戒令教訓を待ちて治まるは何ぞや。蓋し

思辨の巧。鼓舞の妙。物は之を有せず。

人は惟だ之を有する。人は惟だ之を有するを以て。能く離合の勢を挾む。

已に離合の勢を挾む。合せざれば則ち壞亂至る。故に

君子は。世の爲に憂えざる能わず。

不肖の爲に教えざること能わず。

人境は一たび開けば。上は一を奉じて。而して其の平を掌る

下は一を御して。而して其の役を執る

勢の至る所なり。勢は則ち至る。而して

人の智解意匠は。則ち一ならず。

一ならずれば則ち世の爲に憂え。不肖の爲に教うるは。則ち

一なりと雖も。其の設は或いは趣きを異にす。

是れ亦た事の態なり。勢の至る所なり。蓋し人の群を爲すや。

喜怒愛憎を抱きて。離合の勢を挾めば。則ち勢は。

上は一を奉じて。而して其の平を掌り

一二二五七
一二二五八
一二二五九
一二二六〇
一二二六一
一二二六二
一二二六三
一二二六四
一二二六五
一二二六六
一二二六七
一二二六八
一二二六九
一二二七〇
一二二七一
一二二七二
一二二七三
一二二七四
一二二七五

下は一を御して、而して其の役を執ら使めざるを得ず。
若し剖して散ずるや。千萬盡さず。故に其の憂えて人を教うるは。
一君一臣。以て教え以て賞で、
以て戒め以て殺す。
若し其の事を悉せば。孰れか能く其の終を極めん。是の故に。
其の上なる者は、赤子に父母たり、
其の下なる者は、身首に手足たり、
已に身首の爲に、手足と爲る、
口の食う所、目の視る所、痛痒饑寒、百役執らざる所莫し、而して
亦た其の命を祇まざる所莫し、
已に衆人の爲に、父母と爲る、
兒の生養す可き所の者、防禦す可き所の者は
吉凶驩虞、百事慮らざる所莫し、而して
亦た其の事を敬わざる所莫し、故に。
下なる者は上を養いて、而して我が平を此に掌る
上なる者は下を御して、而して其の養を此に恃む、是に於て。
其の君なる者は、位上に尊し
臣なる者は、位下に卑し、而して
尊卑の道は。人人之を知る。人人已に之を知ると雖も。

一二二七六 其の天人の分に於て。世に稱せられて識者と稱する者も。猶お其の分に罔し。

一二二七七 其の分は如何。蓋し

一二二七八 人境は、自ら尊卑に用有り、上は尊く下は卑し、

一二二七九 天境は、本と尊卑に意無し、交も其の役に執る

一二二八〇―八一 苟くも愚にして、思い天境に及ばざれば、

一二二八一 自から君位に傲り、凌虐、暴掠、終に其の尊を失す、

一二二八二 罔くして義、人境に明ならざれば、

一二二八三 下職を供せず、怨望、悖逆、禍、子孫に延ぶ、是の故に。

一二二八四 君は民を安ずるを以て職と爲す、

一二二八五 臣は君を奉ずるを以て義と爲す、而して

一二二八六 四民は君の職を相けて、而して其の蔭に息する者なり。故に

一二二八七 君は能く其の柄を執る、

一二二八八 師は能く其の義を用う、

一二二八九 苟くも君、其の柄を捨て、

一二二九〇 師、其の義を亂せば、

一二二九一 毒、無窮に流る。此の故に。

一二二九二 智、未だ天に通ぜず、

一二二九三 行、未だ人に適せず、

一二二九四 規規として法度を執りて相い闘ぐ。

一二二九五

達者と稱するに足らざるなり。蓋し

一二二九六

生れて或いは上と爲り、或いは下と爲るは、各おの分有るなり、

一二二九七

或いは事に任じ、或いは閑に處すは、各おの地有るなり、

一二二九八

何ぞ擾擾として其の守を廢せんや。

一二二九九

敢えて其の守を廢するに非ず。惟だ人を善に誘う者は、已む可からず。

一二三〇〇

彼の世の爲に憂え。不肖の爲に教える者は、將に他と此の樂を樂しまんとす。

一二三〇一

食有れば之を推す、

一二三〇二

衣有れば之を解く、

一二三〇三

豈に此の樂有りて。而して人と偕にせざる可けんや。

一二三〇四

古より仁者の心は同じく然り。然りと雖も、誘善の意は、已む可からずして。

一二三〇五

而も事の態。勢の至る所。軌を同じくして騁すること能わず。

一二三〇六

道は口舌に上りて。聚訟騒然。終に敵讎と爲る。蓋し

一二三〇七

人の將に眞を証せんとするや。必ず天を引きて証と爲す。然り而して

一二三〇八

天人の道は反す。反を以て類を証す。

一二三〇九

其の一中に居る者異ならずと雖も。而も類を反する者。

一二三一〇

豈に誤らざるを得んや。蓋し

一二三一

人の人を知る、其の術は推拡を貴ぶ、而して其の反を捨てず、

一二三一二

人の天を知る、其の術は反觀を貴ぶ、而して其の比を捨てず、

一二三二三

而るを若く爲さず。惟だ推拡のみ之れ務め。

一一三二四
一一三二五
一一三二六
一一三二七
一一三二八
一一三二九
一一三三〇
一一三三一
一一三三二
一一三三三
一一三三四
一一三三五
一一三三六
一一三三七
一一三三八
一一三三九
一一三三〇
一一三三一
一一三三二

終つひに自おのずから以もつて天てんを極きわめ地ちを悉つくし。幽ゆうに入りい玄げんを鈎こうす。

然しかれども天てん地ちは洪こう蕩とうたり。其その向むかう者ものは向むかうに任まかす、

其その背そむく者ものは背そむくに從したがう

我われ此これを容いるるに憚はばらずと雖いえども。

若もし之これを天てんに順じゆんじ人ひとに應おうずと言いわば。則すなわち未いまだなり。

今いまの學がくを習ならう者ものは。其その主しゆに從したがいて。其その門もんを守まもる。

彼かの主しゆに從したがいて。彼かの門もんを守まもる者ものと。

各おのおの其その徒とを率ひきい。相あい共ともに巷ちまたに争あらそう。

傍ぼろ觀かんする者ものをして。終つひに歸きする所ところを知らざらしむ。

噫ああ 人ひとは。七しち尺しゃくの身み、

百ひゃく年ねんの生せい 眇びょうとして斯この世よに立たつ。

其その日にち月げつの逾ゆ邁まいを傷そこな、江かう山さんの依い稀きを感かんず、生せいを惜おしむの情じやうなり、

往おりり其その化かの窮きわまる所ところを思おもう

終つひに其その神しんの託たくする所ところを索もとむ

生せいを持じするの疑ぎなり、

之これを經けいに推おす者ものは此かくの如ごとし、

之これを緯いに推おすも亦またた又また此かくの如ごとし、

其その情じやう疑ぎを執しゆして。自おのずから智ち解かいを生しやうず。

其その心こころの安やすんずる所ところを獲とて。之これを天てん地ちに拡ひろぐ。

一一三三三三

一一三三三四

一一三三三五

一一三三三六

一一三三三七

其の師とする所の者は心。人を持して天を索む。

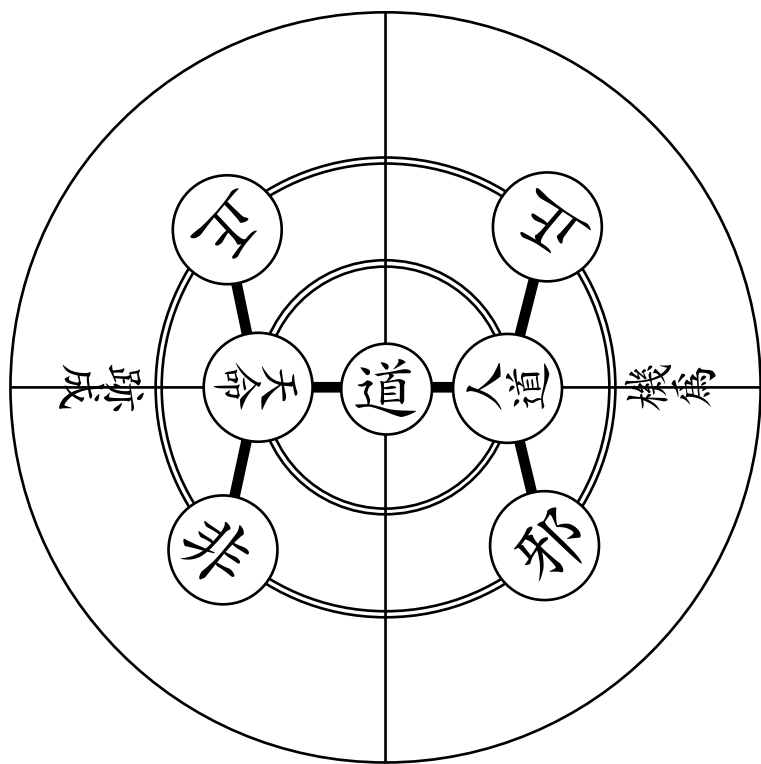
天は逾いよ遠し。因循薰蒸。往きて復らず。

苟くも膠固執泥に非ざれば。則ち此を餉する者。此に感ずるなり。

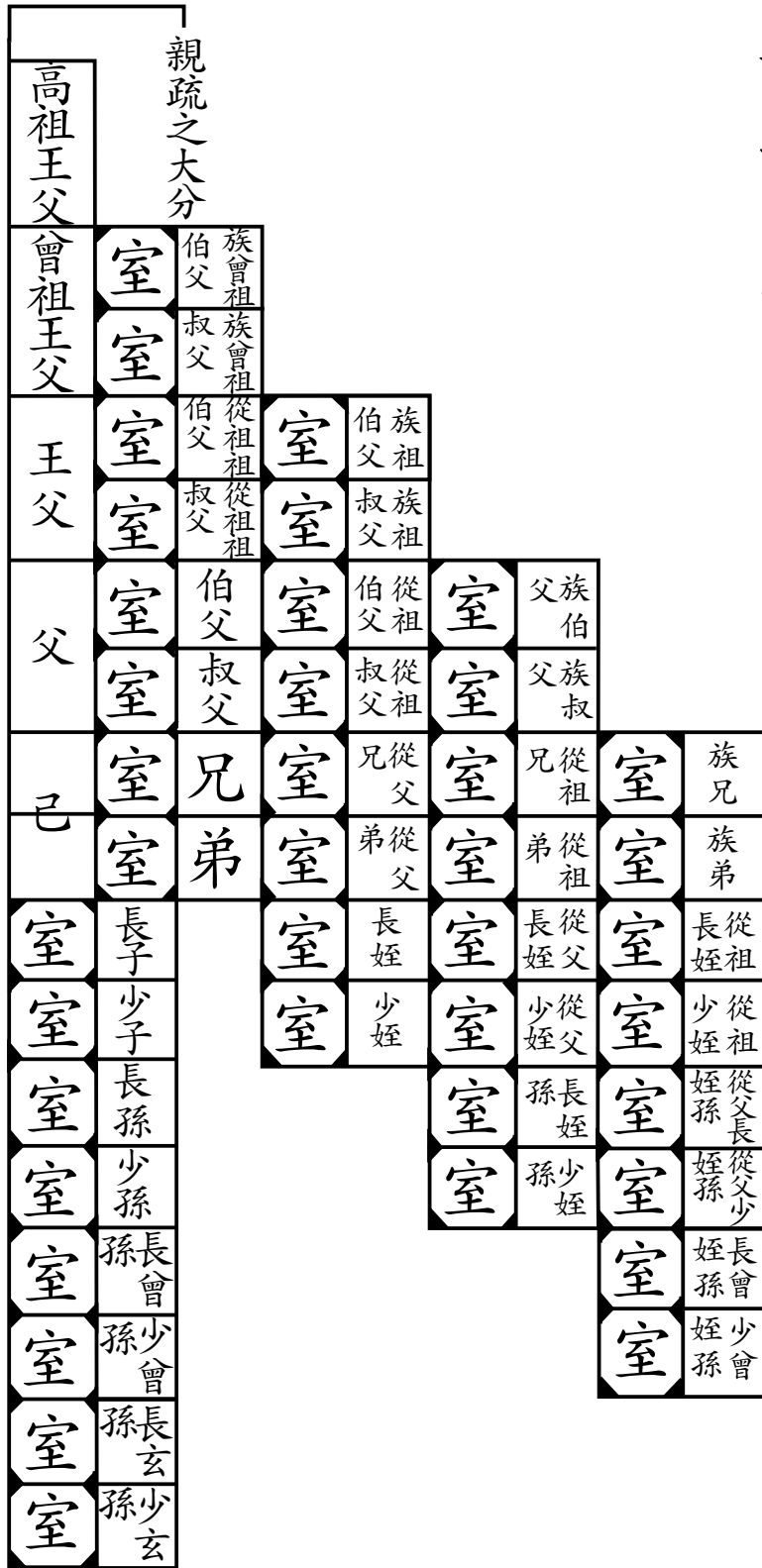
道を人に盡す

命を天に待つ

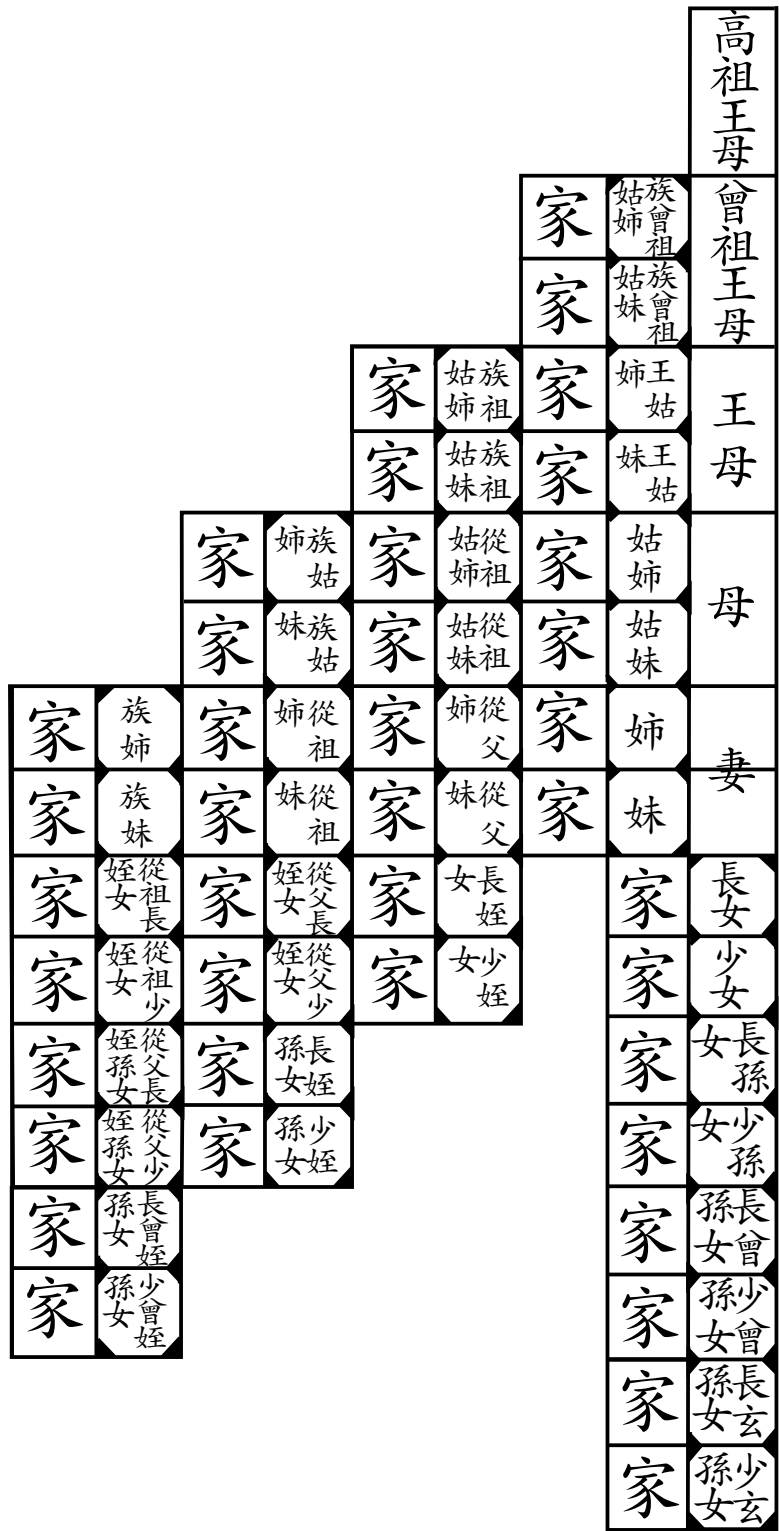
人道天命圖



親疏尊卑圖



尊卑之大分



天命

一二三四三 天より之を言えは、則ち爲す者は氣なり、成る者は天なり、

一二三四四 人より之を言えは、則ち致す者は我なり、至る者は彼なり、

一二三四五 我なる者は、善惡を機す、

一二三四六 彼なる者は、吉凶を事す、

一二三四七 我なる者は、之を如何ともす可きなり、

一二三四八 彼なる者は、之を如何ともす可からざるなり、

一二三四九 之を如何ともす可きは則ち人、

一二三五〇 之を如何ともす可からざるは則ち天、人中の天人なり。

一二三五一 死生通塞なる者は、天よりす、

一二三五二 殺活予奪なる者は、人よりす、

一二三五三 天よりする者は、氣は爲し天は成る、

一二三五四 人よりする者は、我は致し彼は至る、

一二三五五 爲成致至。來りて當る者は時なり、

一二三五六 處して遇う者は地なり、

一二三五七 來當するよりして之を觀れば、則ち天に非ざる者無し、

一二三五八 處遇するよりして之を觀れば、則ち命に非ざる者無し、故に

一二三五九 天は其の時に當れば、夏す、冬す、古す、今す、

一三三六〇
一三三六一
一三三六二
一三三六三
一三三六四
一三三六五
一三三六六
一三三六七
一三三六八
一三三六九
一三三七〇
一三三七一
一三三七二
一三三七三
一三三七四
一三三七五
一三三七六
一三三七七

物は其の時に遇えば、榮す、枯す、生す、化す、故に

時は來りて當る、

人は往きて當る、

彼は來りて當る、

我は往きて遇う、

當るよりして天と曰う、

遇うよりして命と曰う、

統べて之を言え、則ち人も亦た天なり、天も亦た氣なり、

分ちて之を言え、則ち天は天神を分ち、人は彼我を分ち、

之を天と謂うは、有意を以て、無意に任ずればなり、

之を命と謂うは、有作を以て、有爲を受くればなり、

惟だ能く其の無意を知る、是を以て之を天に委す、

惟だ能く其の成を知る、是を以て其の地に安んず、

有意よりして遇と謂う、

受よりして命と謂う、

惟だ能く其の有意を知る、故に其の同を己に求めず、

惟だ能く其の受を知る、是を以て其の外に詭遇せず、

已往は諫す可からず、

一三三七八

來る者は猶お追う可し、

一三三七九

當る者に安んず、

一三三八〇

遇う者に慎しむ、

一三三八一

故に天人は。氣を同すれば、則ち爲 同なり、

一三三八二

意を反すれば、則ち態 異なり、是に於て

一三三八三

爲作は分る。是を以て。來る者は當る、

一三三八四

往く者は遇う、則ち

一三三八五

爲成致至は。參差として錯綜す。市人の相い面するが如きや然り。

一三三八六

來るや、機に發す、

一三三八七

往くや、跡に成る、

一三三八八

機なる者は、會なる可し、

一三三八九

易なる可し、

一三三九〇

天なる可し、

一三三九一

地なる可し、

一三三九二

修む可し、

一三三九三

荒む可し、

一三三九四

活す可し、

一三三九五

殺す可し、

一三三九六
一三三九七
一三三九八
一三三九九

由りて來る所を知らず、
觸れて變ずる所を測らず、
跡なる者は、
會なり、
易なり、

一二四〇〇
一二四〇一

天なり、
地なり、
修なり、
荒なり、

一二四〇二
一二四〇三
一二四〇四

殺なり、
活なり、

一二四〇五
一二四〇六

變ずる所に成る、
觸るる所を拵わず、

一二四〇七
一二四〇八
一二四〇九

機は其れ射か。意は未だ觸れざれば。則ち殺活相い忘る。
觸るれば則ち殺活の跡を成す。是の故に。
機。觸るれば則ち跡有り。跡有れば。則ち窺う可し。是を以て

一二四一〇
一二四一一
一二四一二

機觸れ跡成りて。對待。分る。
對待既に分るれば。柔は剛に非ず。剛は柔に非ず。惟だ其の一なり。
天を轉じて已まず、

一二四一四

地ちを持じして息やまず、

一二四一五

目めの明めいを蔽おほわず、

一二四一六

耳みみの聡そうを隔へだてず、

一二四一七

寒暑かんしよは相あい通つうず、

一二四一八

升降しょうこうは碍さまたげず、

一二四一九

剛ごうならず柔じゆうならず。剛柔ごうじゆうならざるに非あらず。

一二四二〇

或あるひと曰いわく。火ひは無むより生しょうじて有あり。

一二四二一

有うよりして無むに歸きす。斯かくの若ごときは如いかん何んと。

一二四二二

曰いわく。無むなれば則すなわち火あに非あらず、有うなれば則すなわち無むに非あらず、

一二四二三

燃もゆれば則すなわち暗あんに非あらず、滅めつすれば則すなわち明めいに非あらず、

一二四二四

跡せきは則すなわち二になり、

一二四二五

跡せきを爲なす者ものは二にに非あらず、

一二四二六

是この故ゆえに。來きたれば則すなわち當あたらざる靡なし、

一二四二七

往ゆけば則すなわち遇あわざる靡なし、

一二四二八

吉きちに遇あうを福ふくと曰いう、

一二四二九

凶きように遇あうを禍かと曰いう、

一二四三〇

吉きちに遇あわざれば則すなわち凶きように遇あう、

一二四三一

凶きように遇あわざれば則すなわち吉きちに遇あう、

一二四三二

勢は平を持し難く。力は兩全たること難し。

一二四三三

勢力は同じからず。而して時機の變は預し難し。

一二四三四

弧矢を以て之を喩えるに。

一二四三五

弧矢は。物なり。

一二四三六

弛張は。事なり。

一二四三七

弛張せざることを得ざる者は。勢なり。

一二四三八

弛張に勝る者は。力なり。

一二四三九

以て弛張す可く。以て弛張す可からざる者は。時なり。

一二四四〇

以て弛張す可く。以て弛張せざる可き者は。機なり。是の故に。

一二四四一

機の触るるに由りて時なる者は。哲者も之を預すること能わず。是れ

一二四四二

時變の無窮なる所以なり。事の勢に隨いて赴く者は。庸人も必ず察す。

一二四四三

是れ以て事理の二無き所なり。

一二四四四

時機は知る可からず。事勢は如何ともす可からず。故に

一二四四五

時を權りて動き。機を見て作る者は。其の身を辱しめず。

一二四四六

勢に隨いて上下し。事に臨みて揣摩する者は。將に其の身を辱しめんとす。

一二四四七

故に哲者は。機を慎しみ。有力の者は機を回らす。

一二四四八

是の故に。姦邪暴虐は。衆を擧げて目を反すれども、而も之をして窮せ使むること能わず、

一二四四九

溫厚慈愛は。世を擧げて目を注すれども、而も之をして達せ使むること能わず、

- 一一四五〇
- 一一四五一
- 一一四五二
- 一一四五三
- 一一四五四
- 一一四五五
- 一一四五六
- 一一四五七
- 一一四五八
- 一一四五九
- 一一四六〇
- 一一四六一
- 一一四六二
- 一一四六三
- 一一四六四
- 一一四六五
- 一一四六六
- 一一四六七

苦節は人^{ひと}以て^{もつ}之^{これ}を愛^{あい}し、衛生は自^{おの}から以て^{もつ}之^{これ}を護^ごすれども、而^{しか}も之^{これ}をして壽^{じゆ}なら使^しむること能^{あた}わず、悖^{ぼつ}徳^{とく}は世^よ以て^{もつ}之^{これ}を厭^{いと}い、縦^{じゆう}慾^{よく}は自^{おの}から以て^{もつ}之^{これ}を棄^すつれども、而^{しか}も之^{これ}をして天^{てん}なら使^しむること能^{あた}わず、故^{ゆえ}に。其^その事^じに意^い無^なくして、而^{しか}して能^よく其^その事^じを爲^いす者^{もの}は、氣^きなり、其^その事^じに意^い無^なくして、而^{しか}して其^その事^じを成^{せい}す者^{もの}は、天^{てん}なり。

愛^{あい}せば則^{すなわ}ち之^{これ}を奉^{ほう}ず、
惡^{にく}めば則^{すなわ}ち之^{これ}を棄^すつ、

思^し惟^い謀^{ぼう}慮^{りよ}して。以^{もつ}て殺^{さつ}活^{かつ}予^よ奪^{だつ}を爲^なす者^{もの}は。乃^{すなわ}ち人^{ひと}なり。然^{しか}り而^{しこ}うして殺^{さつ}活^{かつ}予^よ奪^{だつ}の。

我^{われ}よりする者^{もの}は、養^{やしな}う可^べきなり、慎^{つつ}しむ可^べきなり、故^{ゆえ}に之^{これ}を修^{おさ}む

彼^{かれ}よりする者^{もの}は、養^{やしな}い難^{がた}し、慎^{つつ}しみ難^{がた}し、故^{ゆえ}に之^{これ}を俟^まつ

是^こを以^{もつ}て。修^{しゆう}荒^{かう}は天^{てん}に在^あらず、志^し行^{こう}を以^{もつ}て之^{これ}を言^いう、

禍^か福^{ふく}は己^{おのれ}に在^あらず、天^{てん}命^{めい}を以^{もつ}て之^{これ}を言^いう、

機^きは触^ふれ勢^{せい}は走^{はし}る、

力^{りき}は持^じし跡^{せき}は成^なる、故^{ゆえ}に。

触^ふる者^{もの}は測^{はか}る可^べからず、

走^{はし}る者^{もの}は回^{めぐ}らす可^べからず、

持^じする者^{もの}は争^{あそ}う可^べからず、

定^{さだ}まる者^{もの}は變^{かわ}る可^べからず。

譬^{たと}えば暗^{あん}に棊^き子^しを取^とりて以^{もつ}て之^{これ}を擲^{なげ}つが如^{ごと}し。

一二四六八
一二四六九
一二四七〇
一二四七一
一二四七二
一二四七三
一二四七四
一二四七五
一二四七六
一二四七七
一二四七八
一二四七九
一二四八〇
一二四八一
一二四八二
一二四八三
一二四八四
一二四八五

奇偶參差し。我の欲する所に或いは會い或いは否す。

奇偶ならざるを得ざる者は、勢なり、

之を奇偶にする者は、力なり、

奇を發し偶を發する者は、機なり。奇偶は成りて拵わず。

跡 已に定まる。然り而して奇を欲し偶を欲する者は、人の私なり。

奇偶は己の欲するが爲にして來るに非ず、

己の欲する所に違いて來らざるに非ず、

其の然る者は。己の求むる所の者と。會う有り。違う有り。是れ

時の避く可からず。命の遁るる可からざる所以なり。惟だ

天を以て徒然と爲す、故に

無意を侮り、誠を信ぜず、其の蔽や放なり、

惟だ神を觀て有意と爲す、故に

鬼神に於て役せられ、因果に陥る

之を數に問い、之を前定に委ぬ、其の蔽や愚なり、

善惡の歸する有る者は、誠なり、

治亂の定まらざる者は、勢なり、

我は有意の爲を以て、

無意の成を觀る

一二四八六

成は意の期する所に會すれば、則ち順を爲す、

一二四八七

意の期する所に會せざれば、則ち逆を爲す、此の故に。

一二四八八

遇の順逆は、無意に成る、

一二四八九

有意に分る

一二四九〇

世 或いは意う。命なる者は。天の賦する所にして。

一二四九一

人人生前預じめ定まる。人は各おの之を負荷して行き。

一二四九二

天なる者は。穆然として上に居り。以て命を物に於て賦し。

一二四九三

又た能く臧否を察して。賞罰を降すと。

一二四九四

是に於て。水火兵歳の人に災いするに。

一二四九五

千萬人を兼ねて一時に竭する者を見て。之に惑う。

一二四九六

譬えば茲に二臣有らんに。

一二四九七

同じく君命を危難の際に奉じ。將に東西に使いせんとす。而して

一二四九八

舟を港口に繋ぎて。風を待たんに。

一二四九九

時。方に西風起り。東舟乃ち發せん。

一二五〇〇

二臣。各齋しく忠を懐い。各齋しく急を憂う。然り而して

一二五〇一

東使は忠懷以て伸び。功名 以て遂ぐ。

一二五〇二

西使は忠懷伸びず。功名遂げず。

一二五〇三

風は豈に意有らんや。風に遇う者に意有るのみ。

一二五〇四

縦使東使以て天 己を獲ると爲し。

一二五〇五

西使以て天 己を棄つと爲すも。亦た有意の窺齷のみ。

一二五〇六

其の成る者、己の欲する所に會えば、則ち我に順うなり、

一二五〇七

己の欲する所に違えば、則ち我に逆うなり、

一二五〇八

天は果たして預じめ命を定むるか、

一二五〇九

何ぞ西使を惡み、何ぞ東使を愛するか、

一二五一〇

至る者は、命の正なり、豈に多寡の事ならんや、

一二五一〇

水の漲ぎるを視て渉る、

一二五一二

火の熾なるを視て踏む、

一二五一三

寇を招きて致す、

一二五一四

耕さずして餒す、

一二五一五

致す者は、命の非なり、豈に多寡の事ならんや、

一二五一六

下なる者は、命を上を受く。

一二五一七

士は顛沛の厄に死す、

一二五一八

民は饑荒の歳に餓す、

一二五一九

我は之を如何ともす可からず。

一二五二〇

上なる者は、命を下に制す。

一二五二一

其の將牧たる者は、失策を悔いず。倉を發くことを知らず。

一二五二二
一二五二三
一二五二四
一二五二五
一二五二六
一二五二七
一二五二八
一二五二九
一二五三〇
一二五三一
一二五三二
一二五三三
一二五三四
一二五三五
一二五三六
一二五三七
一二五三八
一二五三九

手を之を如何ともす可きに拱す。故に

天なる者は、下を觀監して、賞罰を降す者に非ず、惟だ誠の擲う可からざる有り、

命なる者は、生前預じめ之を各各に賦するに非ず、惟だ當遇の事を定むるのみ、

天人を以て之を分てば、則ち爲成なる者は、天なり、

致至なる者は、人なり、

我より之を言えば、至る者も亦た成る者なり、惟だ

致す者にして我の爲す者なり、

孝悌の父兄に親しまれ、忠信の君上に信ぜられ、

自から修むれば人は従い、徳を施せば福の隨うは、

是れ遇の順、事の當然にして、有意の愉とする所の者なり、

孝悌の父兄に親しまれず、忠信の君上に信ぜられず、

自から修めて人に悖られ、徳を施して禍を結ぶは、
是れ遇の逆、事の不當然にして、有意の不平とする者なり、是の故に。

意を以て之を分てば、則ち順逆有り、

道を以て之を修むれば、則ち正非有り、

爲す者は己れよりす、

成る者は我に在らず、故に。

爲す者を盡くして、遇う者の順逆を問わず、惟だ命有りと曰う、

一二五四〇

己を修めて遇う所に於て安んず、惟だ命を俟つと曰う、蓋し。

一二五四一

君子の命に於る、俟ちて謀らず、正しく之に當る、

一二五四二

小人の命に於る、謀りて俟たず、詭りて之に遇う、故に惟だ

一二五四三

君子にして、以て天と曰い命と曰う可し、

一二五四四

小人にして、未だ以て天と曰い命と曰う可からず、正非の分なり。

一二五四五

君子は、正履の外に於て冀遇せず、

一二五四六

小人は、幸を詭遇の中に於て謀る、蓋し

一二五四七

農の田に於る。種植すること時に後れず、

一二五四八

耕耘すること力を省かず、

一二五四九

當に稼の多きに遇うべし、

一二五五〇

然れども其の多寡は猶お自から必とす可からず、

一二五五一

若し獲の寡きを惡んで、而して種植を時にせず、耕耘に力せずんば、

一二五五二

縦い之を獲る有りと、幸なり、故に

一二五五三

穡の寡きを以て、稼の務めを改めず、之を良農と爲す、
(而を欠くか。)

一二五五四

稼の事に倦んで、而して穡の多きを望む、之を惰農と爲す、是を以て。
(I 511a)

一二五五五

命なる者は俟つ可し、

一二五五六

謀る可からざるなり、

一二五五七

俟つとは、從容として之に當るの謂にして、而して期するの謂に非ず、

- 一二五五八
- 一二五五九
- 一二五六〇
- 一二五六一
- 一二五六二
- 一二五六三
- 一二五六四
- 一二五六五
- 一二五六六
- 一二五六七
- 一二五六八
- 一二五六九
- 一二五七〇
- 一二五七一
- 一二五七二
- 一二五七三
- 一二五七四
- 一二五七五

忠信孝悌なる者は、天の則なり、我れ從いて之を履む、

親疏信否なる者は、人の機なり、我れ正しく之に當る、

謀なる者は、冀遇して之を求めると謂にして、而して慮の謂に非ず、

親信を阿順に迎へ、忌諱を足恭に避く、

履む可きを履まず、而して幸を外よりする者に、冀う、

足恭阿順の時に遇うや。必ず忠信孝悌の世に容れられざるを笑わん。

世に容れられざる者は、命なり、

時に遇する者は、幸なり、

詭遇の遇、君子は迎えず、

正履の厄、丈夫は寧んぞ之を避けんや、是れ

以て其の俟ちて謀らざる所なり。謀れば則ち俟たず。

俟たざれば則ち詭遇す。詭遇すれば則ち至らざる所莫し。故に

爲す者は己に在りて、而して之を如何ともす可き者なり、故に

遇を正非に於て分つ、而して之を如何ともす可からざる者なり、故に

成る者は我に在らずして、

遇の順逆に従う、譬えば此に二人有らんに、

其の一人は、飯を餐して死す、
其の一人は、酖を飲んで死なず、

一二五七六
一二五七七
一二五七八
一二五七九
一二五八〇
一二五八一
一二五八二
一二五八三
一二五八四
一二五八五
一二五八六
一二五八七
一二五八八
一二五八九
一二五九〇
一二五九一
一二五九二
一二五九三

人は親しく之を見ると雖も。何ぞ飯之を捨てん、酖之を飲まん、故に

之を、之を如何ともす可からざる者に於て問わず。故に

寧ろ正を得て斃るとも。而も不正を以てして存するを希わず。

貧賤は常に憤憤たり、

富貴は猶お怏怏たり、

纔に弘戻する所有れば。則ち色を起して曰く。善に利無し。命は言うに足らず。

天は報い無し。惡を縦まにす可きと。是れ乃ち

正に天と市とを爲すを欲するなり。

出處の操守を忘れ、

取捨の爭奪を致し、

禍の伏す所を知らず、

辱の從う所を顧みず、

頑然として動き、

敖然として畏ること無きは、是れ乃ち天を以て既に休すと爲すなり。

君子は豈に富貴を惡み、而して貧賤に就く、

安佚を厭いて、而して艱難に從う者ならんや、

則を履みて正しく立てば。來る者は之に當る、
去る者は追わず、

一二五九四 身を失する者は、好んで危の地に立つ、
一二五九五 義を失する者は、好んで利の所在に就く、
一二五九六 好んで危の地に立つ者は、之を如何ともす可き者に於て、
一二五九七 而も之を如何ともせず、
一二五九八 好んで利の在る所に就く者は、之を如何ともす可からざる者に於て、
一二五九九 將に之を如何ともせんとす、
一二六〇〇 慾を縦まにして養を忘る、
一二六〇一 情を蕩して身を忘る、
一二六〇二 難を見て散ず、
一二六〇三 利を逐いて聚まる、
一二六〇四 得喪存亡は。則ち同じからずと雖も。而も正を失するは則ち同じ。
一二六〇五 有する者は、徳なり、
一二六〇六 發する者は、道なり、
一二六〇七 車を推する者は之を豎にす、
一二六〇八 布を織る者は之を横にす、
一二六〇九 物の則を有する所以なり。
一二六一〇 無意なる者は、自から道に隨う、
一二六一一 有意なる者は、則に由ら使む、

(I 511b)

(PA III)

一二六一二

則そくに由よるは、之これを修しゅうと謂いう、

一二六一三

則そくを棄すてるは、之これを荒こうと謂いう、

一二六一四

君子くんしは未いまだ其その荒こうを以もつて。道徳どうとくと爲なさず。是この故ゆえに。

一二六一五

道どうに随したがう者ものは、天福てんふくを得える、

一二六一六

高こうを極きわむる者ものは、足あしを立たつるに難かたし、

一二六一七

満まんを持じする者ものは、手てに失しつするに易やすし、

一二六一八

美味びみは毒どくを含ふくむ、

一二六一九

美器びきは禍かを載のす、

* 一二六二〇

味みと器きと。美びなれば則すなわち美びなり。其その禍か機きを熟察じゅくさつすれば。則すなわち

一二六二一

奚いずくんぞ鳩ちんを玉饌ぎよくさんに和わし、

一二六二二

火ひを錦囊きんのうに裏つつむに異ことならん、

一二六二三

貧富ひんぷは相あい従したがう、

一二六二四

貴賤きせんは相あい伴ともなう、

一二六二五

富貴ふうきは何なんぞ必かならずしも之これを天福てんふくと謂いわん。是この故ゆえに。

一二六二六

痒よちを搔かきて痛快つうかいと呼よぶ、惟ただ同病どうびょうの人のみ之これに和わす、

一二六二七

藿まめを羹あつものにするも亦また聊いささか足たり、獨ひとり爽口そうこうの人のみ之これを愍あわれむ、

一二六二八

苟いやしくも地ちの爲ために遷うつらされ、

一二六二九―三〇

物ものの爲ために轉てんぜらるれば、則すなわち鳥いずくんぞ其その憂樂ゆうらくする所ところを憂樂ゆうらくするを得えん。

一二六三一
一二六三二
一二六三三
一二六三四
一二六三五
一二六三六
一二六三七
一二六三八
一二六三九
一二六四〇
一二六四一
一二六四二
一二六四三
一二六四四
一二六四五
一二六四六
一二六四七
一二六四八

搔痒そうようの快かいを樂たのしみ、

羹こうかく藿あじの味あじを憂うれうるは、 此これ世せい人じんの憂ゆう樂らくなり。

其その天てん福ふくを福ふくとせず、

其その人じん禍かを禍かとせず、

富ふう貴きに朶だい頤いす、

歡かん樂らくに引いん涎えんす、

蔬そ食しょく藍あいろう縷しゆく 疾しゆく苦くの地ちと爲なす、

快かい意い縱じゆう慾よく 得とく意いの地ちと爲なす、 夫それ

名めい譽よは人ひとを動うごかせば、 則すなわち人ひとは必かならず垢あかを洗あらいて癩きずを求もとむ、

功こう業ぎようは世よを蓋おほうれば、 則すなわち世よは必かならず膽たんを墜おとして後のちを畏おそる、

甘かんと雖いえども毒どくを合あむ、

美びと雖いえども禍かを載のす、

未いまだ其その道どうに達たつせず。而しかして

毒どくは饌さんより出いで、 火ひは囊のうより發はつすれば、 則すなわち悟さとると雖いえども亦また既すでに晚おそし。

勢せいに忤さからう者ものは、 人じん禍かに遇あう、

君くん子しは間かん暇かを從し容ようす。

道どうに離はなれず、

勢せいに忤さからわず、

一二六四九
一二六五〇
一二六五一
一二六五二
一二六五三
一二六五四
一二六五五
一二六五六
一二六五七
一二六五八
一二六五九
一二六六〇
一二六六一
一二六六二
一二六六三
一二六六四
一二六六五
一二六六六

如し二者を全うすることを得ざれば。則ち勢を問わず。

志士は、激励憤發、守を遜にして勢に處すること能わず、

身を殺して義を害する有り、

怯者は、勢を畏れて邪正を問う無し、

利者は、勢に走りて可否を問わず、

天禍を安んじ、人福に矜らざるは、君子の恬なり、

人福に喜び、天禍に安んぜざるは、小人の操なり、

天人。機は常に触れ。勢は常に走る。故に

人と無く。物と無く。智愚と無く。強弱と無く。

紛若として此の中に遊ぶ。

道なる者は、徳の發なり、

徳なる者は、道の有なり、

勢なる者は、力の走る所なり、

力なる者は、勢の立つ所なり、

天人は各おの然り。故に

徳は至れりと雖も、而も勢に據らずば則ち困す、

道は正なりと雖も、而も力無ければ則ち窮す、
惟だ

上なる者は、宜しく之に據るべし、

一二六六七
一二六六八
一二六六九
一二六七〇
一二六七一
一二六七二
一二六七三
一二六七四
一二六七五
一二六七六
一二六七七
一二六七八
一二六七九
一二六八〇
一二六八一
一二六八二
一二六八三
一二六八四

下なる者は、宜しく之に従うべし。

宜しく之に據るべくして、而して之を縦まにすれば、

宜しく之に従うべくして、而して之を竊めば、

道を捨てて勢に従えば、廉恥の心を用うる所無し、

道を離れて勢を弄せば、縦肆の慾を逞しくせざる所無し、

道に厭厭し、勢に従容たれば、則ち處に隨いて樂しむ、

勢に揣摩し、道に婆娑たれば、則ち樂地有りと雖も、得て安んぜず、故に

勢力に事うる者は、道を見ず、

道徳を修むる者は、勢を忘る、

勢は力を以て強なり、故に理の上に於て伸び易し、

理は道を以て明なり、故に勢の下に於て屈せず、

爲に可否有り、

遇に幸不幸有り、

爲の可否は、素より事の前に於て定まる、

遇の幸不幸は、更に事の後に於て定まる、

爲す者は預じめす可く、

遇う者は預じめす可からず、

預じめ遇う者を謀れば、

則ち上下の情離る、

則ち上下の道亂る、是を以て。

一二六八五
 一二六八六
 一二六八七
 一二六八八
 一二六八九
 一二六九〇
 一二六九一
 一二六九二
 一二六九三
 一二六九四
 一二六九五
 一二六九六
 一二六九七
 一二六九八
 一二六九九
 一二七〇〇
 * 一二七〇一
 一二七〇二

可否を擇ぶに意無し、

預じめ爲す者を擇べば、

幸不幸を問うに違あらず、故に

遇う所の幸不幸の跡を執り、

爲す所の可否の實を察せず、

毀譽是非する所。未だ聲主の道を得ず。故に

有意に務めて、而して無意に任す者は、天を怨まず、

有作に務めて、而して有爲を受く者は、人を尤めず、

致す者は、我が機なり、

至る者は、他が機なり、故に

諸を人に在るの機に求めず、而して

己よりするの機に慎しむ。

苟くも此の機を察せざれば。則ち

過ちを己に於て恕す、

備えを人に於て求む、

柔を責むるに剛を以てす、

剛を責むるに柔を以てす、是れ乃ち人を恐るるなり。

人なる者は、有意にして爲す、

一二七〇三 天なる者は、無意にして成る、故に

一二七〇四 殺活予奪の爲、

一二七〇五 死生通塞の成、參差にして遇す。豈に天を怨まんや。

一二七〇六 道を履めば、則ち仰ぎて作る無し、

一二七〇七 徳を修めば、則ち内省して疚しからず、

一二七〇八 是れ乃ち天を樂しむ者なり。

一二七〇九 履むや則に循う、遇は焉んぞ正ならざらん、

一二七一〇 履むや則に失す、遇は焉んぞ非ならざらん、惟だ

一二七一〇 目を病めば則ち亂花を大虚に於て看る、

一二七一一 耳を病めば則ち蟬噪を空漠に於て聽く、窺窬の病を爲すなり。

一二七一二 福は必ず善人に於てし、

一二七一三 禍は必ず不善人に於てするか、否なり、

一二七一四 舊福は果たして善人に於て期せずして、

一二七一五 禍は果たして不善人に於て期せざるか、否なり、

一二七一六 蓋し天人は各おの其の能くする所を有す。惟だ

一二七一七 能く天を轉じて人を爲す、其の有意を以て、而して

一二七一八 喜怒愛憎、殺活予奪は、是れ人の能くする所なり、

一二七一九 惟だ人を容れて天を成す、其の無意を以て、而して

一二七二〇

一二七二一
一二七二二
一二七二三
一二七二四
一二七二五
一二七二六
一二七二七
一二七二八
一二七二九
一二七三〇
一二七三一
一二七三二
一二七三三
一二七三四
一二七三五
一二七三六
一二七三七
一二七三八

聚散往來、死生通塞は、是れ天の能くする所なり、

憎みて其の亡びんことを思う、

愛して其の榮えんことを思う、

縦使、其の事の正に出づるも、亦た有意の私なり。

況んや其の未だ全く正に出でざるをや。

無意を窺うに、

有意を以てす、故に

報應に惑い。又た其の必とし難きに疑う。

無意にして爲す者は、天なり、

無作にして成る者は、誠なり、

往きて停らざる者は、勢なり、

來りて當たる者は、時なり、

往きて回らす可からず、
當りて避ける可からず、是を以て。

機を轉じ勢を回らす者は、人の能なり、

機轉じ勢回る者は、人の能とする所に非ざるなり、是の故に。

死生通塞なる者は、天なり、

之を死し之を生し、之を通じ之を塞する者は、氣なり、

一二七三九

一二七四〇

一二七四一

一二七四二

一二七四三

一二七四四

一二七四五

一二七四六

一二七四七

一二七四八

一二七四九

一二七五〇

一二七五一

一二七五二

一二七五三

一二七五四

一二七五五

一二七五六

死し生せい通つう塞そくを致いたす者ものは人ひとなり、

今いま將まさに一定いつていの理り數すう報ほう應おうを以もつて。以もつて命めいを論ろんず。

辨べんは懸けん河がの如ごとしと雖いえども。亦またた識し者しゃ惑まじるなり。

或あるいは有う意いを天てんに於おいて望のぞみ。或あるいは禍か福ふくを理りに歸きす。

或あるいは諸これを自ご使しに偏へんにし。爲い成せいの分ぶんに罔くわうし。而しかして天てん命めいの事じに惑まじるなり。

慎つしみて天てん人じんを辨べんず、

能よく致ち至しを分わかつ、

熟くわしく之これを古こに稽かんう、

深ふかく之これを今こんに量はかる、

可か否ひを知しりて、

損そん益えきを審つまびら

衆しゆうの好こう惡おする所ところを察さつす、

百ひゃつ家の是ぜ非ひする所ところを考かんう、

能よく體たいし能よく付はかる、

容いるること廣ひろく擇えらぶこと審つまびらにして、

諸これを事じ物ぶつに推おして謬あやまらず、

諸これを天てん地ちに試こころみて差たがわず、

權けんは經けいに合がつ。義ぎは宜ぎに適てきす。禮れいは中あたり。智ちは通つうじ。用ようは活かつし。應おうは變へんず。

一二七五七
一二七五八
一二七五九
一二七六〇
一二七六一
一二七六二
一二七六三
一二七六四
一二七六五
一二七六六
一二七六七
一二七六八
一二七六九
一二七七〇
一二七七一
一二七七二
一二七七三
一二七七四

内に於て有する者は安んず、
外に於て行なう者は歉たり、

有する者は發す、

發すれば則ち行わる、

有は、徳なり、

行は、道なり、

天は無意を徳とし、成を道とす、

人は有意を徳とし、爲を道とす、

人は、爲して成る能わず、

天は、成りて爲す無し、故に

君子は爲に務めて、成に謀らず、

小人は成に求めて、爲に務めず、

成るを求めて爲す者は、悔いること多し、

爲して成るを望む者は、尤めること多し、

意は善悪を統ふ、

爲は邪正を具す、有す宜くして有す。

行ふ宜くして行ふ。而して後、君子の道德なり。是の故に。君子は。

人の同じく欲せざる所の者を徳とせず、

一二七七五
一二七七六
一二七七七
一二七七八
一二七七九
一二七八〇
一二七八一
一二七八二
一二七八三
一二七八四
一二七八五
一二七八六
一二七八七
一二七八八
一二七八九
一二七九〇
一二七九一
一二七九二

己おのれの獨ひとりする所ところの者ものを 道どうとせず、

人ひとの同おなじく欲ほつする所ところを得えれば、則すなわち其その徳とくや美びなり、

己おのれの獨ひとりする所ところに由よれば、則すなわち其その道どうや偏へんなり、

嘉穀かこく美材びざい有ありと雖いえども、耘籽うんし灌培かんばいせざれば、則すなわち成ならず。故ゆえに

道徳どうとくも修おさめざれば、我われの所謂いわゆる道徳どうとくに非あらず。

修しゅうとは、耘籽うんし灌培かんばいの謂いなり。耘籽うんし灌培かんばいせざれば、則すなわち長ちやうぜず。

如もし果はたして長ちやうぜざる可べくんば、則すなわち孰いずれか敢あて耘籽うんし灌培かんばいせん。

内交ないこう外修がいしゅうして、而しかして偏廢へんはいせず。

安いずくんぞ之これを有うし。正ただしくして之これを行おこなわんや。

耘籽うんし灌培かんばいの功こうは大だいなり。

修しゅうを觀みて目もくして偽ぎと爲する者もの有あり、是これ

將まさに秕ひえん麩あまを甘あまんじて食くらいて、而しかして耘籽うんし灌培かんばいに荒こうせんとす、

修しゅうを以もつて聖せいを誣そしる者もの有あり。

將まさに櫟よしやう樟てんの天さんに參かするを禾かひやう苗おいに於のぞて望のぞまんとす、

有うする者ものは己おのれに足たれば、則すなわち外そとに務つとめて物ものに徇したがわず、

行おこなう者ものは則そくに循したがえば、則すなわち荊けいきよく棘ひらを披がんがいにおか冒おかさず、

徳とくや、諸これを天てん地ちに求もとめて、有あらぬ所ところ無なし、

諸これを毛もう髮はつに尋たずねて、得えざる所ところ無なし、

一二七九三
一二七九四
一二七九五
一二七九六
一二七九七
一二七九八
一二七九九
一二八〇〇
一二八〇一
一二八〇二
一二八〇三
一二八〇四
一二八〇五
一二八〇六
一二八〇七
一二八〇八
一二八〇九
一二八一〇

道や、諸を宇宙に放ちて、行せざる所無し、

諸を涓埃に置きて、發せざる所無し、

天地は既に之を捨つること能わず、

鬼神は安んぞ之を外にす可きや、

物有れば必ず則有り。則なる者は理の所在なり。

則を得て徳成る、

則に由て道立つ、

得を以て徳を爲す、猶お善惡の心に戦うなり、故に

成徳なる者は、之を己に於て有する在り、

由るを以て道と爲す、猶お邪正の前に争うなり、故に

(傍記につき削除。)

得る者は宜しく擇ぶべし、

由る者は宜しく審かにすべし、

有る者は宜しく養うべし、

行う者は宜しく慎しむべし、

仁者は、得て之に居る、

義者は、由て之を行う、

智者は之を知る、

一二八一
一二八二
一二八三
一二八四
一二八五
一二八六
一二八七
一二八八
一二八九
一二八〇
一二八一
一二八二
一二八三
一二八四
一二八五
一二八六
一二八七
一二八八
一二八九

能者は之を能くす、

之を得んと欲して教を信ぜず、

之に由んと欲して則を求めず、

志は則ち是なり、

爲す所は則ち非なり、故に

之を得て之に由るは、問學に在り、

之を有し之を行は、自達に在り、而して

徳は衆を安んずるより大なるは莫し、

道は物を濟すより、大なるは莫し、天下の成功なり。

夷險は一ならず、

情態は各おの異なるなり、故に

大道は小道を廢せず、狹斜隘巷も、以て資る所有り、
大徳は小徳を捨てず、硜硜嚶嚶も、以て用いる所有り、
惟だ

沾沾として小徳に甘んじ、

規規として小道を求むるは、大人なれば爲さず。

涼徳は人を害す、故に之を懲す、

左道は衆を惑す、故に之を塞ぐ、

左道 塞がれば、則ち衆望正し、故に濟物の功立つ、

一二八二九
 一二八三〇
 一二八三一
 一二八三二
 一二八三三
 一二八三四
 一二八三五
 一二八三六
 一二八三七
 一二八三八
 一二八三九
 一二八四〇
 一二八四一
 一二八四二
 一二八四三
 一二八四四

涼徳 徴すれば、則ち衆害弭む、故に安衆の澤成る、故に
 之を以つて勢に據る者は、大に制作して以て化を世に被る、
 勢無くして之に任ず者は、能く祖述して以て教を後に垂る、
 制作する者は、君の事なり、
 祖述する者は、師の任なり、
 之に志す者は、志士なり、
 之を爲す者は、聖者なり、
 損益を知らざる者は、制作する能わず、
 小大を辨ぜざる者は、教えを垂ること能わず、故に
 人をして雍雍の化を被ら使めざるは、君の不能なり、
 人をして正大の道を履ませめざるは、師の不良なり、故に
 天を知り命を知るは、學者の務めなり、
 命に安んじ天を楽しむ者は、聖者の事なり、
 事に於て聖に従わずんば、難きかな免かれんことを。

(I 514a)

(PA 117, I 514b)